

楚雪餘聞第一

15
1560
10



印  
林

横

木

木

木

木

横



横



12

品

001-02-0E 37 .072

122

聖  
年  
月  
日  
氏  
贈

門 15  
號 1560  
卷 10

37 5554

吟文

已  
已  
十  
已

中  
非



雪  
餘  
南

第十

了  
了  
了

日

上



122

工段

三般 80

第十一 目次

- 緒言
- 伊藤伯 / 演述
- 文字 / 沿革
- 英語 / 落語
- 露國 / 景況
- 松村任三氏 / 書簡
- 松村任三氏 = 質ス
- 獨乙語 / 學藝上 = 適當ナル
- 十一ノ原數トシタル 數字組織法
- 五十年前 / 獨乙國
- 十餘年前 / 日本國
- 人身 / 化學的組織
- 獸類 = 於ケル 煙草毒
- 吉田松蔭氏 / 了
- 英佛獨三國人情
- 王乃世履氏逝去
- 英國憲法立法 / 大略摘要
- 物價騰貴低下 / 理
- 本邦金銀貨幣 / 了
- 日本橋魚市場 / 沿革
- 菅原文時封吏
- 三善清行封吏

中扉裏表

富士樓印才カモトヤ印行

No.

No.

下段

中段

詩歌七篇

畢馬克公ノ逸史

落語二件

九十九里濱漁村維持ノ習慣

古來救貧法沿革

英國司法令制定顛末

追放令ノ

物價ノ沿革

佛僧ノ力ヲカリテ興リシ事業

維新財政ノ困難

日本支那古律ノ比較

物價論

獨語

2/35

富士樓印才カモトヤ印行

横

129

5°

二  
下  
字

下

螢雪餘聞 第二十八卷

結言 合三行

余ノ螢雪餘聞ハ墨藝ノ閑スルトハ云ニ及  
ハス何ニマレ有益トカ面白トカ思ヒ

ニモ一ハ集録スルノ意ナルトハ第一卷ノ

緒言ニ述ヘテ思ハク政行以來墨藝ニ時

ヲ逐ハレ新書紙其他ニリ草録スルノ暇マ

己甚々乏シク爲ニ筆冢ニ粗漏ニ深リ誤レ

ハ其例ニ之ヲ書スル杯甚々急情ノ性ヲ顯

ス如クテレハ是止ヲ得ヤルニ出ル又英

獨日本何レノ書カニテ記スルニ足ルト

セハ即チ切斷テ之ニ張付ルト又洋文

或ハ日本文ニテハ羅馬字ヲ以テスルカ

ハ或ハ羅マニ付セサルトセリ後日ニ

至リ以テ今日ノ學ヲ知ルハナシ

於此ニ國益ヲ爲山學人

□□

8月  
イ  
イ

伊藤

頁  
第  
十  
一

三	合	け	が	五	し	府	迷	あ	り	累	り	こ	新	従	領	閣	日	〇	三
町	世	戸	幾	町	二	の	べ	ら	費	を	抑	煩	の	來	を	の	伊	地	イ
位	百	數	百	を	十	制	以	し	用	有	も	粗	際	各	左	於	藤	方	藤
の	所	日	年	合	五	の	二	め	節	つ	郡	多	専	地	二	内	内	制	伯
十	近	又	の	せ	軒	往	地	さ	減	の	區	端	ら	方	摘	閣	閣	度	伯
組	き	月	久	一	一	古	方	る	の	な	民	官	地	大	載	總	總	改	伯
と	の	又	き	組	町	五	制	可	途	れ	の	民	方	小	す	理	理	良	伯
な	大	増	至	と	と	軒	度	べ	を	バ	の	の	の	區	た	大	大	に	伯
り	組	加	り	し	し	を	の	ら	立	勉	區	不	適	畫	ら	臣	臣	就	伯
遊	と	し	人	之	町	五	改	ホ	て	め	畫	便	宜	及	た	が	が	て	伯
小	な	遊	民	年	小	人	良	依	施	て	最	云	料	比	る	地	地	の	伯
往	り	最	蕃	行	年	組	を	て	政	土	も	可	理	戸	趣	方	方	伊	伯
古	又	寄	殖	事	寄	と	促	差	を	地	人	可	す	長	意	制	藤	藤	伯
の	ハ	の	し	二	役	な	さん	小	し	民	民	ら	る	の	を	度	首	相	伯
制	五	町	土	人	一	い	と	府	て	の	の	ら	處	制	聞	改	相	の	伯
度	六	々	地	を	人	頭	す	町	阻	民	密	ら	係	ハ	得	良	の	演	伯
亂	町	互	稍	設	有	一	元	村	滞	の	接	る	を	大	た	の	演	述	伯
れ	より	互	く	け	り	人	來	沿	す	便	の	を	以	政	れ	述	述	頃	伯
て	二	組	用	し	十	を	都	革	處	を	の	あ		維	バ	頃	頃		伯
繁										圖	あ				其	内			伯

伊東屋製



横

不  
行

2  
8  
本

伊  
制  
1  
2  
0  
11

殖を極めしも明治元年京都太政官が於て府藩  
 一定の規則を立て人民撫育永世不朽の趣旨を  
 以て施政上改良を行ふと雖ども而も此の措置  
 たる舊來の所組の制と一大變更を興へ創草の  
 際尚且舊慣の容易不更む可からざるを案し廣  
 く輿議を取らるの方を示せしむ過お同二年三  
 月郡市中制法及町村役心得條目を制定して之  
 を頒布したれども當又人民の心得と町村役の  
 職制を定めたるもの如く又して同々事刑法  
 に属す可きものあり或は治罪法又順す可きも

のあり又行政の處分を属するあり人々の心  
 得を付するあり實又煩雜多端之を要するに干  
 渉の治たるを免れおと雖ども官民共に怪まざ  
 りしり又以て當時一般の暈状を窺ふ足れり  
 而して元年より二年に至るまで町村の制を  
 更し若くは名主を廢したるは唯京都東京の二  
 府に過お同四年に至り一般に戸籍法改正の  
 布告を施し始め全國町村の制を更革せり而  
 れとも此の區畫たる戸籍の整理よりおて  
 ものおして一般の行政區畫をあらお其町村の

伊東屋製

原  
力  
加  
答

8  
本

2

別

し  
い

設 亦 之 を 半 官 半 民 の 間 を 置 け り 然 れ と も 從 前	る 又 忍 ぶ 事 情 あ ら ん を 以 て 未 だ 一 定 の 法 を	け り 然 れ と も 當 時 未 だ 官 吏 に る の 資 格 を 有 す	る を 以 て 更 に 同 七 年 之 を 官 吏 に 準 お る 旨 を 布	恰 も 行 政 區 外 に あ る 如 き 狀 あり 彼 此 相 調 は さ	生 じ 加 之 な ら ば 區 長 を 民 屬 に お き 置 け ば 町 村 ハ	固 着 し 朦 昧 の 羈 絆 を 脱 せ お 此 向 種 々 の 弊 害 を	め て 施 治 の 法 を 計 と 雖 も 奈 せん 人 民 尚 舊 慣 又	撰 擇 し 任 せ 之 を 人 民 總 代 の 如 し 一 致 協 合 せ し	益 々 地 方 政 治 を 改 良 せ ん と 欲 し 先 戸 長 を 人 民	處 と な り 頗 る 便 益 を 見 る に 至 れ り 此 時 に 方 り	以 是 野 村 の 理 事 ハ 一 小 戸 長 副 戸 長 の 總 括 す る	年 等 等 を 廢 す 可 き 旨 を 布 告 せ り	不 便 甚 か ら ぶ に 付 同 五 年 四 月 斷 然 庄 屋 名 主	す る を 以 て 事 兩 端 に 涉 り 反 て 混 雜 の 弊 を 生 じ	長 の 名 稱 職 制 定 ま ら ば 各 地 尚 庄 屋 名 主 等 を 存	一 月 縣 治 條 例 の 發 布 あり と 雖 も 未 だ 一 般 戸	制 を 異 に せ り 同 年 七 月 廢 藩 置 縣 の 令 出 で 其 十	と す る 處 に 放 任 し て 一 定 の 法 則 な き 故 各 地 其	制 置 と す る 大 小 の 區 畫 と 云 ひ 孰 れ も 各 地 の 便
--	---	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	---	--	--	--

伊東屋製

28

ル  
レ

は	す	位	の	す	村	を	人	心	る	の	長	定	と	會	を	實	制	費	區	の
る	る	賤	進	る	會	相	民	を	か	區	の	し	同	議	施	に	を	用	畫	區
べ	場	劣	歩	法	議	渡	に	満	故	畫	區	て	時	を	大	是	も	亦	畫	の
か	合	未	を	を	を	す	於	足	其	ハ	畫	々	々	開	な	又	不	亦	畫	の
ら	々	だ	促	施	擴	可	て	せ	人	ハ	畫	々	々	い	爾	甚	依	亦	畫	の
ぶ	達	政	せ	且	充	き	公	し	民	ハ	畫	々	々	て	來	依	一	亦	畫	の
る	せ	治	り	更	す	旨	撰	め	興	ハ	畫	々	々	其	益	十	一	亦	畫	の
を	お	上	而	又	の	を	せ	不	望	ハ	畫	々	々	協	地	年	七	亦	畫	の
察	濫	の	北	教	目	達	め	為	係	ハ	畫	々	々	費	方	月	月	亦	畫	の
し	弊	得	と	育	的	せ	府	戸	所	ハ	畫	々	々	を	の	を	以	亦	畫	の
更	百	失	も	會	を	以	知	長	者	ハ	畫	々	々	議	進	七	七	亦	畫	の
々	出	を	我	を	以	て	事	の	を	ハ	畫	々	々	す	歩	を	以	亦	畫	の
十	遂	享	地	施	其	又	縣	成	を	ハ	畫	々	々	の	を	以	亦	畫	の	の
七	々	受	方	し	議	十	令	可	舉	ハ	畫	々	々	權	促	以	亦	畫	の	の
年	々	し	人	地	權	三	より	く	け	ハ	畫	々	々	を	し	以	亦	畫	の	の
を	の	之	民	方	を	年	辭	所	以	ハ	畫	々	々	概	行	以	亦	畫	の	の
以	制	を	た	人	公	區	令	以	て	ハ	畫	々	々	回	の	以	亦	畫	の	の
て	度	利	る	民	定	町	書	て	人	ハ	畫	々	々	を	制	以	亦	畫	の	の
再	行	用	尚	品				人	人	ハ	畫	々	々	す	宜	以	亦	畫	の	の
び	行	用	品					人	人	ハ	畫	々	々	す	宜	以	亦	畫	の	の

伊東屋製

政

横  
2/8  
ん  
い

底望む可からず故に戸長を公選せしむると同  
 其目的を達せざるのみならず地方の進歩に到  
 り其弊害萌生して甚措置前年と差違なく終に  
 ども徒ら之を各人民に放任して省みざるとき  
 の意見又従つて進退を決定せざる可からず然れ  
 と直接の關係ある總代理人にして而て多數人民  
 日地方制度を改革せんとせば戸長をして人民  
 するの第一着は戸長の選任如何あり依て今  
 施行するものハ戸長なり故に地方制度を改革  
 を施さざる可からず夫れ地方廳の處分を實地  
 立憲政治の基礎を設るに於て期す可からず故に  
 も又其方法を一新し人民の便利とする處に從  
 ひ自ら適宜の組織を爲し以て町村自治の制度

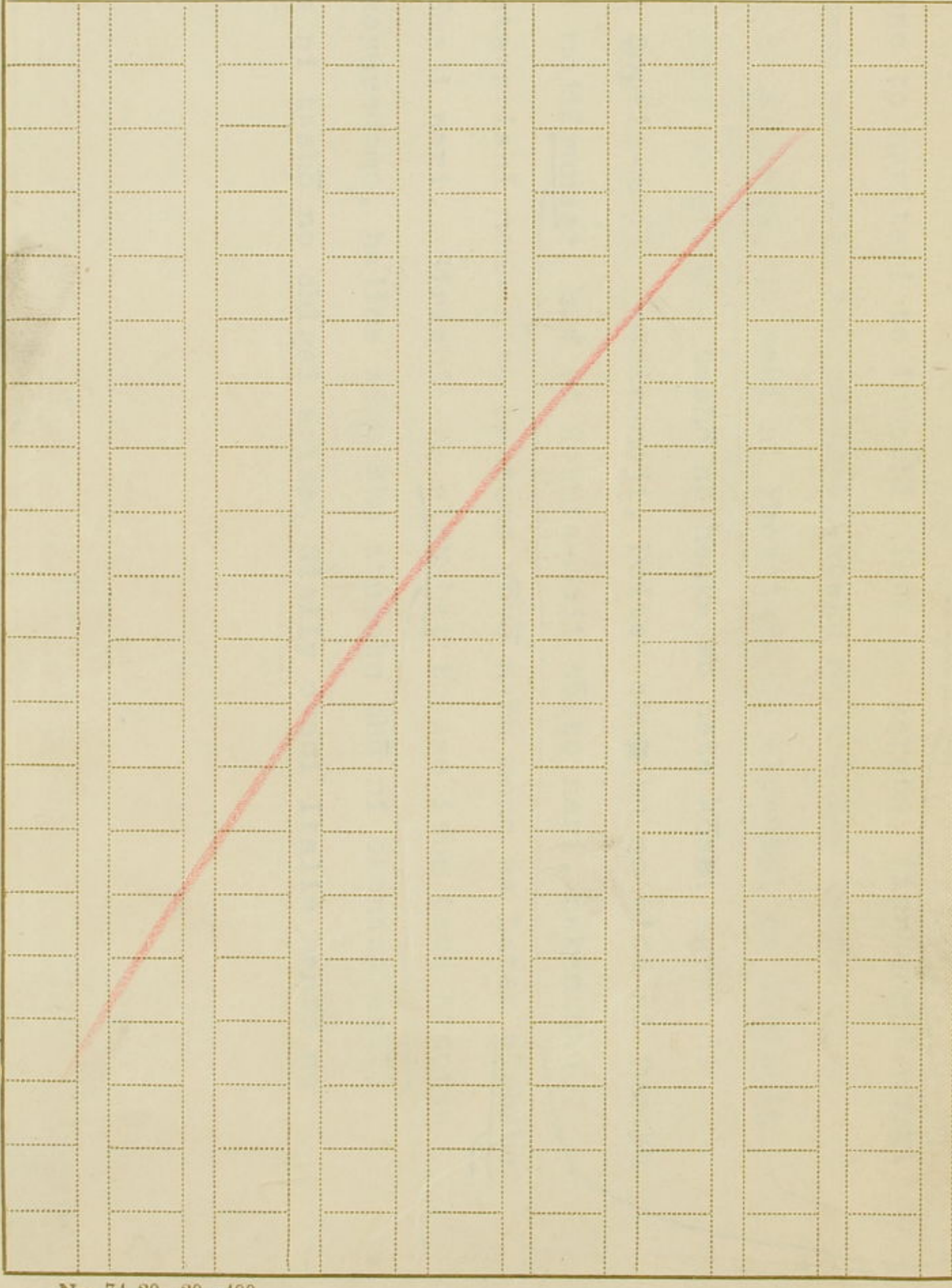
戸長を官選し歸し地方をして干渉政治を行は  
 しめしは是れ時勢の然らめたる處にして又  
 止を得ざる由是之を觀れば地方の制度た  
 る一變一更殆んど底止する處を知らずと雖ど  
 も之を要するに干渉の中は彷徨して度も進歩  
 の兆を見ざるなり而て社會の活動體とし  
 て其變動の一日を以て期す可からず故に今  
 立憲政治の基礎を設るに於て期す可からず故に  
 も又其方法を一新し人民の便利とする處に從  
 ひ自ら適宜の組織を爲し以て町村自治の制度

伊東屋製

横  
8  
ヒ

時<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>最<sup>さい</sup>重<sup>じゆう</sup>の<sup>の</sup>選<sup>せん</sup>擧<sup>きよ</sup>法<sup>ぽう</sup>を<sup>を</sup>制<sup>せい</sup>定<sup>てい</sup>し<sup>し</sup>苟<sup>くわう</sup>も<sup>も</sup>郡<sup>ぐん</sup>町<sup>ちやう</sup>村<sup>そん</sup>の<sup>の</sup>事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>  
 に<sup>に</sup>差<sup>さ</sup>支<sup>し</sup>を<sup>を</sup>生<sup>しやう</sup>ず<sup>ず</sup>る<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>は<sup>は</sup>何<sup>なん</sup>時<sup>とき</sup>も<sup>も</sup>之<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>改<sup>かい</sup>選<sup>せん</sup>す<sup>す</sup>  
 の<sup>の</sup>準<sup>じゆん</sup>則<sup>そく</sup>を<sup>を</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>且<sup>かつ</sup>之<sup>これ</sup>に<sup>に</sup>加<sup>くわ</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>府<sup>ふ</sup>縣<sup>けん</sup>會<sup>かい</sup>擧<sup>きよ</sup>の<sup>の</sup>  
 法<sup>ぽう</sup>を<sup>を</sup>改<sup>かい</sup>正<sup>せい</sup>し<sup>し</sup>其<sup>その</sup>權<sup>けん</sup>力<sup>りき</sup>を<sup>を</sup>増<sup>ぞう</sup>加<sup>か</sup>し<sup>し</sup>成<sup>な</sup>る<sup>る</sup>可<sup>べ</sup>く<sup>く</sup>政<sup>せい</sup>權<sup>けん</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>  
 般<sup>ぱん</sup>に<sup>に</sup>配<sup>はい</sup>布<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>利<sup>り</sup>益<sup>えき</sup>を<sup>を</sup>全<sup>ぜん</sup>州<sup>しゆう</sup>に<sup>に</sup>附<sup>ふ</sup>與<sup>よ</sup>し<sup>し</sup>公<sup>こう</sup>平<sup>へい</sup>の<sup>の</sup>處<sup>しよ</sup>置<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>  
 ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>要<sup>えう</sup>す<sup>す</sup>果<sup>はた</sup>して<sup>して</sup>然<sup>しか</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>永<sup>えい</sup>世<sup>せい</sup>不<sup>ふ</sup>朽<sup>きう</sup>の<sup>の</sup>改<sup>かい</sup>良<sup>りやう</sup>  
 も<sup>も</sup>容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>爲<sup>な</sup>す<sup>す</sup>得<sup>え</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>可<sup>べ</sup>き<sup>き</sup>なり<sup>り</sup>實<sup>じつ</sup>に<sup>に</sup>地<sup>ち</sup>方<sup>ほう</sup>政<sup>せい</sup>務<sup>む</sup>  
 の<sup>の</sup>改<sup>かい</sup>良<sup>りやう</sup>は<sup>は</sup>今<sup>こん</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>大<sup>だい</sup>急<sup>きふ</sup>務<sup>む</sup>と<sup>と</sup>し<sup>して</sup>徒<sup>いた</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>度<sup>ど</sup>外<sup>がい</sup>に<sup>に</sup>放<sup>はう</sup>  
 棄<sup>き</sup>す<sup>す</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>直<sup>たぢ</sup>に<sup>に</sup>往<sup>わう</sup>日<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup>現<sup>げん</sup>象<sup>しやう</sup>を<sup>を</sup>視<sup>し</sup>て<sup>て</sup>將<sup>しやう</sup>  
 來<sup>らい</sup>の<sup>の</sup>制<sup>せい</sup>度<sup>ど</sup>を<sup>を</sup>立<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>尤<sup>もと</sup>も<sup>も</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>やう</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>て</sup>茲<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>

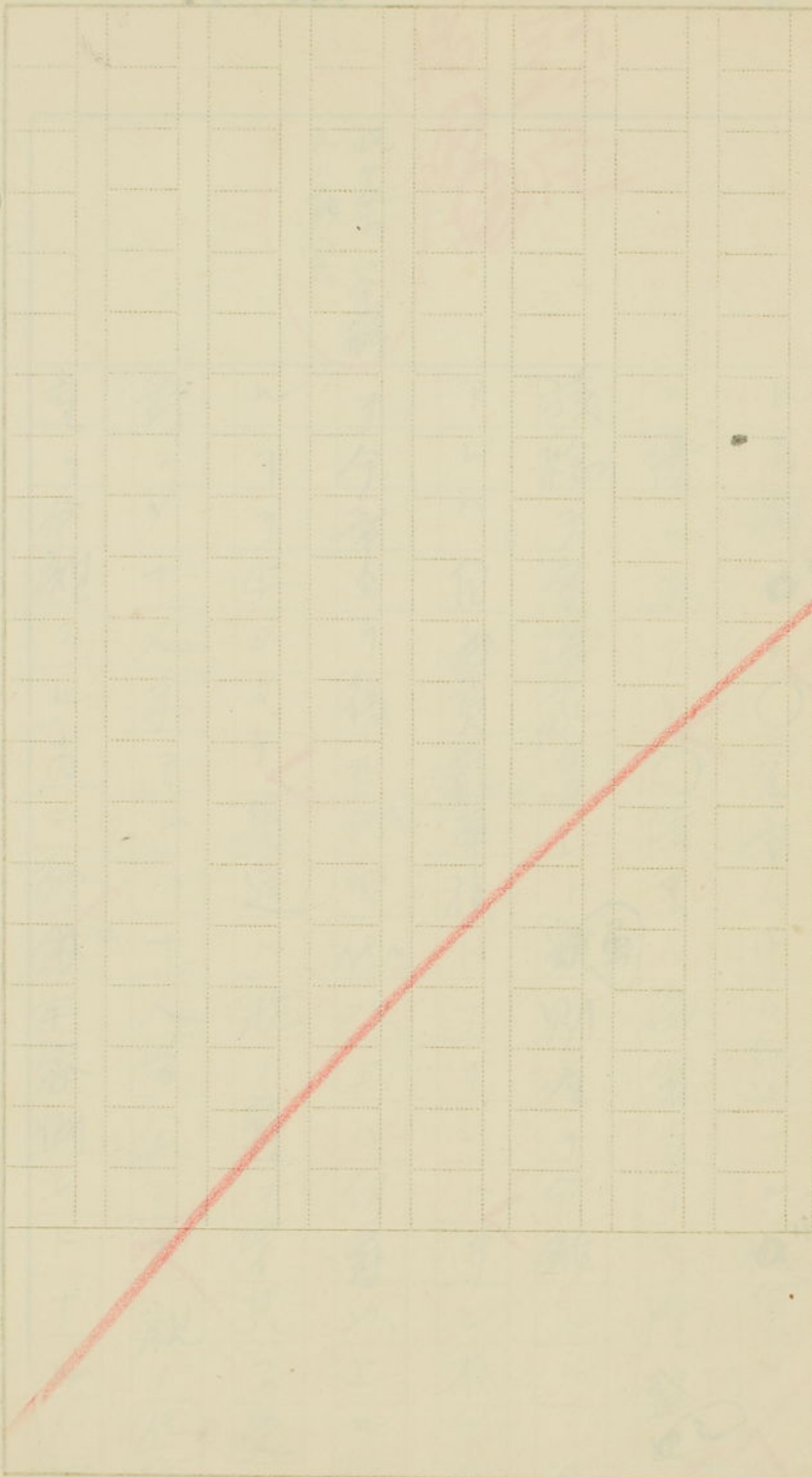
沿<sup>えん</sup>革<sup>かく</sup>を<sup>を</sup>陳<sup>ちん</sup>べ<sup>べ</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>て</sup>各<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>臣<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>を<sup>を</sup>向<sup>むか</sup>ふ<sup>ふ</sup>云<sup>い</sup>々<sup>々</sup>



伊東屋製







一  
家

Father Confessor! I've come to confess.	Yes! child, yes!
Father Confessor! I've stolen a pig.	Oh! child, oh!
Father Confessor! I'll give you the half.	No! child, no!
Father Confessor! I'll give you the whole.	Yes! child, yes.

三  
案  
井

り	ノ	米	英語
後	僧侶	人	ノ
同	ヲ	ニ	落
如	ヲ	ニ	語
上	ク	ト	ノ
之	ニ	ヨリ	聞
ヲ	テ	ク	所
見	リ	ク	ニ
タ	ク	ノ	妙
リ	之	ノ	ノ
	ヲ	團	ノ
	々	々	ノ
	珍	聞	ノ
	ニ	ニ	ノ
	贈	教	ノ

伊東屋製



横

9  
お。

指頭  
注

此ヶ条ハ余解  
スル能ハス

友人薩州言忠今年八月連國之務に實見也  
 乙所ヲ報セし書簡ノ中ニ  
 ○土地賣ク人民少キ露土ノ間及ニ電力中々  
 合リ農産ニ從事セハ盛ナリ帝領地ノ廣キ美  
 二營々ニシテ一ノ部ノ入費ヲ差引利益ヲ得ル者  
 九百七十万〇八千ル一入ル  
 金アリ實ニ盛ニ〇ニスゴ一符十ん大郡ニ入ル  
 帝室ニ屬スル宝庫ニ宝物アリ其價何千萬万  
 十ん也毛知可ク金ドコ口力留價ノ宝在多シ  
 ○官吏多ク生活ニ苦シク若多キ日本ニ似  
 たり○近來豪家ハ皆田舎ニ入テ農産ヲ盛ニス  
 ンノ傾向アリ大郡ニ移住成ル事會社ヲ集テ  
 ン者稀ト〇皇室ハ中々盛ニテ性質ニ  
 二億ニ高アリ〇陸軍ハ海軍より毛隆盛ニ  
 族給テ金湯能多シト財源ヲ分給スルノ  
 アレハ但外實難事族トナリ之ト併ニ本年改メ  
 于今帝ヨリ後三億四億以上ハ何處迄ナリ  
 ントナ止メタリ是迄ハ親ノ爵ヲ皆其子受ケ  
 爵ニシテ十人子アレハ十人皆公ニ親ノ死後  
 重ヲ令嗣スル者ニ終ル事家例トナリ  
 打様

露國ノ景況

銀座 伊東屋製

横

三つ下

~~あ~~

ナリレヲ深ク伝束ヲ留リテ今筆ヨリ世説性  
トヤメタリト可ナリ云々

松林仕三氏ノ書簡

松村氏ハウルツルニ於テ即チ相見

ルヲ得共日ヨリ字教ニ付テ論セズ

今ハ二再ヒ其説ヲ記テ贈ラレタレト

ニ載セ合セテ余ハ其説ヲ異ニスル如ク

レハ之ヲ草メ氏ニ贈ラントス前冊南独漫

証草中ニ其論一添テセテ余ハ其説

可否ハ扱置ヤ其物家ニ字教上ノ

論ニ徒ラニ其專内ニノ偏セザルハ氏ノ

通帯理學者ト異ナル所ナリト信ス

伊東屋製

改文  
都  
長  
サハ  
文  
他  
ナ  
シ  
ヨ  
ヨ  
ヨ  
ヨ  
ヨ  
ヨ  
ヨ  
ヨ

No. \_\_\_\_\_

Würzburg, Aug, 25 nichi, 1886.

No. \_\_\_\_\_

Konoe Sama,  
Sono go wa \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

一行

組方

\_\_\_\_\_

松村  
氏  
ハ  
ウ  
レ  
ウ  
フ  
レ  
ヒ  
ニ  
於  
テ

松村  
氏  
三  
氏  
書  
簡

富士通印

Handwritten Japanese text at the top of the page, including the characters "横濱" (Yokohama).

Wingburg, Aug. 25<sup>th</sup> Wicki, 1886.

Kono Sama

Sono go wa go yosu mo ukagawazu, sadamete  
goldgen yoroshiki on ko<sup>u</sup>to to zonji tatematsuri soro,  
Nagamatsu <sup>u</sup>ji to-<sup>chi</sup> ye kaeri<sup>u</sup>te no hanashi ni yoreba  
Kakka shushi-ron wo on shidadame nasare, usei made on  
okuri kudasaru yo uketamari soro ni tsuki, hibi ~~ma~~ machi  
~~ma~~ <sup>ori</sup> mochi soro.

Sate shushiron wa yoi naranu koto ni soraidomo  
hyakuhun no koto wo miru ni tsukete mo masumasu sono kanyo  
naru koto wo satori moshi soro. Mashite waga Nippon no  
gotoki, hibi keihaku ni omomaku jidain ni wa mottomo hitsuyō  
to oboe soro. Hikkyō Nippon jin no hikutsu naru kokoro no  
ugokiyasuki, tainin no naki, nandemo ibaru koto wo saki ni suru,  
subete seishin ni tsuite ashiki koto wa <sup>u</sup>ohe Religion ni  
zasuru koto to gunkō makari ari soro.

Siyō nite wa kyōka to ii, shakai no rei to ii,  
seiji to ii, hōritsu to ii, Religion ni motozuka<sup>u</sup>aru wa nashi.  
Ima Nippon nite <sup>o</sup>ne Religion nite, nani ni <sup>u</sup>orite jimmu wo  
michibiki uru ya? Kōshi no oshite wo motte suru ka, Shina-fū no  
hikutsu ni nagaru; Shaka no oshite wo mahomobeki ka, kore  
Religion ni arazu, Isshu no <sup>u</sup>seishin wo michibiki ni tarazu.  
Mashite nemi-jimmu ni yomaru <sup>u</sup>mono domo nari.

Religion wa ningen ni kakubekarazaru mono to zonji  
soro. Bisumark no gotoki seijika ni tsuite, Religion wa muyō  
naru ka, hitsuyō naru ka wo kokoromiimi towan ni, kanarazu

Bible naku, tōya wa mina mugaku nishite,  
hito ni shigun no tota <sup>u</sup>naku, mata nin ni taigaru

hitsuyō nar<sup>an</sup> to kotaen to watakushi wa shinji soro.  
 Religion wa jin<sup>min</sup> ni yeki aru tomo, gai naki koto to shinji  
~~kan~~ soro. Tō Doitsu koku ni wa zūbun mushūkyō no mono  
 mo aru yōshi naredo, seifu nite wa sono mushūkyō no jin<sup>min</sup> wo  
 hanahada kirae<sup>u</sup> yoshi uketamawari soro.

Ima Nippon ga Seiyō kakkoku to kōsai wo nashi yuken ni  
 wa, Seiyō to onaji Religion wo hōzuru koto motto hitsuyō to  
 zonji soro. Ima made wa Nippon ni wa Religion nashi to itte  
 mo kanari. Hito unaruru ya kore ni Religion no koto wo oshiezu,  
 tada wake mo wakararu Rongo, Mōshi wo yomasuru nomi. Religion  
 naki kuni wa yaban-koku to itū mo kagen ni arazu.

Kono aida Monbu Sanjikkwan Hamao uji tō-chi ni kitaritaru<sup>a</sup>  
 toki, rei no gotoku shūshiron wo kokoromi ni kore ni t<sup>ok</sup>ishi ni,  
 sara ni wakerazu. Ima no jisei ni kanawazu to ii, aru wa  
 ikkoku no shūshi<sup>o</sup> wo aratamuru koto katashi nado to itaru nomi,  
 betsu ni giron nashi. Tōtei rei no ohne Religion no jin<sup>min</sup>  
 yūye Religion no koto wa wakarazu. <sup>a</sup>Kore ga<sup>u</sup> totoku jisei ni  
 kanawazu to wa motto mo wakarazaru ron nari. Ima no Nippon  
 sude ni jūbun ni kaika shite Religion mo yōsezaru chi-i ni  
 itaritaru ka, kesshite shikarazu. Sude ni yoki Religion Nippon  
 ni ari taran ni wa ima hodo wa jūbun no yoki kaika ni mo itari  
~~taru~~ ga, hikkyō Religion no tanomu beki naki Kōshi no oshie  
 nite assai wo kiwame taru yūye hikutsu no jin<sup>min</sup> wa <sup>u</sup>vo<sup>o</sup>sei shitaru  
 nari. Ima no jisei ni kanawazu to iiba, Seiyō shokoku nite  
 tsutomete shūkyō wo shakai yori nozokan to suru ka, kesshite  
 shikarazu to shinzu.

1938

Handwritten mark on the left edge of the page.



以人  
~~97~~  
お

別

所ナレハ足モキ之ヲ横作スルノ一人ナラント  
 信レヨリ一度見共説ヲ守クニ及テ初テ足  
 ハ習者一般ノ理者皆流ニ非サント知レリ  
 ノ言ニヨレハ足モ本邦ニアルハ同ノ宗教ヲ  
 横作シタリニカ今此地ニ有テ宗教ノ人心ヲ收  
 攬スル算出ヲ見ルニ及ニテ前非ヲ悟リ棄テ其  
 汝有テ論セヨルニ至レリト益々其非ヲ去  
 リ是ヲ取ルノ慮カナルニ服セリ是蓋ニ全カ足  
 ニ媚ツルニ非サント又足ハ全ノ宗教ニ説アル  
 ヲ知リ之ヲ取カント更ニ一書ヲ贈ル  
 其説ヲ述ヘン元ヲ説ク其後遷シ今日  
 ニ至リ再書ヲ添フスニ至ル懈怠慚愧ニ堪ヘ  
 サルサテ貴重中ニ宗教ノ汝有テ説カント  
 其全文ノ申テ蔽フ元ヨリ之ニ説ク  
 元ヨリ宗教ノ社会ニ使用スル者  
 此条ニ付テテノ意ヲ述ヘサレハ切トナ  
 レハ説ヲ述ヘントスレハ足ノ説ヲ及後ハ  
 ルニ説サレハナリ  
 扱物ノ今日ノ有様ハ無宗教トノ苦説  
 以テ見レハ中等以上ノ人之ヲ信セサレ  
 道ニ

銀座 伊東屋製

伊東屋製

~~12~~  
9

宗教十ヤニハ非スト信ス~~レ~~儒ノ一ハ知ラス佛ヲ  
 以テ單ニ哲理論~~ル~~宗教トス可カラザント云ニ  
 至テハ少シテ解セザン~~ル~~佛~~ノ~~元~~ノ~~佛~~ノ~~聖  
 ヲ訊ク讀マス佛教ヲ解ク知ル者ニ非サレ~~ル~~世  
 人ノ能ク佛教ヲ以テ宗教ニ非~~ス~~トス~~ル~~其理ノ  
 素~~レ~~所~~レ~~口~~ヲ~~見~~ル~~スニ甚ク甚ク~~ニ~~佛~~ノ~~理~~ノ~~人~~ノ~~生~~ノ~~尊  
 尚~~ニ~~一~~ノ~~哲~~ノ~~學~~ト~~スヘキモ~~レ~~ア~~ル~~ニハ~~ニ~~薩~~ノ~~人~~ノ~~ヤ  
 ルモ人~~ノ~~民~~ノ~~根~~ノ~~本~~ヲ~~導~~ク~~ニ是~~ヲ~~ス~~ト~~ス~~ル~~ハ~~ニ~~又~~ノ~~如  
 何~~ト~~ん~~ニ~~點~~ヲ~~指~~ス~~ヤ~~ノ~~カ~~ノ~~魯~~ノ~~民~~ニ~~對~~ス~~ルニ~~ニ~~天~~ノ~~堂~~ノ~~地  
 獄~~ノ~~説~~アリ~~因果~~ノ~~應~~ノ~~報~~ノ~~教~~アリ~~此~~ノ~~現~~ノ~~在~~ヲ~~以~~テ~~  
 未~~レ~~来~~ヲ~~説~~ク~~長~~ク~~遠~~ク~~之~~ヲ~~以~~テ~~是~~レ~~ニ~~作~~ス  
 ヤ~~ノ~~若~~シ~~其~~ノ~~説~~ヲ~~虚~~妄~~笑~~可~~シト~~ス~~ルハ~~ニ~~耶~~ノ~~蘇~~ノ~~教~~ノ~~境  
 ノ~~一~~卷~~ト~~ス~~ル~~ハ~~ニ~~バ~~イ~~カ~~ル~~ニ~~テ~~テ~~テ~~テ~~テ~~カ~~セ~~日~~子~~ニ~~テ~~  
 抑~~テ~~製~~シ~~タ~~リ~~ト~~カ~~其~~他~~大~~ノ~~洪~~ノ~~水~~バ~~心~~ル~~ノ~~一~~塔~~ノ~~物  
 才~~其~~他~~ノ~~教~~ノ~~百~~余~~ノ~~一~~皆~~之~~ヲ~~虚~~妄~~ト~~ス~~ト~~ス~~ル~~ニ  
 是~~レ~~カ~~ニ~~是~~ニ~~佛~~ノ~~耶~~ノ~~蘇~~ノ~~兩~~ノ~~教~~ノ~~優~~劣~~ハ~~非~~ル~~ニ~~テ~~テ~~又~~ノ~~佛  
 教~~ニ~~ハ~~其~~蘊~~奥~~ニ~~至~~リ~~テ~~人~~ノ~~哲~~ノ~~理~~ノ~~ア~~ル~~ア~~リ~~テ~~テ~~又  
 佛~~ノ~~ノ~~一~~論~~敵~~ノ~~一~~鋒~~ヲ~~防~~ク~~ニ~~足~~ヘ~~ル~~何~~ノ~~ソ~~ノ~~非~~カ~~セ~~日~~子  
 ニ~~テ~~万~~ノ~~物~~ヲ~~製~~シ~~タ~~リ~~ト~~説~~キ~~テ~~後~~ノ~~理~~ヲ~~考~~ル~~力~~地~~膚~~ヲ~~  
 若~~シ~~見~~レ~~テ~~テ~~高~~ノ~~祖~~ヲ~~抑~~テ~~出~~ス~~ル~~ニ~~自~~レ~~見~~テ~~テ~~テ~~狼~~ノ~~狽~~ノ~~其~~ノ~~

銀座 伊東屋製



~~107~~

~~458~~

説レテ註スセ七日ノ一日ノ今日ノカノ一日ノ人  
 非ス一ノ日ノ人ノ即チ教ヲ百ノ年ノトシ述ス辭ヲ設テテテ其  
 攻キ撃クテテ避ケテテノノ類ニ人ノ非ストシ述スレテ其ノ佛教  
 一ノ人ノ欠ク乏クアリ何ノヤト思フノノ既ニ云ハレテ佛僧  
 一ノ人ノ學ヲ十ノ是也又シ布教ノ道ニ接テテ是也佛僧  
 二ノ人ノ同クアリ加ヘ布教ノ道ヲ改ムセハ佛法何ソ  
 不可ナシノノ理ヲ三ノヤ佛教果人ノ精進ヲ率  
 フルニ足ラズカレ古ヘニ有テ朝野等之ヲ信セ  
 一ノ人ノ信ヲ也レ徳ヲ政ヲ代ニ至リ儒學盛ニ行  
 ハレ士令次上ノ者ハ奉テ之ヲ學ビカルカ故ニ  
 佛教ノ人意人文ノカ如クモ佛僧ノ佛教ヲ排セレ  
 ハ唯佛教ノ門戸ニ至ラズカレ佛天堂地獄説ヲ  
 駁セレニ止ムテ其體實ノ理ヲ擊破セレハ神  
 々シク佛僧ヲ排セレモ是一時ノ儀ハニ過スト  
 信スルモ又古ヘノ佛教ヲ以テ今日ニ布クテハ  
 則チ佛僧ハサレハレレ佛僧ノ見ヨ佛教中一ノ機  
 軸ヲ出シテ布教セレカガ二人心ヲ收攬ス得テ  
 一ノ人ノ今日ノ政ヲ二ノ收攬ノ義ヲ盡サシテハ  
 寧ロ口ヲ閉シテ佛教ノ二ノ欲スル内徒多ク見テ  
 毛知ルモ是ヲ以テ毛佛教ノ人心ヲ收攬スルニ

銀座 伊東屋製

巧拙

*[Handwritten scribbles]*

是うストスルカ<sup>○</sup>佛教ノ擴カ<sup>○</sup>ヲサ<sup>○</sup>ルハ唯<sup>○</sup>夕布教  
 ノ不定金ト僧侶ノ不学ニ根スルノ<sup>○</sup>貴論中宗  
 教ノ勸ヲ説<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>何<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>スル<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>貴論ノ<sup>○</sup>如<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>今日  
 ノ佛教ニ於<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>之<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>爲<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>力<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>自<sup>○</sup>願<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>耶蘇  
 教ヲ<sup>○</sup>見<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>是<sup>○</sup>又<sup>○</sup>貴論ノ<sup>○</sup>勸<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>皆<sup>○</sup>解<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>盡<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>居  
 ルカ<sup>○</sup>足<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>言<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>第一<sup>○</sup>宗<sup>○</sup>教<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>神<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>本<sup>○</sup>也<sup>○</sup>耶蘇<sup>○</sup>教<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>テ  
 ハ<sup>○</sup>親<sup>○</sup>戚<sup>○</sup>知<sup>○</sup>友<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>逼<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>以<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>婚<sup>○</sup>姻<sup>○</sup>葬<sup>○</sup>式<sup>○</sup>一<sup>○</sup>是<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>佛  
 教<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>然<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>至<sup>○</sup>途<sup>○</sup>人<sup>○</sup>子<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>業<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>皆<sup>○</sup>同<sup>○</sup>教<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>委<sup>○</sup>ス  
 ル<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>何<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>尤<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>貴<sup>○</sup>論<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>比<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>實<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>於<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>  
 生<sup>○</sup>業<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>何<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>教<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>對<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>説<sup>○</sup>キ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>佛<sup>○</sup>教<sup>○</sup>此<sup>○</sup>度<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>至<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>

レ<sup>○</sup>民<sup>○</sup>区<sup>○</sup>域<sup>○</sup>狭<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>人<sup>○</sup>向<sup>○</sup>一<sup>○</sup>生<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>業<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>委<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>程<sup>○</sup>ノ  
 一<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>此<sup>○</sup>一<sup>○</sup>度<sup>○</sup>即<sup>○</sup>チ<sup>○</sup>佛<sup>○</sup>教<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>欠<sup>○</sup>点<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>耶蘇<sup>○</sup>教<sup>○</sup>徒<sup>○</sup>ノ  
 常<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>誇<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>所<sup>○</sup>然<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>是<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>枝<sup>○</sup>葉<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>一<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>今日<sup>○</sup>佛  
 教<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>改<sup>○</sup>良<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>一<sup>○</sup>度<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>以<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>行<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>サ<sup>○</sup>マ  
 テ<sup>○</sup>難<sup>○</sup>莫<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>非<sup>○</sup>サ<sup>○</sup>ン<sup>○</sup>也<sup>○</sup>亦<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>人<sup>○</sup>心<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>固<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>又<sup>○</sup>テ  
 ト<sup>○</sup>是<sup>○</sup>又<sup>○</sup>布<sup>○</sup>教<sup>○</sup>上<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>巧<sup>○</sup>拙<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>突<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>宗<sup>○</sup>教<sup>○</sup>ノ  
 主旨<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>突<sup>○</sup>係<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>及<sup>○</sup>ブ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>非<sup>○</sup>サ<sup>○</sup>ン<sup>○</sup>也<sup>○</sup>第三<sup>○</sup>能<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>テ  
 之<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>如<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>余<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>之<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>解<sup>○</sup>セ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>何<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>ナ<sup>○</sup>レ  
 ハ<sup>○</sup>我<sup>○</sup>会<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>口<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>如<sup>○</sup>何<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>云<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>又  
 前<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>二<sup>○</sup>条<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>重<sup>○</sup>複<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>是<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>再<sup>○</sup>ビ<sup>○</sup>説<sup>○</sup>明<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>乞<sup>○</sup>フ<sup>○</sup>ハ

銀座 伊東屋製

革命ノアリレハ 屈指ニ堪ヘカニ 又其レキ  
 ハ宗教ニ名ヲ借リテ 執ヲ為ルニ者モアルカ  
 レキ 七道徳ヨリナルト 是レハ宗教トシテ 道徳ト  
 云ハルカレハ 耶蘇教ノトシテ 又其レキ  
 ハ 一モハメ<sup>6</sup>トシテ 教テモ 極大教テモ 不道徳ヲ  
 可トスル 宗教人~~ト~~ 非ヤ~~ん~~ 何ソ 独リ 耶蘇教  
 ノイナリトヤ 第八人々 意張ラスト 然レ 耶蘇教  
 ノ國々ニ 英人ハ 其富ヲ 誇リ 魯独ハ 其強ヲ 誇  
 リ 佛ニ 埃<sup>ニ</sup>各 意張ラカニ 如ハ 耶<sup>ハ</sup> 如レ 何ソ  
 独リ 日支ノ人ノトシテヤ 第九人々 互ニ 睦<sup>ニ</sup>シ  
 ント 欲スル~~ト~~ 非~~ト~~ 四國ヲ 富マシ 兵ヲ 強クシ 商業  
 ヲ 盛ニシ 工業ヲ 起シト 是レ 人心ヲ 攪スルニ  
 リ 又 間接ニ 関係スル~~ト~~ アルニ 元セ 且 未<sup>レ</sup> 耶蘇  
 教ノ 旨ニ 直接ニ 在<sup>ル</sup> 起リ 之<sup>レ</sup> アルヲ 肯<sup>ク</sup>  
 サレカ 如レ 間接ノ 関係ナレハ 佛教ニ 又 今一  
 ツ 下<sup>リ</sup> 儒ニ 之<sup>レ</sup> アルカ 如ク 意<sup>ス</sup>ル<sup>ニ</sup> 第五人々  
 其業ヲ 勵<sup>ミ</sup> 此令ノ 秩序ヲ 能クス<sup>ト</sup> 是 又 東西  
 教ニ 大<sup>ニ</sup> 隔<sup>リ</sup> アルヲ 見<sup>ル</sup> 天革命ヲ 好<sup>ム</sup> マス  
 ト 一 矣ノ 如クハ 東洋ノ 宗教<sup>ニ</sup> ソ 革命ヲ 好<sup>ム</sup> マ  
 カニカ 如ク ナレト 耶蘇教ノ 故ヲ 以テ 致<sup>ス</sup> 宗教<sup>ニ</sup> 筆

銀座 伊東屋製

十人ノ甚ヒト是モ一概ニハ去可ラス耶蘇教  
 國ニテモ隨分申論ノ餘意恨ノ未終ニ暗殺ヲ計  
 リ申請ヲ紛入チ如キ一ツ所チカラス亞東洋ニリ  
 之甚シキカ如キヲ覺フルヤク宗教ノ効ヲ奏  
 ヘキ數多クテ各中ニ耶蘇教ノ佛教ヨリモ優リ  
 之モノハ唯耶一ノテ条アルノト是トテモ佛教  
 ニ今日理ム可ラサルニ概ストセハ西教ノ向大  
 差トキヲ見ルヘキ又今日ニ於テ耶蘇教ヲ我  
 國ニ盛ナラシメントスルニ當リ人民雖天保年  
 度ノ者多ク早急ニ之ニ服スル者ハアラス又上  
 流ノ人トモモ既ニ宗教ヲ好マ又ト云フ精進カ  
 道祖ニ充満ス居レハ是ハ耶蘇教ヲ持束テ執リ  
 ニ之ヲ説クモ其効勿ラニカ之ヲ入ルニ  
 之也日耶蘇教果ハ難言ナキカ是又思ハサル可  
 ク之~~カ~~ 耶蘇巴ノ法律制度ノ行ハルニ耶蘇教ノ力  
 ヲ借ル~~カ~~ 多カルヘレト故モ和之カ爲ニ障害ナ  
 ルハ一トモ少ナクサレハレト信スル~~カ~~ 余ハ之  
 ヲ入ルニ當テ新教ナレハ其管モ少ナクサレカ  
 彼羅馬旧教ノ如キモノヲ輸入シ来ラハ佛教ノ  
 弊ヲ除クニト~~カ~~ 他ノ弊當物ヲ入ルノ恐レナ

銀座 伊東屋製

平ニ作サラシカハ  
 ルカ如シ此ノ如ク  
 官物ヲ加フニ至  
 ルニ至ラシカヲ恐  
 才除キ佛教ヲ純  
 ノ優レニ若カスト  
 変リ永キ年月ノ間  
 リタレハトテ亦之  
 日強テ之ヲ擴布セ  
 ハ無常教ノ當ヲ説  
 一帯因ヲ之ニ帰ル  
 此命ノ人民ハ云ニ  
 蓋異アルヲ見ヤ  
 ハルノ人カ濃クニ  
 ンカ如ク部ノ田ハ  
 才桂樹ニ非ズトス  
 ナリト云ハルレト  
 ト出末セセ又テ  
 如カキカト思ハ  
 ト云ハルルト人氏  
 力農工業ニハ中々  
 力如キカト思ハル  
 心一節キ為キ耐  
 ト云ハルルト人氏  
 力農工業ニハ中々  
 耐忍ニ

銀座 伊東屋製

予不勉強ナルヲテレト信ス其進歩セサルハ其  
 方由ノ要レヤニヨリ人民ノ不勉強ナルニハ非  
 せん唯上流ノ人學士社会ノ人耐忍力ニ全シ  
 ヲ心ノ節ヲ易クナシハ耶ナルカヲ疑フ此弊ヲ  
 日本人政一般ニ負ハシムルハ概トシテハ之ヲ  
 トハ此弊アリトスんモ是等ハ無量教員ヲ起シ  
 弊害ニハ耶ス~~レ~~徒来鎖港~~ノ~~人智之狭ノ道ヲ得  
 サリレノ弊ニ至んトセサルヲ得久~~ク~~又外交上ニ  
 異教~~ノ~~レハトテ攘斥セリノ~~レ~~ハ已ニ今日  
 之ヲ自撃レテ切齒ニ堪ヘ~~ル~~ヤ~~レ~~モ~~ノ~~アリ~~テ~~然レ~~ル~~  
 今日ニ~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~~~テ~~~~レ~~

銀座 伊東屋製

Handwritten red scribbles at the top of the page.

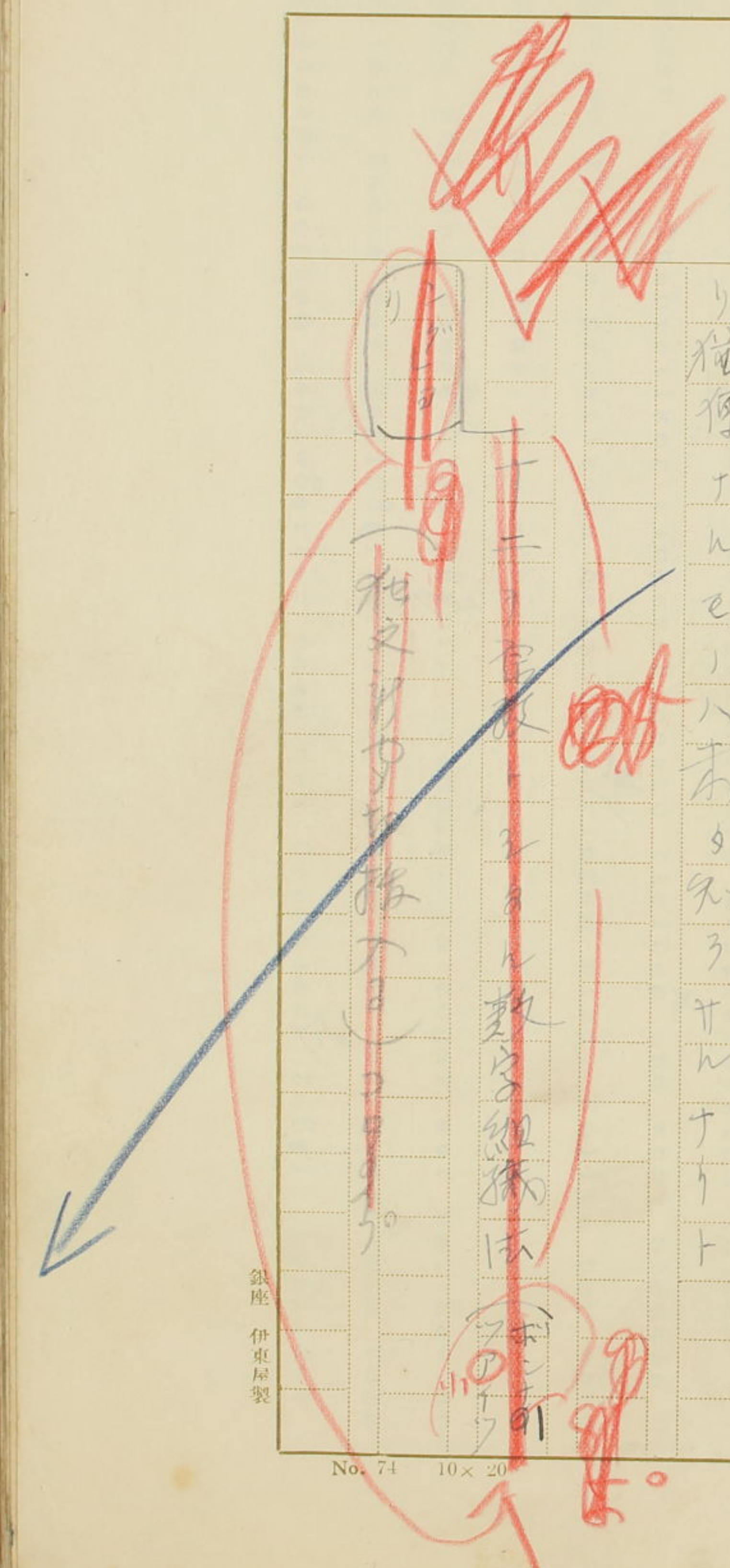
別行

独口語ノ學藝上ニ適當ナルヲ  
 トク トルカニ 氏(余)ノ 著ト 初テ 認  
 教授ヲ愛ケル人 有テ 世界中 如ト 若  
 人ニ 或レハ 其ノ 著ト 其ノ 著ト 其ノ  
 著ト 其ノ 著ト 其ノ 著ト 其ノ 著ト  
 吐露スル 事ヲ 得ル 事ヲ 得ル 事ヲ  
 ト 托ト アリ 假令ハ 支那 語ノ 如ク  
 單音ニ 自ラ  
 鏡ノ 邪ナル ことノ アレハ 教示ヲ 得  
 良取ル カ 邪ナル ことノ アレハ 教示ヲ 得  
 ニテ 導カントスル ことノ 能ハス 寧レハ 佛  
 二尊カントスル ことノ 能ハス 寧レハ 佛  
 文法ニ 之ヲ 以テ 余カ 完全ノ 著ト 見  
 マレハ 之ヲ 以テ 余カ 完全ノ 著ト 見  
 余ニ 爲シテ 加シ 之ニ 止テ 前後 貫  
 条ニ 爲シテ 加シ 之ニ 止テ 前後 貫  
 文法ニ 之ヲ 以テ 余カ 完全ノ 著ト 見  
 マレハ 之ヲ 以テ 余カ 完全ノ 著ト 見  
 余ニ 爲シテ 加シ 之ニ 止テ 前後 貫  
 条ニ 爲シテ 加シ 之ニ 止テ 前後 貫

銀座 伊東屋製

字ハ異ニシテ音ノ内ニヤカシク他ニ語ルルヨリヤカ  
 めニ是トモテ難クオホス一甚ニ其ノ語ノ他日  
 リ第ニトヲ知ル(綴文ノ下ハ格ヲ論セズ)又  
 歐洲語ヲ以テ考フルニ佛伊ノ語ハ優美ニ大英  
 語ハ活潑ナリ格ニ語ルニ及ニテ音ヲ格カテラ  
 ス又階上等ニハ不屬也(漢語ニモ英語ノ如ク  
 活潑ナラス尤モ聲音ノ低ニ至テハ卑下ナリ也  
 ノ如ク然レバ其語ニ當ニ綴文ノ存在ナリト語ル  
 高麗上ノ語明等ニ至テハ他語ニ云可クヤン  
 可述ナリト氏自ラ云フ(或ハ他ノ人ハ其語ノ他日  
 ノ便宜ナリト考ヘシト思フヤンハハシク其語ノ便宜ニ  
 考ヘシト)其語ハ接續詞形置詞ノ他語ヨリ多  
 キト是詞ノ變化ハトト又副詞格ノ入り多  
 一カ文ヲ全ク一カ詞ノ形置詞トスルヲ得んカ  
 如ク便宜ナレハ他語ニモ亦便ナリトアリト  
 元来々學術上格階上ノ下ヲ知ルルニ民語  
 リ猫狸ナレハオハオ知ラザンナリト

十二 綴文ノ下ハ格ヲ論セズ  
 綴文ノ下ハ格ヲ論セズ  
 綴文ノ下ハ格ヲ論セズ



銀座 伊東屋製



高志二

5号  
夕 21 教 厚 7 二 十  
(+) 活 继 绝 字 教 儿  
840

政  
文

Ein Zahlwortsystem mit der Grundzahl Zwölf. Man schreibt dem Hamburgischen Correspondent: "Da der Mensch zehn Finger besitzt,

so hat die Zahl Zehn das Vorrrecht, in den meisten Sprachen die Grundlage der Zahlwort-Bildung zu sein. Nun aber hat die Zahl

Zehn nur zwei Theiler, nämlich 2 und 5, während die nur wenig Grössere Zahl Zwölf vier Theiler, nämlich 2, 3, 4, 6, besitzt.

Diese Thatsache sichert einer Zwölfttheilung manche Vortheile, die eine Zehnteilung nicht hat. Daher ist es gekommen, dass man zu

allen Zeiten Masse, Münzen und Gewichte Eern in zwölf gleiche Theile getheilt hat und dass man den Begriff Dutzend nur mit

Grosser Mühe austrotten kann. Von einem Dutzend kann man nämlich, ohne auf Brüche zu stossen, die Hälfte, das Drittel, das

viertel und das Sechstel nehmen, von Zehn aber nur die Hälfte

und das Fünftel. Deshalb würde auch ein Zahlwortsystem und ein

Zahlzeichensystem mit der Basis Zwölf mehr Rechenvortheile bieten, als das bei den modernen Culturvölkern übliche Zehnersystem. Nun kann

man aber von einem Volke wohl verlangen, dass es seine Mass-Einteilung ändert, nicht aber, dass es seine Zahlwörter, seine Zahlzeichen

und die daraus hervorgehenden Rechen-Methoden ändert. Und dieses ist der Grund, warum das vortheilhaftere Zwölfersystem in den

Köpfen der Theoretiker eingeschlossen bleiben und wohl niemals irgendwo in das praktische Leben einringen wird. Sollte nun aber

auf der Ganzen Erde, wie man doch ausser der Zehn noch vielfach andere Zahlen, nämlich Fünf, Zwanzig, ja sogar auf Neu-Seeland

Elf, als Basis der Zahlwörter vorgefunden hat, nirgends ein Volk existiren, dessen Zahlwörter nach der Grundzahl Zwölf gebildet

115

sind? Man sucht<sup>d</sup> vergeblich. <sup>Dem</sup> nunmehr leider verstorbenen<sup>te</sup> Robert Flegel war es jedoch beschieden<sup>e</sup>, unweit des Benue ein Volk aufzufinden<sup>e</sup>, dessen Zahlwörter ein Zwölfersystem bilden. Da über diese culturgeschichtlich interessante<sup>e</sup> Entdeckung bisher noch nichts veröffentlicht ist, so fühle ich mich jetzt, nach dem Tode Flefels, verpflichtet, das mitzutheilen<sup>e</sup>, was mir der DaniGeschiedene darüber erzählt hat, als er um Ostern 1885 vor Antritt seiner letzten<sup>e</sup> Reise mehrere Tage in Hamburg verweilte. Flegel erzählte, er lasse sich <sup>Hilmer</sup> von <sup>de</sup> Eingeborenen, deren Sprache er noch nicht kenne, die Zahlwörter von eins bis zehn nennen und setze dann das Zählen von elf an allein fort, indem er die höheren Zahlen<sup>e</sup> durch <sup>Zusammen</sup>setzung selber bilde. Dadurch imponire<sup>e</sup> er den Eingeborenen meist sehr, weil dieselben

116  
<sup>den</sup> meinen, Flegel kenne schon etwas von ihrer Sprache. Einmal jedoch sei ihm dieser Kunstgriff <sup>z</sup>uzlich <sup>mit</sup>lungen und zwar bei den Aphos, einem nördlich vom unteren<sup>e</sup> Benue wohnenden Negerstamme. Die Sprache dieser Leute habe ganz verschiedene Zahlwortstämme nicht bis zehn, sondern<sup>e</sup> bis zwölf und setze erst von da an <sup>Zusammen</sup>, so dass <sup>z</sup>. B. dreizehn durch zwölfundeins, vierzehn durch zwölfundzwei, achtzehn durch zwölfundsechs ausgedrückt werde. Hieraus geht hervor, dass diese Neger, obwohl sie auch nur zehn Finger haben, doch ihre Zahlwörter nach der Grundzahl zwölf bilden. Wenn auch nicht anzunehmen ist, dass die Aphos sich der oben geschilderten<sup>e</sup> Vorzüge des Zwölfersystems bewusst sind, so ist dennoch die Entdeckung Flefels äusserst interessant<sup>e</sup>, und Alexander<sup>e</sup> von Humboldts Ansicht, es

Gebe wohl kein Volk auf der Erde, das die Zwölf seinen Zahlwörtern  
 zu Grunde lege, ist <sup>ich</sup> ~~n~~mehr widerlegt. Flegel, der bis dahin an  
 den culturgesch<sup>lich</sup>lichen Werth seiner Entdeckung nicht Gedacht <sup>hatte</sup> und  
 deshalb auch noch nichts darüber berichtet, versprach, nach  
 seiner <sup>R</sup>ückkehr für die Verö<sup>ff</sup>entlichung der auf der Grundzahl Zwö<sup>lf</sup>  
 beruhenden Zahlwörter der Aphos sorgen zu wollen. Da dies  
 nun dem muthigen Forscher ein früher Tod unmöglich gemacht  
 hat, so fühle ich mich verpflichtet, <sup>af</sup> die Entdeckung Flegels  
<sup>a</sup>merkksam zu machen und hinzuzufügen, dass nach seiner  
 Angabe die Aufzeichnungen über je<sup>de</sup> merkwürdigen Zahlwörter  
 damals in einer Blechkiste vergraben <sup>w</sup>ren, die sich in den  
 Händen der Afrikanischen Gesellschaft in Berlin befand.

第 白 = 20-11-18



原典

原文  
映御昔

其他人知んべし世人箇十ニ隨于物價ノ騰  
 貴スルハ當ルカ今日一マンク施<sup>筆</sup>悉ハ私  
 乙中トコニ行ケハ得ルヘキ世人保ナルニ從  
 テ此ノ如ク物價急ニハ映響ニ來ルカ日本ニテ  
 也新クシヤ國ノ一故十年前ト今日トハ物價便  
 ニナリシニ隨于物價ニ騰ヒノ如ク差異アリ  
 ト思フト語セリ元ヨリ學識ニ富ミシ人ノ言ナ  
 ラ子也其若認リハ面白ク見ヘタリ之ヲ外テモ  
 日本ノ文化ノ進歩ハ速カト諺ル人アル人笑  
 フニ是ルノ語トスヘシ臨<sup>臨</sup>河ノ我化モニ米<sup>米</sup>以  
 末<sup>末</sup>外<sup>外</sup>年<sup>年</sup>一<sup>一</sup>ト<sup>ト</sup>法<sup>法</sup>我<sup>我</sup>我<sup>我</sup>進<sup>進</sup>歩<sup>歩</sup>ノ<sup>ノ</sup>之<sup>之</sup>早<sup>早</sup>之<sup>之</sup>  
 ト諺ルニ是ヲサシ福<sup>福</sup>澤<sup>澤</sup>氏<sup>氏</sup>ノ言ナリケニ日本  
 我化ノ進歩ノ速カナルハ鉄道傳信ノ發見後ニ  
 元<sup>元</sup>ケ<sup>ケ</sup>ト<sup>ト</sup>レ<sup>レ</sup>ト<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>概<sup>概</sup>言<sup>言</sup>ト<sup>ト</sup>云<sup>云</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>シ  
 十餘年前ノ日本國  
 千八百七十年代澳國維也納社ニ万五尺博覽會  
 ノ我<sup>我</sup>設<sup>設</sup>アリシニ昔ノ橋<sup>橋</sup>名<sup>名</sup>元<sup>元</sup>子<sup>子</sup>復<sup>復</sup>日<sup>日</sup>添<sup>添</sup>ケ<sup>ケ</sup>レ  
 此<sup>此</sup>出<sup>出</sup>ル<sup>ル</sup>ノ<sup>ノ</sup>痛<sup>痛</sup>ク<sup>ク</sup>受<sup>受</sup>ケ<sup>ケ</sup>シ<sup>シ</sup>カ<sup>カ</sup>日<sup>日</sup>本<sup>本</sup>ニ<sup>ニ</sup>テ<sup>テ</sup>如<sup>如</sup>何<sup>何</sup>十<sup>十</sup>年<sup>年</sup>知<sup>知</sup>リ  
 出<sup>出</sup>ル<sup>ル</sup>可<sup>可</sup>十<sup>十</sup>年<sup>年</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>知<sup>知</sup>リ<sup>リ</sup>久<sup>久</sup>希<sup>希</sup>ナ<sup>ナ</sup>ル<sup>ル</sup>モ<sup>モ</sup>ノ<sup>ノ</sup>佳<sup>佳</sup>也<sup>也</sup>

銀座 伊東屋製

再讀

5号

織姫の学化、真人

A 文乙猪

毒草煙に於て類獸

B 文乙猪

各一頁 = 總三、下餘頁 = 總文九

ト云フニ踏ヒ種々ノ形ヲ出セシ中ニ大佛ヲ出  
 スカ宜シカラントテ紙ヲ以テ鎌倉大佛ノ模造  
 ヲ數レ其大サセ之ニ似テテ送レリ  
 伊予ノ歴テ伊豫<sup>間</sup>ヲ鉄路ヲ以テ送ルニ際<sup>送</sup>テ  
 通ス<sup>テ</sup>能ハス止<sup>テ</sup>得ス歎身手足ヲ切放テテ之  
 ヲ通セリ<sup>ト</sup>博覽會ニテテ工人勿レテ之ヲ担<sup>テ</sup>  
 ル<sup>テ</sup>能ハス<sup>ト</sup>何<sup>レ</sup>テテ年ハ争者ハ者ト<sup>ト</sup>陳列  
 シ大ニ洋人ノ<sup>ト</sup>嘆<sup>キ</sup>笑ヲ集セリト<sup>ト</sup>コハ其階ニ送<sup>テ</sup>  
 レ<sup>レ</sup>官東<sup>ニ</sup>テ<sup>テ</sup>支<sup>テ</sup>  
 レ<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>カ博覽會  
 ニ大佛ヲ出ル<sup>ル</sup>ニ  
 如<sup>ク</sup>ヤ<sup>ク</sup>ト<sup>ト</sup>ハ満足  
 ニ<sup>ニ</sup>産<sup>シ</sup>レ<sup>レ</sup>ト<sup>ト</sup>テ喝采  
 ヲ博<sup>ス</sup>ル<sup>ル</sup>節ニ非<sup>ス</sup>  
 没<sup>シ</sup>ヤ大佛ノ集者  
 ヲ見<sup>テ</sup>テ喜<sup>ブ</sup>テモ<sup>ト</sup>ア  
 ランヤ<sup>ト</sup>十餘年ヲ祝  
 見<sup>レ</sup>ル<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>遠<sup>ク</sup>十<sup>ニ</sup>  
 此<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>更<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>  
 元証人ハシ<sup>テ</sup>今<sup>ニ</sup>テ

銀座 伊東屋製

跑跑的字化身人 )

改  
文



Ueber die chemische <sup>Zu</sup> Zusammensetzung des Menschen bringt <sup>1</sup> "Iron"  
 eine <sup>N</sup> Rotiz, der wir Folgendes entnehmen: Der Mensch besteht aus  
 18 Grundstoffen, von denen <sup>14</sup> fünf gasförmig und acht fest  
 sind. Der <sup>Haupt</sup> Bestandtheil ist Sauerstoff in einem <sup>Zustand</sup> von  
~~ersten~~ <sup>Zusammenpressung</sup> <sup>m</sup>. Ein Normalmensch von 70 Kilogramm  
<sup>Wasser</sup> <sup>gewicht</sup> enthält <sup>14</sup> <sup>44</sup> Kilogr. <sup>Sauerstoff</sup>, welche im freien <sup>Zustand</sup>  
<sup>ein</sup> <sup>ein</sup> <sup>Raum</sup> von 80 Kubikmetern <sup>füllen</sup> würden. Die drei <sup>übrigen</sup>  
<sup>Gas</sup> <sup>säse</sup> sind Stickstoff (1.72 Kilogr.), Chlor (0.8 Kilogr.)  
 und <sup>Fluor</sup> (0.1 Kilogr.) An festen Stoffen enthält der Normalmensch  
~~22~~ <sup>22</sup> Kilogr. Kohle, 800 Gr. Phosphor, 100 Gr. Schwefel, ~~1750~~ <sup>1750</sup> Gr. ~~Phosphor~~  
 Calcium, 80 Gr. Potassium, 70 Gr. Sodium, 50 Gr. Magnesium und 45  
 Gr. Eisen. Edelmetalle birgt somit der <sup>m</sup> menschliche Körper nicht,  
 und er enthält in der <sup>Hauptsache</sup> ~~mit~~ <sup>Stoffe</sup>, die wohlfeil sind,

<sup>B</sup> <sup>vor</sup> wie ~~vor~~ <sup>be</sup> <sup>er</sup> <sup>be</sup> <sup>er</sup> <sup>ten</sup>. "Iron" <sup>Gl</sup> <sup>aubt</sup> <sup>des</sup> <sup>Shalb</sup> kaum, dass eine bergw <sup>gen</sup> <sup>aus</sup> <sup>ische</sup>  
~~ra~~ <sup>nte</sup> Ausbeutung des Menschen sich verlohnen würde.

unter gewöhnlichen Verhältnissen einen  
 Raum von 28 Kubikmetern einnehmen würden.  
 Ferner birgt beängter Mensch 17 ~~kg~~ <sup>kg</sup> Wasserstoff, welche  
 Kilogr.

A

定草煙儿者=類景

政  
B  
文

Vertical blue lines for handwriting practice.

紙用稿原社論公央中

伊東屋製

No. 74 20...20...400

Vergiftung bei Thieren durch den Genuss von Tabak kommen jedes

Jahr in den Tabakbau treibenden Gegenden vor. Es geschieht dies,

so schreibt das "Kehler Wochenblatt", in den meisten Fällen dard <sup>noch</sup>

~~das~~ die beim Packen des Tabaks erhaltenen Abfälle als Streu-

material in die Kindviehställe Geworfen werden oder dass zum Ver-

kaufe bestimmte Tabakquantum behufs Gewichtsvermehrung erdige ~~St~~

ständen in Ställe oder Fütterenge gebracht wird. Das Kind verschli-

ngt den Tabak mit, Großer Befieder, <sup>ab</sup> ~~er~~ schon nach der Aufnahme

einiger Blätter treten Vergiftungsanfälle und der Tod ein; so

kommt es dann oft vor, dass <sup>in</sup> ~~man~~chsam erworbene Tabakgeld zum Ersatze

verlorener <sup>in</sup> ~~K~~ oder Kinder verwendet werden muss. Die so <sup>in</sup> ~~h~~uf-

ig vorgekommenen Fälle sollten doch dem Vieh <sup>in</sup> ~~re~~chter zur ernsten

Wahrung dienen, <sup>in</sup> ~~um~~somehr da nach der Fleischbeschau <sup>in</sup> ~~Or~~dnung das

Fleisch von Thieren, die an Vergiftungen zu Grunde <sup>in</sup> ~~ge~~hen, nicht

zum menschlichen Genuss <sup>in</sup> ~~ver~~wendet werden darf und deshalb <sup>in</sup> ~~da~~s

Gefallene Stück total werthlos ist.

B

頭付  
6  
三人ノ要  
十ノり

吉田松蔭氏ノ事  
 吉田松蔭ハ長崎ノ人嘉永年中未名水師提督伴  
 親ノ浦賢ニ来テ通商ヲ乞フニ當テ志士或ハ之  
 ヲ撃破セント云ヒ攘夷論益盛ナルニ當リ松蔭  
 奮テ海外ニ航セント謀リ以テ志士ニ會テ  
 二投セント云ハルヲ中斷シ傳至所ノ獄ニ墜ル  
 又長崎ノ船ニ移サレ七年ノ後江戸ニ折返  
 リ山崎ニ在リヤ其當時ノ帳記ヲ追志ス  
 記録ニ卷ヲ著ス現ニ所リ公使ハ松蔭ノ弟子  
 弥一氏一日余ニ回顧録ヲ示ス余一読ニ流涕  
 也今其松蔭ノ若輩ニ投セント也  
 此ニ案ク以テ當時ノ艱難ヲ想像スルノ實ニ供  
 本和江戸存書生瓜中万二  
 等賦稟簿  
 卯幹

銀座 伊東屋製

松

吉田松蔭氏ノ事

後十餘年ニ  
 了ルヲ免レサレハ  
 河々

伊東屋製

小區自取列士籍未能精刀槍刺擊之技未能  
 練兵馬醫爭之法汎々悠悠々々玩愒  
 歲月及讀支那書稍軍知政羅巴米利幹凡教  
 乃欲用五大洲然而吾國海禁甚嚴外至之  
 人入內地內地人到外至皆在不貸之典  
 是以用通之念勃々發於心胸了而呻吟  
 踏阻蓋亦有年矣幸今貴國大軍艦連檣束  
 泊吾港口為日已久等熟觀總察深悉貴  
 大臣各得宜仁厚愛物之意平生之念又復觸  
 發今則斷然決策將深密諸託假坐貴船中

潛出海外以用通五大洲不復顧國禁也  
 孰更厚察節衷今得如此更一生等所能為而般  
 使役惟命是聽夫跛壁者之見行走者々々  
 々之見騎乘者其意之欲羨如何耶也等終  
 身奔走不能出東西三十度南北二十五度之  
 外以是視夫駕長風凌巨海而走千萬里隣  
 交五大洲者豈特跛壁之行走々々之騎  
 乘之可譬哉孰更幸毋明察許諾所謂何惠  
 尚之但吾國海禁未除此更若或傳播則々  
 等不徒見追捕創斬立刑無疑也更或至此

銀座 伊東屋製

二下  
別行  
二下

三月十一日  
又下田ニテ讀之歌  
此の人ハよし  
又下田ニテ讀之歌  
三月十一日  
又下田ニテ讀之歌  
此の人ハよし  
又下田ニテ讀之歌  
三月十一日  
又下田ニテ讀之歌  
此の人ハよし

三下  
別行

日本嘉永七年甲寅三月十一日  
別行  
本署内所天列懇請  
在横濱  
曾欲就高連船隻  
執事  
二公大同拜呈  
則傷貴大臣得官仁  
變歎許所請  
時以令得免勿斬之  
人亦不仕進第往夏也  
執事  
二公大同拜呈  
則傷貴大臣得官仁  
變歎許所請  
時以令得免勿斬之  
人亦不仕進第往夏也  
執事  
二公大同拜呈  
則傷貴大臣得官仁  
變歎許所請  
時以令得免勿斬之  
人亦不仕進第往夏也

銀座 伊東屋製



皇

86 新法

氏ノ完國ノ藩士ニ  
 友ト云ハハ走ツ指ヲ氏ニ屬セカンモノ十ニ  
 大ニ越前守以來ノ判官ハ氏ヲ指テ他ニ非  
 氏ハ藩ニアリトハ藩ヲ能ク統々有  
 為ノ士ヲ出サレメ旧來ノ弊ハ除テ大ニ藩制  
 才改良セシメタムノ功アリ嘗テ兵制編成ノ職  
 二在テ終テ藩式ヲ用ヒシヨリ忽チ群小ノ忌ム  
 所トナリ其職役ハ藩校教授、侍讀、家範掛、  
 講編纂方ヲ罷メラレ坂上撫育方ニ題セテ

二ノ里ヲ隔テ藩  
 境ノ警備ニ當リ  
 組合ノ村々ニ由リ  
 二村アリテ其地有  
 様ノモノヲ撫育ス  
 ト稱ハレバ此所  
 地稱ニ人頑古  
 一ノ里ニ數ニ其  
 地ノ地ニ此地ニ  
 條ニ德政ヲ施シ  
 詞訟ヲ明カシ  
 業ヲ世承ルル兵  
 二兩正ラレテ皆以  
 恩德ニ服テ移轉  
 亦少クハ無然ル  
 一團ノ義勇隊ヲ  
 編成スルヲ得ル  
 上ニ後藩正愛  
 應二年ニ氏ヲ擁テ  
 重役統御ナシ置テ  
 命ヲ奉政トセリ  
 王政復古ノ福  
 藩ノ公議人  
 召スニ當リ同藩  
 川賴之ヲ  
 報之ヲ  
 骸骨ヲ乞フ  
 二堂ヲ  
 藩室其燬掃  
 難去起尋

氏ヲ其ノ後無  
 大勢限名位  
 無ニ奉テ其  
 下ルニ至ル

銀座 伊東屋製



別行

此十九年暮秋  
 禪榻臥清几ノ句アリレト曰趣同感十ん力如レ  
 今茲ニ氏ノ訃ヲ中ス追悼ニ堪ヘサん  
 于時

伊東屋製

第 3 卷

No. \_\_\_\_\_

英国宪法立法，大畧摘要

The British constitution

Vertical lines for handwriting practice on a grid background.



British Constitution  
英國憲法立法大畧摘要

### 英國憲法立法大畧摘要

The British Constitution is neither purely aristocratic nor democratic. The power of the Sovereign is modified by his other branches of Government. The Grand Council of the nation consists of three estates, namely: King or Queen, Lords and Commons. These three constitute the parliament. The whole legislature is in the hands of this assembly. The Sovereign is the executive power and the representative of the nation. The Crown descends to the eldest son, by the General right of primogeniture. But female descendants inherit the throne as well as male descendants. The English Sovereign has great prerogatives. No law is in force till he assents to it. He creates the lords, he appoints the bishops, and names the time for the meeting of parliament. He chooses the ministers of state and the judges. His person is inviolable, his ministers

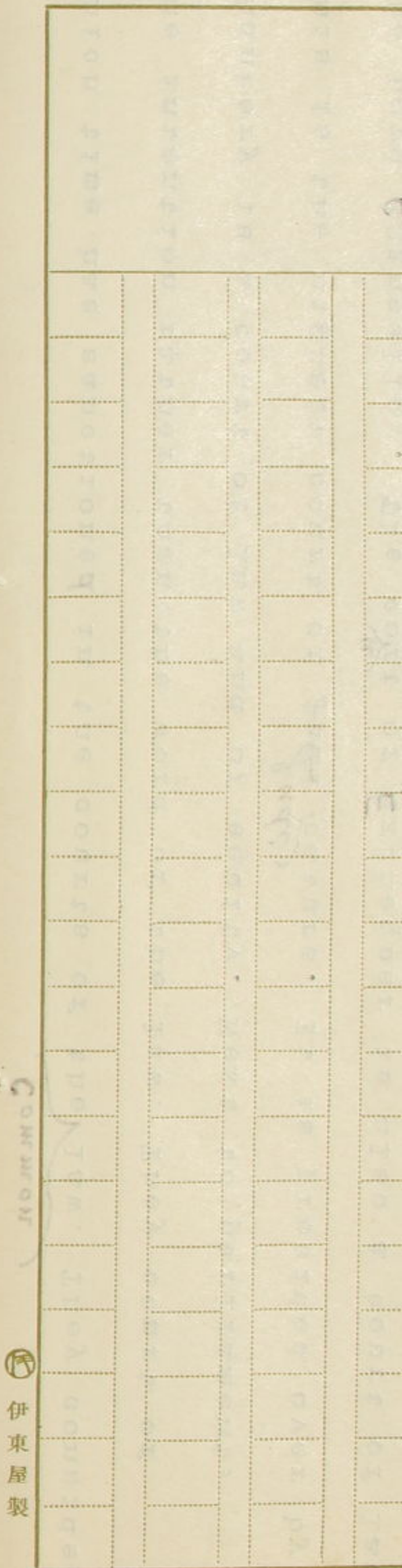
alone are responsible for his acts. The whole body of ministers is called privy council. The most eminent portion of this body constitutes the cabinet. The members of ministers forming the cabinet is rarely less than ten, or more than fifteen. Their deliberations are always considered confidential. The first lord of the treasury is the chief of the ministry. He is usually termed prime minister. It is by his immediate recommendation that his colleagues are appointed. With the advice of his own privy-councillors the sovereign transacts all affairs of war and peace. He also determines the regulations of commerce with the governments of foreign nations. He confirms all military and naval appointments. But by his coronation-oath he swears to make no change in the constitution. His services are compensated by a annual sum called "the civil-list." His public audiences are called "

英國法律概論

伊東屋製

"drawing rooms." At these there appear both ladies and Gentlemen, At a "levee" only Gentlemen are received. The house of Lords is a court of appeal from the law courts. The House of Commons alone has the right to create taxes and make financial Grants for the use of the Executive. The Commons is considered the basis of the English constitution. Each member is considered the representative, not only of his constituents but of the Kingdom at large. His liberty of speech is bounded only by those rules of decorum of which the house itself is the judge. This assembly is composed of 658 members. A General election must take place every seven years. The sovereign can command and a dissolution of parliament, at will. In England there are many courts of law, but there is no code. The law consists of a system formed of many fragments. There are members of ordinances promulgated at different periods. These are made up a Great measure of usage and precedents. In civil cases the law is liable to be changed by every new decision. Owing to this all appears confused and faulty. The law is studied in London at the Inns of Court. These are spacious old buildings almost entirely inhabited by barristers such are: the Temple, Lincoln's Inn, Gray's Inn, Furnival's Inn, etc. A set of apartments at these Inns is called "chambers." Here Solicitors and attorneys establish their offices, where alone they are to be professionally consulted. The law is either Statute law (written) or Common law (unwritten) but these proved inadequate to attain the ends of full and ample justice. To correct this deficiency Courts of Equity were established. These administer justice unshackled by the professional intricacies





Offe<sup>re</sup>nces in the City are tried by a jury of citizens. Those in the country by a jury formed of country-housekeepers. In the various courts of justice there are twelve judges. But it is only in the Court of Chancery in the Ecclesiastical Courts, and in the Court of Admiralty that the judges really judge. In the Civil and Criminal courts the jurors are the actual judges. The judge expounds the law and puts the evidence and pleadings in a compendious point of view. He then submits the question of judgement to the jury. Juries are of several kinds. In criminal cases there are Grand and petty juries. In Civil Cases there are common and special juries. The Grand ~~jury~~ <sup>jury</sup> is a body of men summoned by the sheriff at every session. Such a session is called "a Commission of <sup>and</sup>oyer<sup>2</sup>terminer." All ~~the~~ indictments are preferred to the Grand

jury. It must consist of not less than 12 and not more than 28 persons; so that 12 may be form a majority. Its members are ~~in~~ instructed in the articles of their inquiry by the justice who presides on the bench. They then withdrew to sit and receive indictments. They only hear evidence on the part of the prosecution. They do not settle a dispute between plaintiff and defendant. They only decide whether there is sufficient cause to call upon the ~~accused~~ <sup>an</sup> accused to answer ~~an~~ indictment. If so, the accused is said to be ~~omitted~~. Upon an indictment, which they reject, they write: not a true bill. " or "not found." Upon one, of the truth of which they are satisfied, they write: "a true bill." In the latter case, the cause is referred to a petty jury, to be tried and determined. This body consists of not more than twelve jurors.

When the trial comes on, it sometimes happens that all the jurors are not present. Or sometimes one or more of them are objected to and set aside by the defendant's counsel. In such cases, the deficiency may be supplied from such of the bystanders as have the suitable qualifications. This is called to impanel a jury "de talibus circumstantibus." Jurors thus selected are termed "talesmen." A special jury is a panel composed of jurors especially fitted by their knowledge to try some peculiar question. A foreigner may insist on half the jurors being foreigners. A jury is said to be "packed," when prejudiced jurors are purposely impanelled. The jury pronounces "Guilty" or "not Guilty." England and Wales is divided into about 50 Counties. In each of these, a Lord Lieutenant is appointed by the Crown. ~~The whole administration~~ This is merely a post of

honor, accompanied by no emolument. The whole administration of the interior is conducted by an unpaid magistracy. In each County are several justices of the peace elected by their fellow-citizens. They decide whether there is sufficient cause for arrest. Their jurisdiction even extends to trial and adjudication for small offences. Every county has also a sheriff, nominated by the crown. He executes all orders issued by the courts of justice. He serves the writ, arrests, and takes bail, when a cause comes to trial, he must summon the jury. When it terminated, he must see the judgment carried into execution. The person of the accused is always in his custody. He has several inferior officers to assist him, such as, under-sheriff, bailiffs, gaolers, etc. During the time of his office he takes precedence of every nobleman in the county. There are also from 4 to 6 coroners in each county.

Their chief business is to inquire into the causes of sudden deaths. Their places are often very lucrative, on account of the ~~number~~ number of fees. In cases of emergency, every citizen is liable to be called upon to act as constable. These constables are unpaid and unarmed. They bear a small staff about 6 inches long with brass crown on the top. This is not considered a weapon, but a symbol of authority. The constables (policemen) appointed by Government all over the country are paid, and armed with a truncheon or mace. To facilitate the administration of justice, the judges travel through the ~~months~~ months twice a year. This is called: "to be on the circuit." They then hold courts in the different districts they pass through. Such meetings of the judges are called "assizes." All courts of justice are open to the public. When witnesses give evidence, when a judge delivers his opinion, when the jury gives its verdict it is always under the public eye. (Lambert)



原文  
金壙  
(鑛)

後藤氏明歴録  
若アリハ  
ノ實見ノ處  
ヒレノナリ

手書

物價騰貴セントスルヤ一世挙テ物價ヲ以テ富  
 于貯ヘントシ貨幣ハ悉ク市場ニ投出セラル  
 故ニ物價騰貴セリ投出益々大ニシテ倍約ノ  
 過遠過策ヲ促ス之ニ及テ物價下落セントス  
 ルノ此下トヤ一世挙テ貨幣ヲ以テ貯ヘン  
 トシ物價ハ悉ク市場ニ投出セラル故ニ物  
 價益々下落シ終ニ倍約破レ貨幣騰貴レテ所謂恐慌  
 ナル者ヲ救済スル

本邦金銀貨幣ノ一  
 勝出者ハ經濟學協會上ニ  
 於テ議論ヲ極

日本ニハ慶長以前ニ於テ金ノ產出至テ少ナリ  
 徳川氏治政トナリ佐渡ノ金壙ヲ鑛ニ掘出シ

鑛

銀座 伊東屋製

伊東屋製

別

七

一之ヲ輪ノニヤン又古来此流ノ是也良カ  
 二ハ北条氏ニ若クハ下ノ徳川氏ノ跡也  
 三ノモ其北條氏ニ及ハカシテ承久ノ亂ニ奉  
 四ノ時其師ニ命ニ授ケテ方ノ武士也之加人  
 五ノニ兵糧ノ用ニテ下ノ備之ニ攝子トシ人  
 六ノ富ノ所也  
 七ノ我亦元港ノ初ニ非銀ト一令銀ニ枚トテ交  
 八ノ其ノニ幣帛ヲ持テ来リテ推付タムカ  
 九ノ非常ニ困難ニ之ヲ以テ蒙羅ノ代ニ掛  
 十ノトスルニ結受ケルニ好要ヤト知リ乍ラ之ヲ

一ハ慶應二年ニ翻ヘタムニ金銀ノ三分ノ  
 二ハ唐金ト知ラレタリ此唐金ハ常ニ足利氏  
 三ハ中納言ノカ財政ノ困難ニ責メラレ上  
 四ハ易ヲ天ナテ取厚ク付ケタムナリ又徳川氏以前  
 五ハ貨幣ハ銀錢ナリコレハ北条氏ヨリ支那  
 六ト交易ノ得タルモノ也又王朝ノ昔隋  
 七唐ノ制ニ模シ自ラ鑄造セタリト云ヘルモ古  
 八等日ノ城出スルハ支那ノ銀ニ日本銀少ク  
 九下ノ見レハ日本ノ銀ヲ鑄ルハ割ニ合ハズ故ニ  
 十多ク造ラズ又支那ノ銀ヲ用ニ北条氏ニ至テ金銀

銀座 伊東屋製

魚

86 5 5  
5  
5

日場元和年  
の初御将軍  
田後元和也  
三三三三 初八丸  
の内ニテ元十  
ルノ所ハ諸國

侵御先等ニ  
免ルノトナリ  
ヨリ神田ニ  
ニ後リ其後又  
今ノ日亦舊  
極リシモノナリ  
トナリ

此ノ一分銀ヲ鑄テ通用シタルハ上海等ノ道ニ  
之ト同シ要テ金銀ヲ輸入シタルヲアリ又或  
軍艦ヲ買テ其賣又銀ヲ以テセハ二万兩ニ員ケ  
ルトナリ故ニ之ニ金又銀ヲ買テハタルニ之ヲ以  
テ直ニ天保銀ヲ鑄造テ来リタルヲアリ

日本橋魚市場ノ沿革

徳リノ執政以來維新ノ際ニ至ル迄近國各澳場  
ヨリ江戸ニ輸入スル魚類ハ鮪 鮫 鰯 鰯  
ノ二口等ノ下等者ヲ降ヤ上等ニ屬スル魚類ハ

都テ公儀ノ御膳所ニ納メタリシカ代價ノ定メ  
ハアリタルト極メテ低廉ニテ納魚扱ヒ費用ニ  
モ足ラス之ヲ御用加ト云魚肉商人其餘レハ息  
ヲ市場ニ出テ販賣スルノ業トナシテ口録乃チ手  
取料ハ販賣者ノ五分或ハ一割ノ定メ又佃  
魚漁民ヲ除キ近國各地ノ漁業ハ肥料ニ供スル  
莫ク外ハ総テ農ノ漁業ト唱ヘ粟業ト為ス者甚  
ク多ク官ニ於テモ又貿易ノ専業ハ許サズ制  
規然レハ近國ノ魚類ハ悉ク江戸ニ送リ下等  
ノ外ハ將軍家ニ上納シ市甲魚ニ充テ鰯魚ハ販

銀座 伊東屋製

常ノ内角ニ委テ此切代金ヲ其荷主ノ所得ト  
 スルカ所ニ定テ於テ元之<sup>①</sup>報ルニ漁村人改メ  
 俾テ二學ヲ各村々海面見通シ何百箇ハ其村民  
 ノ外網ヲ下レ釣ヲ垂レテ漁業スルヲ許サズ入  
 會漁坪ハ下レ<sup>②</sup>何<sup>③</sup>村限リ是々ノ知税アリテ  
 罷リ<sup>④</sup>他人ヲ入レズ<sup>⑤</sup>斯ル景況ナレハ漁師ハ  
 他ヲ漁業ヲ江戸ニ移送スルヲ得ズ各漁坪ニハ  
 二名ノ至<sup>⑥</sup>四名宛五<sup>⑦</sup>十集ト云兩人アリテ漁師  
 ノ持獲セ<sup>⑧</sup>魚ヲ買アリ一纏ト十二海陸ノ厚薄  
 二依<sup>⑨</sup>於<sup>⑩</sup>江<sup>⑪</sup>戸<sup>⑫</sup>間<sup>⑬</sup>底ニ送致レ<sup>⑭</sup>此<sup>⑮</sup>ヲ業ヲ業<sup>⑯</sup>ル<sup>⑰</sup>就<sup>⑱</sup>  
 中野市場ニ向付<sup>⑲</sup>浦ト云<sup>⑳</sup>己ノア<sup>㉑</sup>リ<sup>㉒</sup>其<sup>㉓</sup>起<sup>㉔</sup>源<sup>㉕</sup>ハ延  
 宝ニ寅年和州ニ浦郡ニ崎外七<sup>㉖</sup>村并ニ武州久  
 良岐郡古<sup>㉗</sup>村外四<sup>㉘</sup>村以上十三<sup>㉙</sup>村漁民ノ衆  
 起<sup>㉚</sup>テ<sup>㉛</sup>于<sup>㉜</sup>當時日本移殖魚問屋ニ對シ同村漁民ニ  
 於テ從來漁業仕入金ノ借申<sup>㉝</sup>アリ<sup>㉞</sup>己<sup>㉟</sup>為<sup>㊱</sup>仕<sup>㊲</sup>切<sup>㊳</sup>直<sup>㊴</sup>段  
 不正云々ノ論起リ其借財ヲ償却スル以上ハ自  
 己ノ利益ヲ以テ何レノ場所ニテ販賣ヲ為スル  
 善<sup>㊵</sup>支<sup>㊶</sup>分<sup>㊷</sup>ラ<sup>㊸</sup>ト<sup>㊹</sup>迄<sup>㊺</sup>論<sup>㊻</sup>及<sup>㊼</sup>ニ<sup>㊽</sup>既<sup>㊾</sup>而<sup>㊿</sup>日本橋ノ借財償却  
 會<sup>㋀</sup>ニ<sup>㋁</sup>新<sup>㋂</sup>市<sup>㋃</sup>場<sup>㋄</sup>設<sup>㋅</sup>立<sup>㋆</sup>ノ<sup>㋇</sup>費<sup>㋈</sup>申<sup>㋉</sup>上<sup>㋊</sup>宿<sup>㋋</sup>ハ<sup>㋌</sup>金<sup>㋍</sup>六<sup>㋎</sup>千<sup>㋏</sup>兩<sup>㋐</sup>  
 押借<sup>㋑</sup>ヲ<sup>㋒</sup>於<sup>㋓</sup>ニ<sup>㋔</sup>且<sup>㋕</sup>漁<sup>㋖</sup>村<sup>㋗</sup>日<sup>㋘</sup>リ<sup>㋙</sup>総<sup>㋚</sup>理<sup>㋛</sup>人<sup>㋜</sup>ヲ<sup>㋝</sup>派<sup>㋞</sup>出<sup>㋟</sup>シ<sup>㋠</sup>且<sup>㋡</sup>販<sup>㋢</sup>賣<sup>㋣</sup>

銀座 伊東屋製

原文  
今南  
届上

別行

入ルヲ以テ日本橋ニテ賣買スル相分アリニ割  
 安ニ為ラズテ又ニ趣ヲ以テ出於セシニ御中  
 上町下町金ニナレリ尤モ返納ノ集類照考會  
 令ニ定ム場所ハ頼野ノ上本村本河ニ定メ  
 一家駐(今ノ差配人)ヲ賣人トシ地正ニ仕切  
 勸定等ノ監督ヲ依頼シ右十五(村ノ漁魚ニ限  
 リ)為ラサス之ヲ新倉場トナシ去レハ當村漁  
 村ヨリ江戸ニ出テ、直賣ヲ為スト云此新倉場  
 ヲ幕ニ祭起者ノ外ノ漁村人民モ漸次ニ同意ヲ  
 表シ御ハ新倉場ノ上野者等ニ送ルハ中約ヲ既ヒ  
 白ん者十人(村ニ至リ)合計廿一(村ヲ新倉場  
 ト云ヒ)官ノ仰付ト云テ以テ一名ヲ市附ヶ浦ト  
 入ヘリ  
 又日本橋市場ニ敷浦トナリ是ハ徳川將軍執  
 政ノ右翼末藩主ニ集業ノ末月普カサシ吹江  
 戸魚向取白ク沿河ノ村氏ニ給シ(東野ノ噴香會  
 ヲ集業シ)漁業ヲ管マシメ江戸橋入ヲ増殖スル  
 才計画ヲ定メ白ク(此其ノ舊業ノ)為メ御取  
 置村ノ集類ヲ引受テ賣買ヲ為ス事有權ヲ得  
 一ヨリ永世不滅ノ株金ノ如クナリ後世ニ至テ

銀座 伊東屋製

八景之裏也之金銀之魚り組令申書買還<sup>5</sup>  
 鳥ノ荷受上書業ヲ為セリ<sup>5</sup>而<sup>5</sup>新ニ此標ヲ譲受  
 テ業ヲ為ス者ハ都テ漁村ハ敷金ヲ為ス心得ニ  
 テ出金セシ故敷金ノ名アリ此浦々ノ如クハ景  
 九種別前<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>漁師ハ一陸ノ魚多リト云五十集  
 南人ノ外他ハ直ニ養ン<sup>5</sup>テヲ禁ス云<sup>5</sup>養者ノ  
 小之ヲ隔<sup>5</sup>テ養成人<sup>5</sup>養ノ養ト云ケ宜<sup>5</sup>リ<sup>5</sup>四種別ニ  
 処ス<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>命令<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>テ以テ五丁集南人ニ種別ヲ  
 定<sup>5</sup>セ<sup>5</sup>又<sup>5</sup>水魚一陸<sup>5</sup>共眼ニ養ン<sup>5</sup>毛<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>買取<sup>5</sup>  
 以<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>肉<sup>5</sup>魚ニ送ル<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>如<sup>5</sup>ク<sup>5</sup>アリ<sup>5</sup>故ニ<sup>5</sup>村中ニ<sup>5</sup>居<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>構  
 手振所謂南人ノ如ク養ク馬ノ集南人ノ魚類  
 ヲ買入レ在方ハ賣米行ケ共決<sup>5</sup>通<sup>5</sup>師<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>直ニ  
 買入<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>十<sup>5</sup>廿<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>之<sup>5</sup>犯者ハ之ヲ隔<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>賣成<sup>5</sup>小<sup>5</sup>買  
 賣ト名ケ養費者共同一ノ如ク<sup>5</sup>為<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ト<sup>5</sup>又<sup>5</sup>問  
 能<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>捕<sup>5</sup>大<sup>5</sup>魚<sup>5</sup>類<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>減<sup>5</sup>也<sup>5</sup>心<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>掛<sup>5</sup>念<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>冬<sup>5</sup>春<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>間<sup>5</sup>  
 組令<sup>5</sup>給<sup>5</sup>代<sup>5</sup>ト<sup>5</sup>濱<sup>5</sup>邊<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>又<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>浦<sup>5</sup>師<sup>5</sup>ト<sup>5</sup>云<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>代<sup>5</sup>人<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>依  
 去<sup>5</sup>之<sup>5</sup>際<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>養<sup>5</sup>費<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>探<sup>5</sup>便<sup>5</sup>也<sup>5</sup>心<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>買<sup>5</sup>取<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>心<sup>5</sup>  
 即<sup>5</sup>甲<sup>5</sup>魚<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>差<sup>5</sup>支<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>金<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>目<sup>5</sup>ン<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>以<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>所<sup>5</sup>奉<sup>5</sup>行<sup>5</sup>所<sup>5</sup>ハ  
 訴<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>本<sup>5</sup>人<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>呼<sup>5</sup>出<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>控<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>如<sup>5</sup>ク<sup>5</sup>外<sup>5</sup>受<sup>5</sup>サ<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>也<sup>5</sup>道<sup>5</sup>也  
 一<sup>5</sup>内<sup>5</sup>府<sup>5</sup>金<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>出<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>之<sup>5</sup>外<sup>5</sup>アリ

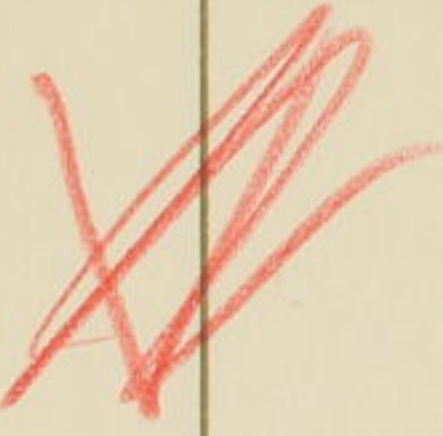
銀座 伊東屋製

二五十四  
四七

八景之裏也之金銀之魚り組令申書買還<sup>5</sup>  
 鳥ノ荷受上書業ヲ為セリ<sup>5</sup>而<sup>5</sup>新ニ此標ヲ譲受  
 テ業ヲ為ス者ハ都テ漁村ハ敷金ヲ為ス心得ニ  
 テ出金セシ故敷金ノ名アリ此浦々ノ如クハ景  
 九種別前<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>漁師ハ一陸ノ魚多リト云五十集  
 南人ノ外他ハ直ニ養ン<sup>5</sup>テヲ禁ス云<sup>5</sup>養者ノ  
 小之ヲ隔<sup>5</sup>テ養成人<sup>5</sup>養ノ養ト云ケ宜<sup>5</sup>リ<sup>5</sup>四種別ニ  
 処ス<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>命令<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>テ以テ五丁集南人ニ種別ヲ  
 定<sup>5</sup>セ<sup>5</sup>又<sup>5</sup>水魚一陸<sup>5</sup>共眼ニ養ン<sup>5</sup>毛<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>買取<sup>5</sup>  
 以<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>肉<sup>5</sup>魚ニ送ル<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>如<sup>5</sup>ク<sup>5</sup>アリ<sup>5</sup>故ニ<sup>5</sup>村中ニ<sup>5</sup>居<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>構  
 手振所謂南人ノ如ク養ク馬ノ集南人ノ魚類  
 ヲ買入レ在方ハ賣米行ケ共決<sup>5</sup>通<sup>5</sup>師<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>直ニ  
 買入<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>十<sup>5</sup>廿<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>之<sup>5</sup>犯者ハ之ヲ隔<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>賣成<sup>5</sup>小<sup>5</sup>買  
 賣ト名ケ養費者共同一ノ如ク<sup>5</sup>為<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ト<sup>5</sup>又<sup>5</sup>問  
 能<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>捕<sup>5</sup>大<sup>5</sup>魚<sup>5</sup>類<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>減<sup>5</sup>也<sup>5</sup>心<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>掛<sup>5</sup>念<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>冬<sup>5</sup>春<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>間<sup>5</sup>  
 組令<sup>5</sup>給<sup>5</sup>代<sup>5</sup>ト<sup>5</sup>濱<sup>5</sup>邊<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>又<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>浦<sup>5</sup>師<sup>5</sup>ト<sup>5</sup>云<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>代<sup>5</sup>人<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>依  
 去<sup>5</sup>之<sup>5</sup>際<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>養<sup>5</sup>費<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>探<sup>5</sup>便<sup>5</sup>也<sup>5</sup>心<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>買<sup>5</sup>取<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ノ<sup>5</sup>心<sup>5</sup>  
 即<sup>5</sup>甲<sup>5</sup>魚<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>差<sup>5</sup>支<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>金<sup>5</sup>ニ<sup>5</sup>目<sup>5</sup>ン<sup>5</sup>者<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>以<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>所<sup>5</sup>奉<sup>5</sup>行<sup>5</sup>所<sup>5</sup>ハ  
 訴<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>本<sup>5</sup>人<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>呼<sup>5</sup>出<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>控<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>ハ<sup>5</sup>如<sup>5</sup>ク<sup>5</sup>外<sup>5</sup>受<sup>5</sup>サ<sup>5</sup>ル<sup>5</sup>也<sup>5</sup>道<sup>5</sup>也  
 一<sup>5</sup>内<sup>5</sup>府<sup>5</sup>金<sup>5</sup>ヲ<sup>5</sup>出<sup>5</sup>テ<sup>5</sup>之<sup>5</sup>外<sup>5</sup>アリ

別行

同原荷主（荷主ハ総テ五十集商人）ノ所引ハ任  
 入浦或ハ任入旅人（一村任入會ヲ有ル村中一  
 般ノ漁魚ヲ受ルヲ任入浦ト云一人ハ任入會ヲ  
 貸與ハ魚類ヲ引受ルヲ任入旅人ト云）ト唱人  
 日本橋市場新場ト云同商ニ魚類所引專有株下  
 レハ誰ハ某ノ任入荷主付浦ハ誰ノ任入浦ト云  
 此所引外ノ同商ハハ決メ魚類ヲ送テズメズ  
 二所引外ノ同商ハ魚類ヲ送取スルヲ禁足スル  
 也ハ（尤モ所引外ノ同商ハ送ル決メ自村ノ私  
 引用ニシテ他村ノ五十集商人等ノ名儀ヲ以テ送  
 ル可否ヲ論セズ抑押ヘテ之ヲ販賣シ専有  
 者引任入會及ヒ代會ヲ其本人ト定ムル荷主  
 入渡シ又組合ノ同商ニテモ他ノ所引荷主ニ屬  
 シ魚類ヲ賣買スルノヲ禁制スルハ組合規約ノ  
 一大要項ナルハ故ニ其皆犯人ニハ違約者ト  
 捕違憲（以テ其荷主店村ノ魚類ハ誰得ノ如何  
 ヲ論セズ一切所引ヲ為シメヤル法也）ヲ為シ  
 大加捕違約ニ相當セシ違約者干テ去ヤシム  
 其罰ニヤニ至リテハ高堂遠慮ト名十日限ヲ定  
 ム休業也ニヤル等若ク嚴則テ定メテ執行セリ



銀座 伊東屋製

菅原文時封夏天德元年 國公攝政 其一 請禁奢侈。略曰。供之相衰。源自奢侈。不塞其源。何救其俗。方今百官縻困。貴賤共壯其居。麗服美食。賈富因富共製。官途解交之儲。窮海陸而盡。私門求媚之饋。前後 而襪器。富者傾產業。貧者失家資。傳云。上之所為。人之所歸。吳王好劍客。百姓多搬。楚王好細。中多搬。搬是人之所惡。然若如是。朝廷貪於惠奢好儉。天下誰不從其所好乎。其二 請停營官。略曰。量能授官。乃理。擇材任職。乃補。若不量而授。不擇而任。則謂之謬妄。方今任授之道。邪而不正。黜陟之規。邪而不明。然時有以妖官人。以為御玉用。於是功勞之臣自退。聚斂之輩爭進。昔漢鍾離公主為子即。孝昭不許而賜錢十萬。所以輕厚賜而重薄位者何耶。以官非其人。即金及石姓也。降建桓靈。用即營官。皇細流彙。玉葉乃衰。庶邪漢象之也。略考。皇朝之記。未有賣官而敦俗。雖然 而安民者矣。若魯國用。每吏仕行儉約。乃能行。貨財何之。利欲之情自

菅原文時封夏  
 天德元年  
 國公攝政  
 其請禁奢侈  
 略曰  
 供之相衰  
 源自奢侈  
 不塞其源  
 何救其俗  
 方今百官縻困  
 貴賤共壯其居  
 麗服美食  
 賈富因富共製  
 官途解交  
 之儲  
 窮海陸而盡  
 私門求媚之饋  
 前後  
 而襪器  
 富者傾產業  
 貧者失家資  
 傳云  
 上之所為  
 人之所歸  
 吳王好劍客  
 百姓多搬  
 楚王好細  
 中多搬  
 搬是人之所惡  
 然若如是  
 朝廷貪於惠奢好儉  
 天下誰不從其所好乎  
 其請停營官  
 略曰  
 量能授官  
 乃理  
 擇材任職  
 乃補  
 若不量而授  
 不擇而任  
 則謂之謬妄  
 方今任授之道  
 邪而不正  
 黜陟之規  
 邪而不明  
 然時有以妖官人  
 以為御玉用  
 於是功勞之臣自退  
 聚斂之輩爭進  
 昔漢鍾離公主為子  
 孝昭不許而賜錢十萬  
 所以輕厚賜而重薄位者何耶  
 以官非其人  
 即金及石姓也  
 降建桓  
 靈  
 用即營官  
 皇細流彙  
 玉葉乃衰  
 庶邪漢象之也  
 略考  
 皇朝之記  
 未有賣官而敦俗  
 雖而安民者矣  
 若魯國用  
 每吏仕行儉約  
 乃能行  
 貨財何之  
 利欲之情自

銀座 伊東屋製



弊

三

減。正廉之跡漸見。其言不察。時雖餒。震遠  
 人。賜文士。略曰。守疆館者。為外賓所置也。  
 頃年所司不能修造。漸將荒蕪。若使歸化之風  
 慕德之人聞之。或謂君恩薄。或謂田用乏。加  
 之故更。蕃密朝。饗之餼之。使使于歸節。  
 因於詞人才子。心則蕃漢。文之藻。大文章。經國  
 之大業。不朽之盛。伏望深察。勿以此餒。  
 然則政方不離心。文士無倦業。是即示海外。  
 以懷柔之仁。耀天下。以郁文之華也。  
 コレ封夏ノ大畧ニ過ヤス。余各々其說ニ服  
 不レ下能ハスト。自レ以テ當時既ニ藩者ノ  
 弊レハリ。膏官ノ弊アリ。レヲ知ルヘシ  
 三善清行封夏（醍醐帝延和年中事）（本朝之粹）  
 其略云。我邦上古。上仁下忠。租稅薄。凡俗  
 厚。時漸遠。賦歛爭增。戶口日減。欽明帝  
 之世。佛法初傳。推古帝以後稍盛。崇尚成  
 尺。上自公卿。下至士庶。競持資者。以覺佛  
 至不造。諸者。人莫齒焉。降及天平。身

銀座 伊東屋製

中  
中  
中

其

創大寺。莊嚴盡美。遂使七通國建二佛寺。名曰國分寺。瘞民田。廢公稅。桓武帝遷都者。上木蠶。賦役太重。仁明帝即位。尤好奢靡。序履麗美。宴樂飲淫。府帑告竭。徵求無節。負初中意。天內及太極殿並災。修復秦年費亦夥矣。當今之時。國家之稅入。非徒昔十分之一也。寬平中。臣為備中守。管内有迹麻鄉。按个土記。皇極帝時。去勝兵二萬。至天平中。課丁纔有千九百餘。臣到任時。老丁二人。正丁四人。中男三人。耳今訪諸彼地官吏。

刈若曰。每有一丁。衰槩之速。一卿可知。天下也。因請節儉存恤。施惠四方。云々

海辺初冬  
李鷹  
乃花

千歲思離而不存。風雲長為弟忠魂。冥宮一夜聽松籟。月暗樟公墓畔。師

宿生田  
菅茶小

Handwritten annotations in blue and red ink, including large checkmarks and scribbles.

銀座 伊東屋製

行中

遊芳野 9. 7. 1

賴 軒 坪 1

万人買醉搜芳叢 感慨誰能與 我同恨殺殊紅飛向

北

延元陵上落花兒 痛并竹外 1

古陵松柏叫天賊 山寺尋春夕 寂寥眉雪老僧時 轍帶落花深處說南朝

木 寺 柏 如亭 1

隔林香羅雜香過 醒人來兒醉人歌 黃昏一片蕪米燕

雨偏停王孫墓上多

二州橋 服部車郭 1

秦龍山畔落日涼 月滯江搖金 新流痛舟不停天如 水兩岸秋風下二州

麥須兒 嚙詩 五 紫 詮 清 8. 7. 1

去國若老白民 若苦奉義 廣宏建 樹丹 號毒 啼鼠不 定 淚 詞 窮 何 如 訴 吁 五 雲 政 猛 於 年 烏 合 爪 牙 廣

招 募 豈 能 復 覩 太 平 年 出 搜 羅 困 奸 黨 奮 勇 與 師

銀座 伊東屋製

山 9

報

師一世豪報仇室已能輔進兵須統同心誓不勝  
 損躬義並高維今暴介已四播露王規繼民悲吃荒  
 郊犬吠戰聲哀田野蒼涼城闕破惡物安能着眼中  
 幕兵來往同相仇禍流遠近惡貫盈罪參在上何從  
 救奮勇真師一世豪報仇室已能輔進兵須統同心  
 心誓不勝損躬義並高維今暴介已四播露王規繼民悲吃荒  
 為我賊攪梳怙勢銳盤張如納象馳入鼠穴驅使我  
 民若牛馬瞻仰我王逾日月維人會靈迷髮侍詔可  
 鞭笞日摧欲奮勇真師一世豪報仇室已能輔進  
 兵須統同心誓不勝損躬義並高維今暴介已四播露王規繼民悲吃荒

相聯肢體結心誓不勝損躬義並高維今暴介已四播露王規繼民悲吃荒  
 於天下久已壓制新詐欺相承徒自其自主刀鋒下  
 犀利安得智馳而術取奮勇真師一世豪報仇室已能輔進  
 已能輔進兵須統同心誓不勝損躬義並高

軍馬高亮公ノ逸良  
 公事會管ノ所ハ之ヤ國カールスハ心ノ下ノ温  
 泉ニ遊ヒレバ不味ノ為医師ニシテハ心ノ下ノ温  
 子ハ病ヲ医スル力  
 公事煩ニ堪ヘズ然テ白一

銀座 伊東屋製

ノ誤?

別行

三字下

爲ニ来ルカ病ヲ内フ爲ニ来んカト師徒容ト  
 答テ曰ク 閣下病状ヲ内ハサンノ医生ヲ欲  
 セハ何ソ歎医ヲ聘セサンヤト公辞唐ノ次ヲ  
 乞フ公ノ同氏ト親善セシム蓋シ此時ニ初ント  
 云フ  
 漢語ニ休  
 漢語ト云リ一説ノ笑柄トスニ過ヤサ  
 レ也中ニハ其趣向ノ面白ク又理窟ニ積シ  
 毛ノ毛アリテ随分私々法学生故ヲニ面白  
 ヲ感スルモノ十キニ非ス余ヤニ漢語ヲ  
 好ミ其學ヲ聽キ得レモノ及ント其故ヲ知  
 ラス今其中ノ巧ミナモノ吹頭ニ浮目来  
 ラス後日ノ備忘ノ爲メニ録セントス  
 ○ 倉室アリ寝衣ノ隣ニ在ス而人常ニ鱈ヲ燻  
 クノ餘薫ヲカキテ食スルハ又一ノ魚肉ヲ喫  
 フヲ要セズ全爲ニ多少ノ費ヲ節ス鱈衣主人ハ  
 謂ク隣風ノ少年ハ我鱈ノ香ヒヲ嗅テ録ヲ節  
 ス即チ我レニ其利益ヲ已メ既ニ我權利ヲ犯ス  
 我之ヲ請求スルノ權アリト云ニ少年ノ家ニ至

銀座 伊東屋製

一行

別

リ其代價ヲ乞フ少年笑テ云フ値幾録ソト主人  
 云若千ナリ少年直ニ囊中ヲサカリ録ヲ出シ  
 上ニ抛ツ主人之ヲ取ラントス少年之ヲ止テ道  
 ニ之ヲ納メ云フ汝ハ物ニ無形ノ香氣ヲ嘗ム故  
 ニ我モ亦無形ノ録ヲ以テ之ヲ拂ハリ汝ニ於  
 テ猶請ボスルノ機テナルハシト主人語窮テ去  
 ○甲アリ乙ニ云フ秋葉酒ヲ飲ム者ハ如何乙  
 云フ大ニ宜シ甲云フ然ラハ我ハ水ヲ出シ亦ハ  
 若ク出セト乙云フ恐クハ汝ノ利益ヤナクラン

甲答テ曰フ吾秋ハ流初物ヲ出シ汝ハ園形物ヲ  
 出セリ然ラハ出来ノ上ハ矢張り秋ハ流初物ヲ  
 ル酒ヲ取リ汝ハ園形物ナル糟ヲ取レハ可ナン  
 =非スヤ

八五子松織女ノ歌  
 同し  
 5.4  
 5.4

魚  
 題  
 鏡人  
 志  
 5.1

銀座 伊東屋製

お。野。徒

其の網六枚三艘ヲ  
盛んニ又左右各  
一艘大左アマンガ  
右アカシカト  
右サカシカト  
細ハ袋網、奥網、  
中網、手網、荒  
手網ノ五ヲ成ル  
其手網ヲ除ク外  
ハ皆網

ト下總

見村ヲ嚙矢トスト云又一ノ宮村ナル玉前神靈

ハ旧記等ノ徴スルヤナシ其創始ハ松柳郡東浪

ノ所領ニ各地主ニ其名ニ放任シタル

ハ幕時代ニハ一ノ宮村ヲ除ク外ハ旗本与力

地内網ノ起源沿革ヲ述フルヲ糸トス元ト

松柳ト山辺郡トハ互ニ異ナル地アリ今雖ツ上

比接スルニ大ニ趣ヲ殊ニス又上総中ニ九長

十九里ノ諸漁村ハ其組織等々各異アリ上総

然中モ甚夕杜撰取ニ足ラサシモノ也柳毛丸

中ノ地ノ飯宮惣兵衛方ニ身衣中秘年ノ見聞ニ

宗祇

九十九里濱漁村維持ノ習慣

佐藤信判嘗テ之ヲ述ヘタルニコレ同氏カ秘傳

わの聲の響はりはゆるせし深き乃壁をば

子あたまたまあふし

い

子

あ

た

ま

あ

ふ

し

い

子

あ

た

ま

あ

ふ

し

銀座 伊東屋製

下  
下

ノ宣託ニシルトモ且昔時ハ獲物ヲ僅ニ自家  
 伊若クハ肥利ニ供セシノミニ輸出セシ  
 一トカリニ如シ現今ノ地引網ニ使役スルモノ  
 ハ**第一**「オキアヒ」**師**是ハ海上ノ進退早ク  
 網ノ掛方等一切ヲ指揮シ又天候海水等ヲ相ス  
 ル一ヲ司ル者ナレハ捕獲ノ多寡ハ全ク此**師**  
 ノ良否ニ帰ス故ニ其給料ハ之ヲ平漁夫ニ比ス  
 レハ二倍三ツ七倍ノ多ク至リ隨テ尊厳ヲ受  
 ク是等ハ漁夫ノ中支配ヲ解スル者ナリ  
 驗日リ自得ノ積蓄セラル  
**第二**「財方」  
 漁方一切一ツヲ指揮ス其給料ハ大抵一代半即  
 平漁夫ニ半倍ス**第三**「帳元」會計ヲ理ス  
 給料財方ニ同シ**第四**「カシヤ」是ハ出船ヲ  
 報スル者ニ年申功勞アル者ヲ撰テ之ニアツ  
 給料ハ大抵平漁夫ニ同シレ其役得アリ**第五**  
 一**間乘**海上ニテ**番師**補師也昔ハ網主其勤  
 事ヲ見テ授定セシカ又ハ網主親族ノ地縁日  
 及テ之ヲ申出ル者アリ**第六**「カコ」漁夫也  
 船ヲ押シ網ヲ曳ク等一切ノ力役ニ従ス漁夫  
 子弟親族ニ至レハ一時學校ニ入ルモノナ

一字半

銀座 伊東屋製

Handwritten notes on the right page, including a large circular diagram and vertical text.



子々孫々

~~子々~~

別

2

三四才に至る人退学し漁業ニ就く其給料半代  
 卜給し一人前ノ半額ナレト漸々實業ニ就く且  
 命懸念スルハ始メテ一人前ノ給料ヲ得ルナ  
 網言ハ漁夫ヲ雇ハル、契約月、利益配当ノ下  
 ハ左ノ如ク、漁夫カ網主ニ産入ヲ請フ、先産  
 入金トシ、翌ハ廿四又ハ三十日ヲ貸与シ、且ニ  
 契約額ヲ交換ス、即チ其貸金ハ歳即チ年度ニ至  
 リ之ヲ漁夫カ受クヘテ配当利益金ノ内日引引  
 出スノ習慣ナレト、元来無識ノ漁民ノ下ナレハ  
 常ニ身ヲ生死ノ間ニオク、下ヲ思ヒ唯目前ノ快  
 楽ヲ求メ、貯蓄杯ノ念ナク、一朝天災疾病等ニカ  
 一レハ止ヲ得、網主ニ懇請シ、若干金ヲ借り、此  
 ノ如ク、貸借益ス重ク、貸ニ償却ノ道ナク、其貸  
 借ハ子々孫々ニ及ビ傳フル也、然レモ網主ハ其貸  
 借ヲ其子孫ニ買替セシメ、之ヲ使用シタリ、此ノ  
 如ク習慣ヲナシ、双方ニ便益ヲ与ヘタリ、維新後  
 明治五年縣廳ヨリ此度ニ付テ達レテ、是ニ至  
 リ、年東員借アハ漁夫等之ヲ償却スルノ義務ナ  
 二ト考ヘ、隨テ網主ノ蔑視スルノルヲ現ハシ、網

銀座 伊東屋製

別行

以テ終ルカマス等ヲ漢ス而テ夏網ハ只禁明  
 一ニ回使用スルノ益ニ利益少クハ常産ノ  
 者ハ他ニ爲可キ夏業アル也故ニ夏網中ハ此  
 地方へ出稼スルハ一コマセナガラズ等ノ  
 漁獲ニ從夏スルモ皆漢夫ノ隨意ナリ也  
 利益ノ配當ハ概即十年分ニ在テ其下ニ收得セ  
 ル金額ヲ計算シ各自ニ配當ス其出ハ譬ハ一年  
 午月ノ引高アルハ内網主七百円強三百円ヲ漢  
 夫ニ配當スルノ法也此法ニ曰レハ飲食ノ諸費  
 費ハ網主之ヲ負擔スルノ制規ナルヲ以テ却モ

別行

主ノ困難一方ナラス終ニ終ニ嘆息スルニ及  
 へテ其後網主ト漁夫ト思角調和セズ爭論ヲ引  
 起ステ屢ハナリ也  
 凡テ網主カ苦節等ヲ産入ル職即十年度ニアリ  
 秋八月十五日<sup>6年</sup>ヨリ次年四月十五日迄ヲ冬網  
 トシ漁夫等其業ニ從夏セザル可ク夏網之ヲ  
 始セザル~~ヤ~~ハ其年外ノ際ニ解産ヲ申出ルナリ  
 四月十五日ヨリ八月十五日迄ヲ夏網トシ此  
 ハ冬網ニ用フヘテ網ヲ製シ之ヲ終獲レ只僅ニ  
 漢夫ノ糊口ノ爲冬網使用ニ堪ヘザル地内網ヲ

銀座 伊東屋製

コノ形ウツリテ  
下サシ

三下

引買金千円トスレハ株代ト引去リ残  
 九月月中ヨリ諸雜費ヲ支拂共餘ヲ二令メ雇主  
 及被雇者ニ分配スル也此法多ク行ハル  
 引買人網主ニメモシ共資本ニ用ムハ冬除中  
 ノ引買ヲ概當トシ干勸同存ヨリ充令ノ金ヲ借  
 入レ置ニ漁業ヲ覺マシ故同存元充令ノ資金町  
 界ハ兩者相益スル也少ナクサリヤ然ルニ人  
 心浮博ニ流レタルヨリ其約束ヲ履行セズ為ニ  
 引買元金ヲ貸サス為ニ破産セシモノ少ナク  
 引買元ノ多ク漁具ヲ抵當トシ一時ノ融通ヲ付ケ  
 タルモ返却ノ途ナク忽チ債主ノ為ニ差押ハシ  
 レテ懊具ヲ失ヒシモ少ナカラス也柘神一ノ貸  
 付ナル一村共有ノ網ノ如クハ即チ前例ノ性  
 質ヨリ共有トナリタルトナリ  
 三下  
 四ニ云置師ノ海雨ヲ相スルハ一定ノ原理  
 ニヨリス只経験ノミナシハ冬除ノ間其心  
 ヲ痛クシタル實ニ甚シクハ社半雨足ヲ  
 亦外ニ展ニ温氣ヲ覺フルハ心ヲ安ンセ

銀座 伊東屋製

87

政界、更ニ救貧税ヲ徴スルニ望レリ然ルニ  
 Shaonikon、利々々、醫師、詩人、工藝家、技術  
 師、兵士ノ病見及ヒ給テ、孤、老、等、一、般、之、支、給  
 スルノ制也、  
 又、十、七、日、ノ、基、ヲ、十、七、日、ヲ、ト、シ、ハ、其、姓、果、ヲ  
 論、レ、以、テ、禁、斷、ハ、ア、セ、ニ、人、ヲ、懶、惰、貪、婪、陰、謀、浮、薄  
 ニ、至、ラ、レ、メ、タ、リ、フ、ラ、ン、キ、一、モ、チ、ヲ、希、願、カ、其、自  
 由、ヲ、失、ヒ、其、者、業、ヲ、衰、零、セ、メ、レ、モ、ハ、以、經、濟  
 ニ、及、ブ、ル、者、慣、制、度、ノ、致、ス、所、也、ト、論、セ、リ、  
 羅、馬、ニ、於、テ、ハ、共和政治以來ニ至ルニ、諸、弊、皆、ト

銀座 伊東屋製

又、整、明、ニ、井、水、ヲ、試、シ、水、温、低、ケ、レ、ハ、虫、類  
 ノ、用、意、ス、ル、ノ、類、也、  
 古、來、救、貧、法、沿革  
 古、來、ア、セ、シ、ニ、貧、民、十、之、一、ノ、國、人、ノ、誇、稱、セ、ル  
 所、ナ、ル、モ、後、新、ニ、出、テ、不、息、ト、テ、リ、之、者、及、新、民、者  
 ノ、子、孫、ヲ、養、育、ス、ヘ、キ、制、度、起、リ、  
 十、七、日、テ、其、習慣、ヲ、テ、レ、ベ、リ、クル、ス、ノ、代、ニ、至、テ、  
 Shaonikon、ノ、制、起、リ、殊、ニ、ハ、ロ、ホ、ン、子、サ、ス、ノ、大  
 收、以、東、全、國、ノ、富、源、忽、チ、凍、盡、シ、タ、リ、之、故、ア、セ、ン



英國 院  
お

一、~~レリ~~ 其の甚しきヲ英子トスヘンリー・ホー  
 ンズに 其子ニテ 政府ヲ負民ノ状態ニ干渉セ  
 ン 又ト云ハル可ンヤ 殆ト五百年者ニ之ニ  
 干渉セリ 又曰ク何レノ事トモ 曾テ負民ノ  
 状態ヲ規制スルニ 其力セシト 其子ニシクナク  
 政治ニ此一科ニテ 大ニ失錯セシモ 亦々英  
 子ニ 其子ノ 略述セニ 其子其他略述  
 各事 其子ノ 抑聖蹟 其子 其子 其子 其子  
 一、~~レリ~~ 其の甚しきヲ英子トスヘンリー・ホー  
 ンズに 其子ニテ 政府ヲ負民ノ状態ニ干渉セ  
 ン 又ト云ハル可ンヤ 殆ト五百年者ニ之ニ  
 干渉セリ 又曰ク何レノ事トモ 曾テ負民ノ  
 状態ヲ規制スルニ 其力セシト 其子ニシクナク  
 政治ニ此一科ニテ 大ニ失錯セシモ 亦々英  
 子ニ 其子ノ 略述セニ 其子其他略述  
 各事 其子ノ 抑聖蹟 其子 其子 其子 其子

一、~~レリ~~ 其の甚しきヲ英子トスヘンリー・ホー  
 ンズに 其子ニテ 政府ヲ負民ノ状態ニ干渉セ  
 ン 又ト云ハル可ンヤ 殆ト五百年者ニ之ニ  
 干渉セリ 又曰ク何レノ事トモ 曾テ負民ノ  
 状態ヲ規制スルニ 其力セシト 其子ニシクナク  
 政治ニ此一科ニテ 大ニ失錯セシモ 亦々英  
 子ニ 其子ノ 略述セニ 其子其他略述  
 各事 其子ノ 抑聖蹟 其子 其子 其子 其子

4千  
 5百  
 11  
 二行ニテナラズ

銀座 伊東屋製

後二三ヶ甲分位之日ん地或人出此地ニ赴ル  
 此ニ地ニ於テ食ヲ乞フテ報シヘニリハ  
 世即位廿二年<sup>計五十四年</sup>ノ條例ハ毎市十人食民ノ  
 食ヲ乞ヘテ区域ヲ止メ此区域外ニ食ヲ求  
 メハ入牢足械及ニ笞杖ノ刑也此其貧民無窮  
 ノ徒ヲ禁過歟ルノ効アリヤンヲ見ルヤ更ニ  
 條例ヲ案シ<sup>同王即位二十七年即チ十  
五年即二十六年</sup>テテ<sup>テ</sup>区外ニ於テ賑  
 救スルヲ禁禁<sup>テ</sup>道<sup>ニ</sup>ハハ<sup>テ</sup>乞<sup>ヘ</sup>タル<sup>テ</sup>給<sup>ル</sup>十  
 倍ヲ没收シテ亦強壯ノ者ニ<sup>テ</sup>食ヲ乞フノ罪ヲ  
 犯ス申ハ初回ハ笞杖ニ処シ再犯ハ在身ヲ断テ  
 捕<sup>ル</sup>罪ヲ犯ス<sup>ル</sup>ハ<sup>テ</sup>漂<sup>泊</sup>無<sup>窮</sup>貧<sup>乏</sup>之<sup>情</sup>ノ故ヲ  
 以テ告<sup>ス</sup>乞<sup>フ</sup>モ<sup>シ</sup>有<sup>罪</sup>ニ<sup>依</sup>ル<sup>ル</sup>申<sup>人</sup>重<sup>罪</sup>人<sup>並</sup>ニ  
 國<sup>敵</sup>ト<sup>シ</sup>刑<sup>ニ</sup>処<sup>ス</sup>ヘ<sup>テ</sup>乞<sup>フ</sup>タル<sup>テ</sup>市  
 邑<sup>若</sup>クハ<sup>寺</sup>道<sup>ニ</sup>テ<sup>テ</sup>貧<sup>民</sup>ヲ<sup>救</sup>仰<sup>ス</sup>ル<sup>ル</sup>高<sup>車</sup>負<sup>傷</sup>  
 侶<sup>ハ</sup>救<sup>急</sup>資<sup>金</sup>ヲ<sup>徵</sup>集<sup>ス</sup>ル<sup>ル</sup>ヲ<sup>許</sup>可<sup>セ</sup>ル<sup>ル</sup>ニ<sup>テ</sup>リ  
 隨<sup>テ</sup>救<sup>仰</sup>シ<sup>テ</sup>依<sup>ル</sup>ル<sup>ル</sup>ニ<sup>テ</sup>強<sup>迫</sup>施<sup>濟</sup>可<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>人<sup>此</sup>條例  
 例<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>シ<sup>テ</sup>リ<sup>ト</sup>ハ<sup>テ</sup>可<sup>也</sup>即位<sup>一</sup>年<sup>計</sup>五<sup>十四</sup>年<sup>計</sup>  
 ノ條例ニ<sup>テ</sup>リ<sup>ト</sup>此<sup>條例</sup>ヲ<sup>釋</sup>シ<sup>テ</sup>強<sup>壯</sup>ノ<sup>貧</sup>人<sup>ヲ</sup>如<sup>ク</sup>  
 ト<sup>シ</sup>苛<sup>酷</sup>ノ<sup>刑</sup>也<sup>ニ</sup>テ<sup>テ</sup>無<sup>窮</sup>ノ<sup>貧</sup>人<sup>ヲ</sup>乞<sup>フ</sup>ル<sup>ル</sup>人<sup>出</sup>  
 乞<sup>フ</sup>地<sup>又</sup>ハ<sup>乞</sup>藉<sup>他</sup>ノ<sup>地</sup>送<sup>ル</sup>ニ<sup>テ</sup>年<sup>ヲ</sup>入<sup>テ</sup>再<sup>ビ</sup>乞<sup>フ</sup>ル<sup>ル</sup>

銀座 伊東屋製

三十一節ノ條列ノ與ニ食民禁過ノ所ヲ限リシ  
 元又新十レ千五百五十一ノ年政務條例ヲ若シ  
 物徴收後ヲ命之ヲ懲罰ニ被仰セシメモ  
 賑救ノ力ヲ下リテ之ヲ作ケ又ハ他人散財セント  
 スルヲ止ムルモノハ宣教師監事役及僧侶ニ於  
 テ之ヲ勸諭スルトセリ然レモ勸力ノ薄  
 キカ爲エリサバ即信五ノ千五百六  
 乙施行ヲ歩スノ力アリテ施濟ヲ拒ム者ハ次ノ  
 四ノ會議ニ於テ保安官ノ前ニ出頭セシメ其  
 論ニ服セズシテ施濟ヲ拒ム者ハ保安官ノ前  
 新ノ次ノ之ニ課程ニ拘括ムルノ之ヲ支拂フ迄  
 禁獄セシムト而テ考給無クノ食民ヲ救ヒシモ  
 強壯ナル食民ヲ過スルノ前諸條例ノ苛酷ニ  
 讓ラサシムルコト即信五ノ千五百六  
 千六百一ノ年ノ次ニ於テ案セシ有ルノ救貧法ハ千  
 八百卅四年迄孤ト二萬五千五百ノ食民ハ千  
 其糶米ノ下ル所ハ孤兒ノ養育ト食民ノ授養ト  
 一二度ニ外ナラス此條例ニ由リハ食民俸ニ自  
 支フル能ハスト然レモ其ノハ各等  
 一 監事役ヲシテ之ニ 職ヲ授ケシメ之  
 力爲ニ授

銀座 伊東屋製





別  
り

養工師ヲ設ケルヲ許シ不具無カノ官民ヲ救  
 濟スル爲ニ叔母新リ建ツルヲ許シ白ク而  
 甲ハ監寺役及傳西堂ニ不即着所有者或ハ充分  
 爲中アハ者ニ課税スルノ權アリユレコレ  
 甲ノ弊當百出遊惰ノ徒却テ私慾ヲ逞クスルニ  
 至レリ  
 一ノリ！ポリスノ之ヲ請ム田<sup>田</sup>其<sup>其</sup>有<sup>有</sup>案<sup>案</sup>ナ  
 リ正ハ千七百九十一年五月ハ心ル州ニ於テ官  
 甲取ノ舊儀ニ早クテ起ケタル常佛社公ノ欠乏  
 ナ原セニ苗傳安直カ救仰ヲ求メタル常<sup>後</sup>役者其  
 家族ノ人々ニ舊<sup>舊</sup>管<sup>管</sup>物<sup>物</sup>ヲ檢セシ<sup>是</sup>是<sup>是</sup>也<sup>也</sup>計畫  
 ナシ意仁ニ出ナリト云<sup>地</sup>地<sup>地</sup>事<sup>事</sup>ナリ之ヲ用也云々  
 ハ以テ當時屯人ナシ地主皆ニ確半白ん意見ナカ  
 リニテ表スヘシ柳<sup>柳</sup>氏<sup>氏</sup>給テ任<sup>任</sup>担<sup>担</sup>ノ下ニ在リテ常  
 役者ハ其衣食ノ一<sup>一</sup>部<sup>部</sup>ヲ寺<sup>寺</sup>過<sup>過</sup>ノ贈<sup>贈</sup>与<sup>与</sup>ニ柳<sup>柳</sup>氏<sup>氏</sup>産<sup>産</sup>者  
 ハ其常役者ノ任拂フヘキ賃銀ヲ半ハ他人ニ負  
 ハレケルヲ得ナリレカレシ<sup>之</sup>之<sup>之</sup>ヲ<sup>之</sup>永<sup>永</sup>續<sup>續</sup>スルニ就  
 テ自<sup>自</sup>助<sup>助</sup>ヲ<sup>之</sup>連<sup>連</sup>接<sup>接</sup>ノ利益ヲ有シタルナリ<sup>而</sup>而<sup>而</sup>其<sup>其</sup>常<sup>常</sup>  
 役者ハ寺<sup>寺</sup>過<sup>過</sup>ノ積<sup>積</sup>金<sup>金</sup>ヲ以テ任<sup>任</sup>負<sup>負</sup>金<sup>金</sup>ノ本<sup>本</sup>原<sup>原</sup>トナシ却  
 テ任<sup>任</sup>負<sup>負</sup>金<sup>金</sup>ヲ<sup>之</sup>之<sup>之</sup>額<sup>額</sup>ニ<sup>其</sup>其<sup>其</sup>積<sup>積</sup>金<sup>金</sup>ノ<sup>額</sup>額<sup>額</sup>ナリ

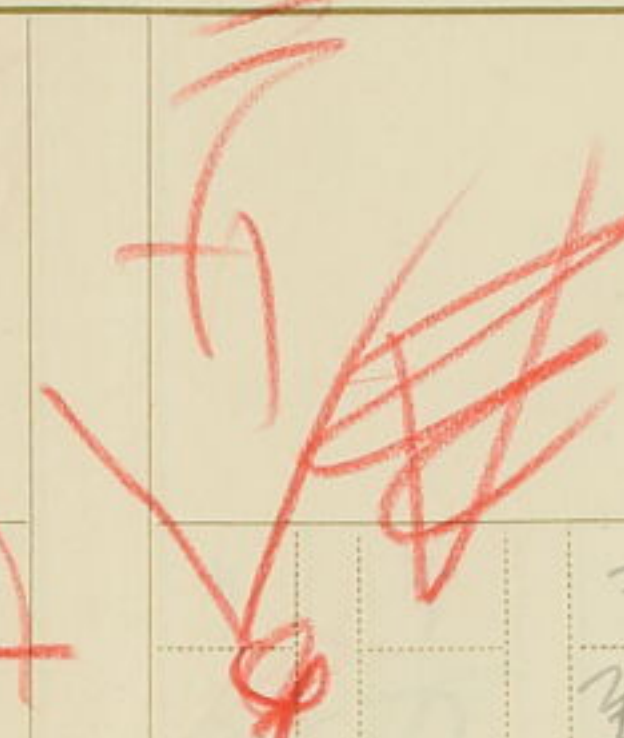
銀座 伊東屋製



新註

此改正昔  
己才可見  
國ノ法ヲ  
且ツ醫  
賞シ之ヲ  
命世ト  
セリト

也之ヲ  
ア  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百



英和司法令制定類本

全書英國利權在附屬地  
全書英國利權在附屬地

第十四卷

別リ

リ  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

銀座 伊東屋製



夫一ニノ~~並~~印~~所~~ 其能~~ク~~ヲ費スヲ省クニ  
 アリコレ等少フニテ~~多~~モノナリ~~英~~國力  
 其主義~~ヲ~~之ニ附リタレハ其目的ハト云ハル古  
 平司法制度~~ヲ~~改革~~ノ~~近代ノ社会ノ需用ニ適  
 セシムル~~ヲ~~計ルニアリ~~衡~~平法裁判所ト云ヒ海  
 上法、送着法、親縁法ノ諸裁判所ハ皆此等  
 争以内ノ法~~ト~~云法~~ト~~テ~~此~~心~~ニ~~或人~~ヲ~~設~~シ~~タルモ  
 十レハ~~此~~在~~ル~~人智~~ニ~~應~~ス~~ルモノナリ~~獨~~リ慣習  
 法裁判所ニ至~~テ~~ハ~~多~~ク~~ス~~エ~~ト~~ワ~~ル~~ド一~~世~~ノ~~次~~  
 ニナリタル~~担~~務~~依~~止~~ト~~近代ニ傳~~リ~~タルナリ  
 古ハハ民法要件ノ大部分ハ慣習法裁判所ノ管  
 轄スル所ナリシカハ自~~然~~向~~テ~~裁判官ノ私モ多ク  
 了~~解~~シ~~テ~~裁判ノ是非ハ大抵人ノ不~~意~~者~~ナ~~シ命~~ニ~~  
 關~~シ~~テ~~其~~甚~~ク~~管~~掌~~ナルモノナリシカハ人民  
 判~~印~~ノ~~隆~~盛~~判~~利~~ノ~~果~~モ~~適~~宜~~ノ~~新~~法~~ト~~シタル  
 ナ~~ラ~~ン~~サ~~レ~~バ~~今~~迄~~ニハ慣習法ニ屬スル裁判  
 件~~ハ~~大~~ニ~~減~~少~~シ~~衡~~平法ノ管~~轄~~ニ屬スル~~ノ~~ナリ  
 増~~シ~~且~~テ~~訴訟~~件~~ニ錯~~雜~~ノモノ多~~ク~~人ノ~~既~~審~~官~~ノ  
 所~~擧~~グ~~ル~~限~~ニ~~テ~~ナ~~リ~~且~~訴訟~~所~~ノ~~担~~務~~モ~~已  
 ル~~ニ~~相~~違~~貫~~セ~~ス~~判~~ハ~~慣~~習~~法~~ニハ~~通~~常~~ノ~~上~~旨~~

銀座 伊東屋製

別

裁判所ノ設ケサヘアヲサリニコソ司法組織ノ  
 改メテ促カセシモノナリ又此改革ニ如何ナル  
 趣向ヲ以テセシカト云フニ慣習法衡平法兩裁  
 判所ノ構成ヲ時勢ニ適合セシメントノ一日  
 的ノ爲ニ莫名日法上ノ全組織ノ要アセザル可  
 クサレニ至リタル者歟リ慣習法ノ裁判官ニ十  
 八名ノ多クアリ乍ラ其他ノ諸法裁判官カ云々  
 ニテ附設ノ夏緯ノ半ニニ上ラサレハ慣習法裁  
 判官ノ懸ニアラズ其權限其訴訟手續等互ニ  
 裁判官ノ要スル仕掛ナレハナリ七十三年以來  
 三回ノ司法令ハ即チ此大改造ヲ奉行セタル者  
 ニテ第一ニ慣習法衡平法ノ區別ヲ確ニ諸裁判  
 所ヲ合併混同シテ一ノ高等裁判所ヲ設ケ以テ  
 諸裁判官ヲ部署シ其權限ヲ定メ之ニ應ズルノ  
 訴訟手續ヲ設ケ大ニ無用ノ制ヲ止メ緊要ノ法  
 ヲ立テたり即チ陪審官ノ制ヲ斟酌シ夏緯ニ兩  
 審ノ法ヲ廢シ巡回裁判所ヲ設ケタル如クハ其  
 審判官ニテモ一ナリ

又ハ此大改造後ト爾モ旧若館ノ存スルニテ其

銀座 伊東屋製

夕多之先司法總務の印紙の外等大同小異之  
~~各地等向等ノ裁判権ヲ有スル~~ 一ニテ遠隔ノ  
 諸領地ノ勿論合衆内ニテモ蘇格蘭若クハ  
 愛爾蘭ノ裁判所ハ英蘭ノ裁判所ト異様ヲ異ニ  
 互ニ上下ノ差等アルヲ示シ、ニ英島裁判  
 所ト稱スルハ重ニ英蘭ノ云々トシテ此備致ニ  
 ハ合衆内各島上裁判所ヲ管スル事合衆院  
 下リ海外諸領地ノ最高裁判所ヲ管スル内各  
 賛議院司事部ナシモ一ノ下リ在英島ノ諸裁判所  
 一ニ大別スルハ英島ノ一ヲ管轄シ一ハ合衆  
 島若クハ諸領地ヲ管スルモ是ナリ英島裁判  
 所ヲ又ニ別シ一ハ合衆ヲ管轄シ一ハ地方  
 裁判所ニ地方裁判所ヲ又ニ一ハ一ノ民事  
 件ヲ管轄シ一ハ刑事ヲ管轄スル之ヲ管轄スレハ  
 左ノ如シ

第一種 第一類 英島裁判所  
 第二種 上等裁判所  
 第三種 上訴院  
 第四種 4ヤンセリー部  
 第五種 クインズベニ4部  
 第六種 遺囑、離婚、海上法部

大審院  
 高等審判院  
 遺囑、離婚、海上法部

銀座 伊東屋製





別  
一

上訴可審判ス留身審院ハ前ニ掲ケテ三部分レ  
 于其時ヲ擔任ス其時ハ始審ノ他ニ郡、地方、  
 散、及ヒ四期ニ延請裁判所ヨリ、上訴受任ニ  
 覆審スルニアリ但ニ刑更ノ上訴ハ専ラ  
 スハニテ一部ニ于審所ニ上訴院ト留身審院ハ  
 此ノ如ク酌階ヲ異ニスレモ之ヲ保身ト大審院  
 ト云フ也  
 四期ニ延請裁判所、留身審院、一部ト見做  
 キ又ノニ申控級モ之ニ内ニ其審利スル受任ハ  
 國有ヨリ遠隔ノ地方ニ起リ白ムモノニ  
 四期ニ延請裁判所ノ権限外ニ決ムカ或ハ急遽吟  
 味ヲ要スル受任ナリ但ニ巡回判更ニテ独裁可  
 也又程ノ難更ナレハ留身審院ニ差送り多  
 判更列登ノ判決ヲ仰カシムルナリ中央刑更  
 裁判所ハ巡回裁判所ト同様同格ノモノナレ  
 國有ノ存ハ受任者ナカシテ之ヲ留身審院  
 ン外リ也四期ニ延請裁判所ハ治安裁判所  
 ヲ受任シ兼テ始審ヲモテテ所ナリ治安裁判所  
 ハ民事ハ保ヲモ審利スルナリテモ  
 刑更ノ如クテ下等ノ刑更審利所  
 ナリ

銀座 伊東屋製

<p>カ 直 放 也 ラ レ シ ム 力 を 理 他 ノ 人 ニ 對 シ テ ハ 不 可 成 ス ル 事 ナ リ</p>	<p>他人ヲ威服スル者ニ 追放也</p>	<p>希臘ニテハ才氣超倫ノ者ハ 鷹犬ナル所也</p>	<p>追放令ノ下</p>			<p>其他諸國他裁判所</p>	<p>才一スナリテ裁判所</p>	<p>加拿大他裁判所</p>	<p>印度裁判所</p>			<p>蘭裁判所</p>		<p>國會法院</p>	<p>蘇格蘭裁判所</p>	<p>中興刑庭裁判所</p>	<p>刑庭刑庭裁判所</p>	<p>民庭刑庭裁判所</p>	<p>上訴院</p>	<p>之ヲ圖解セシメ</p>
--	--------------------------	--------------------------------	--------------	--	--	-----------------	------------------	----------------	--------------	--	--	-------------	--	-------------	---------------	----------------	----------------	----------------	------------	----------------

銀座 伊東屋製

下



8本

8本

物價ノ沿革

日本記顯宗天皇二年稀なる豊作にて百姓殷富にして稻壹斛銀錢壹文。續日本記第四に元明天皇（人皇四十三代）和銅四年錢壹文に付米六升百文に付五石七斗五升。三代實錄に清和天皇貞觀八年二月大政官處分定白米壹斗代價四拾文黒米三十六文此年米價騰踊東西津留めなりと白米其價壹斗七貫二百文黒米四貫百文。百煉鈔に後堀川院の御宇寛喜二年六月廿四日米價壹斛に付壹貫文。應仁記に弘治三年五月廿三日より八月九日迄天下大旱米五斗を以て金壹兩と交換す前代未聞の高價なり。塵塚談（之札は小川顯道氏編す）に建久四年亥年癸丑十月十一日鎌倉中法度觸書に一炭壹駄代百文一薪壹駄十束なり代壹貫文壹束の目方五貫目一藁壹駄に付三拾九文。又老談一言誌に寛永九年奥州仙臺の米江戸に廻る金壹兩に付壹石四斗。諸家深秘録に享保元年金壹分に付白米三斗九升安永二年壹分に付六斗寛政三年米百俵に付三拾五兩甚た高直なり。令條記に

日本記顯宗天皇二年稀なる豊作にて百姓殷富にして稻壹斛銀錢壹文。續日本記第四に元明天皇（人皇四十三代）和銅四年錢壹文に付米六升百文に付五石七斗五升。三代實錄に清和天皇貞觀八年二月大政官處分定白米壹斗代價四拾文黒米三十六文此年米價騰踊東西津留めなりと白米其價壹斗七貫二百文黒米四貫百文。百煉鈔に後堀川院の御宇寛喜二年六月廿四日米價壹斛に付壹貫文。應仁記に弘治三年五月廿三日より八月九日迄天下大旱米五斗を以て金壹兩と交換す前代未聞の高價なり。塵塚談（之札は小川顯道氏編す）に建久四年亥年癸丑十月十一日鎌倉中法度觸書に一炭壹駄代百文一薪壹駄十束なり代壹貫文壹束の目方五貫目一藁壹駄に付三拾九文。又老談一言誌に寛永九年奥州仙臺の米江戸に廻る金壹兩に付壹石四斗。諸家深秘録に享保元年金壹分に付白米三斗九升安永二年壹分に付六斗寛政三年米百俵に付三拾五兩甚た高直なり。令條記に

伊東屋製

別行

寛永三寅十二月七日御觸書絹細は壹反の長さ  
 大工尺三尺二寸幅壹尺四寸木綿布は壹反大工  
 尺長三丈幅壹尺三寸と為すへき事。慶安五年  
 東叡山吉祥院の賄料請取書に一酒壹升四拾文  
 豆腐壹丁五文麹蕪壹ワニ文牛房三把八文昆布  
 五把二拾四文里芋壹升七文鹽壹升九文小豆壹  
 升廿四文人足壹人廿四文。天和三年亥二月十  
 七日御觸書に一百姓野人の衣服絹細は禮服た  
 るべし麻布及び木綿は常服為るべし此外赤、  
 紫の色物は分限に應せざる間妻子と雖とも着  
 用すべからず。享保十九年寅四月十日石川傳通  
 院地内稻荷の社用帳あり五月十一日迄入用品  
 扣帳の内に一建札廿壹枚巾壹尺貳寸長貳尺五  
 寸代拾七文大工四人手間代七文貳分。老談一  
 言抄に萬治三庚子年頃白く錯りたる駄賃馬  
 流行し此時代は萬事白き物を風雅とせり吉原  
 の遊に行く者彼の馬に乗る甚直段飯田町より  
 大門迄大急ぎ三百文、淺草見附より大門迄並百  
 三拾貳文急ぎ二百文

右は何れも古書に著はるゝ處にして總べし物

伊東屋製

價の高低は其時に當つての物件の多寡と時勢  
 の如何に因るものにして今より往古は却りて  
 高價なるものあり天保二三年頃は彼の吳紹の  
 如きは壹尺四方の價二三兩羅紗全二兩餘にし  
 て僅に壹貳寸の小切れを机上に弄するものも  
 稀れなりしに今まは羅紗の小切れなどは芥溜  
 にも落ち散り居る位とはなれり

<p>赤腫 行基</p>	<p>温泉 有馬 行基</p>	<p>赤田 不毛 地ヲ元 ク多シ</p>	<p>法大 師水利 土木ノ 功績ヲ 施シ</p>	<p>建榮 教者 土木</p>	<p>衛生 病院 四天王 寺</p>	<p>元禪 師 瀨戸ノ 人加藤 四郎在 五ノ二 傳ハシ テ始</p>	<p>除器 天平 年間 行基ノ 功績</p>	<p>尾ノ 昭惠 上人ニ 贈ル テ始 トス</p>	<p>建仁 寺ノ 宗西和 尚始テ 支那茶 種ヲ 育シ</p>	<p>橋梁 元興 寺開山 道照和 尚宇治 橋ヲ架 セシヲ</p>	<p>伴僧 カキ テ興リ シ 喜業 人</p>	<p>木ノ 遺蹟 旅復 テ</p>	<p>田位</p>
------------------	-------------------------	----------------------------------	--	-------------------------	--------------------------------	--	--	---	--	--	---	-------------------------------	-----------

Handwritten notes and diagrams in blue and red ink, including large characters like '春' and '田位'.

銀座 伊東屋製

三  
下  
9  
12

新形財政ノ困難

基) 能成 本實 伊紀 (一本上人) 後 務伊 (一本上人)  
 城崎 由他 道智 田辺 洲肥 執海 伊 (滿教) 箱根 横川  
 (滿教) 修善寺 伊 (弘法) 小名 伊 (弘法) 日光  
 (勝道) 白山 (素澄) 五色 伊 (伊波行着)  
 忍山 伊 (慈覺) 天持山 伊 (試亦孝) 塔澤 (單拉言)  
 諏訪 伊 (虎南) 涉の伊 (虎南) 中津 伊 (健命寺元山)  
 別所 伊 (安樂寺元山) 内村 伊 (善白永寺元山)  
 難湯 伊 (天龍寺元山)

州信 8

日本經濟命力由利公臣氏ヲ聘テ當時ノ  
 財政ノ一ヲ演述セシメタリ氏ハ其談其居  
 二堂ヲ控當也之人ナレハ其云フ所ノ確実  
 ナレハ云フヲ待タズ今ヲ以テ堂以テ遊想  
 スレハ實ニ物如ク今日ノハ万一ヲ優待  
 也ニモト云フニ足レリ今時 支那 報ニ載  
 也ニテ切撥テ他日ノ参考トス

銀座 伊東屋製



以下  
野村

事なりしは如何様にかして事を圓滑に處分  
 のペルリの申立の次第は随分條理もありとの  
 は天下の人心に背くならんとて煩悶の折柄彼  
 當局者此胸中に到底戦ふとは出来ず戦はざれ  
 困じて如何ともする能はざる有様ありし故に  
 ときのみならず融通を付る考へもなく手段に  
 武備を備めん不金なきを如何せん獨り金の乏  
 りしものゝ如何せん武備整はぶ去りとて俄に  
 諸國の騷ホ大方ならず無論攘夷と覺悟は定ま  
 のみちりし斯る折柄癸丑の年ペルリ渡來して  
 満天下に行渡りし文武節儉と唱ふる貧乏神  
 の能く承知せらるゝ如く極免て金に乏しく且  
 つ鎖國孤立のとなれば融通の道一切閉ぢけ唯  
 りめざるを得ず元來其頃日本の有様は年輩の人  
 明治年間向の事のと思へとも自ら因縁のある  
 が記臆の荒増を陳説する考へなり就ては軍に  
 今日余の明治維新の際、財政の困難錯雜亦  
 有様を演述す可記所望を受けられたれ茲に余  
 記事切抜 四十三枚目

伊東屋製

8  
子

彼の我通信の條約を締結せんと竊かに企望せ  
 し有様ありし其頃余も年頃に成り居りしゆゑ  
 斯くこの實に困却の事なりと考へ時の金銀座  
 及び心あるものに就て種々取調ぶる所ありし  
 も事一切分明ならずも今も其人の名も記憶せざ  
 らと大坂の興力にて大久保某と云へるあり深  
 く天下の財政を憂へて常に調査に従事せりと  
 聞き身自ら大坂に赴き同人に就きて質せ志に  
 同人の言に天下の金は實に少し豊乏器が慶長  
 金を鑄造せし時責めてい三千萬人に此金一枚  
 宛の割合までは違せん考へたりしも到底三千  
 萬枚の思か一千萬枚の高にも至らば僅かに一  
 人一步宛にも上らざりしと云へり爾時大黒作  
 右衛門なる者銀目を以て其用途を補助せんと  
 を發明し小判一枚に付灰吸銀六十日と定め一  
 兩の金貨に代用せんとせしか甚銀の産出も亦  
 た思はしからば於是丁銀なるも此を造り大黒  
 作右衛門が極めを入れたるものなれば天下に  
 通用するを得るとして朝廷への献上其他諸辰  
 への大黒金も總て丁銀の非おれば納まらぬと

伊東屋製

80 3

あり降て徳川家に至り金銀座悉皆其儘に引繼  
 死て吹立つる事と亦た札とも同じく金銀の  
 拂底を告ぐるより佐渡の大久保某所有此金山  
 を引受け専ら秘密政事を施こし其工夫の如き  
 も死刑を受けし者を用ひて再び他出を許さ  
 ず斯て金山よりは年々荒吹の金銀を分銅形に  
 鑄たるものを納め来りしべ一つも眞のものと  
 ては亦く悉く鑛金志たるな里しといふ又金銀  
 座にては金を吹替へ其品位を貶して幕府の入  
 費を補ひ以て天下の經濟を維持したる有様な  
 りしかは天下の消費するものと鑛山の産出を  
 るものとは到底連合ふ所に非ず徳川家の身代  
 は最早や算盤上より維持するの方便なかりし  
 かと幸にして事變もなかりし故僅る其命脈  
 を繋ぎたる事にて一旦事あるに於ては忽ち滅  
 亡する勢ひなりといへり尤も大久保子には其  
 記録の委はしきものあり予も之を見て勝寫せ  
 しが曩に回祿の禍に逢ふて島有不歸者たり始  
 め予は其説を聞き大に嘆息し扱々天下の貧窮  
 も其故あり特り我藩のみに非ず此資金欠乏の

伊東屋製

804

際虚喝を以て攘夷を唱ふと雖も大砲其他の機  
械も調ひ兼ねる折柄に攘夷杯とは思ひも寄ら  
ぬとと斷念せり然れども時勢止を得ず苦し  
まれに東馳西奔種々の考案を運らしたるに金  
の欠乏は今將た如何ともす可らば左れば金は  
なく共三千萬の人間有り此人々の勞力を集め  
たらば必おしも方便なきに非ざるべしと思ひ  
定免其勞力は如何に用ふべきかと云小に物  
産に就いて貿易をなすに如くとなければ直に  
之を福井藩政に持出して試みる里此時も亦同  
じく金なきが故に一人に一步の當りを以て切  
手を拵へ之を人民に貸して物産を起させ其物  
産が金おなりかはる者として親しく町々村々  
に就いて之を圖里福井藩に五萬兩の切手を作  
りて着手せしが之が金はなくとも一致協力  
働によれば可なりとのとを發見したる始めな  
り、その後諸國物議沸騰し吾々は現在の幕府  
を佐けんと欲せしが如何にせん當時越前人の  
諸方に容れられお加ふるに幕府の内輪にても  
薄情を極めて連も手の付け様なかりしが何時

伊東屋製

8 20

議 5

まで此儘にして居らるべきに非ず免角する内  
 天下の勢諸藩割據の姿となりたり此時代ころ  
 吾々の身上にも困厄あり海内種々多難の時に  
 して夫れより追々時勢は維新の運に向ひ丁卯  
 の年十二月吾々も亦た召されて會計の事務を  
 囑せられたりしかば其節平生の所見を吐露せ  
 んとせしも眼前の事に依はしくして夫等の詮  
 議に及び兼ねる中時々持論を呈出せしが當時  
 の朝廷の今の朝廷此比に非は暫らく臨機の謀  
 を以て之を補へんと云ふもありて予が説は當  
 時の人材の耳にも留まらず兼ねたり斯て其年も  
 暮れ明けて伏見の戦争となりしかば予は砲聲  
 を聞くより差向き金穀の必要を感じ人は戦場  
 に赴けども予は米穀を購ふが爲めに奔走せし  
 が到處戦争此話の之にして今へ早や曩の會計  
 論を決するとも叶はず去て朝廷の御用途は日  
 に窮迫するを以て正月九日の夜初めて金穀の  
 會議を起ししに其人々には大久保木戸廣澤  
 後藤岩下其他數人ありしが當時有司の二十萬  
 兩の御用金を取立てたしとの議に付予の胸算

隨分混雜の際なればさる迂遠の事では今日濟急の策に非ず

伊東屋製

800

二十萬兩の返濟の見込確乎たらざれども予が  
 られたし其故を如何と云ふに今諸君の云はる  
 に非ざれば出来ぬまでも先づ三百萬兩を達せ  
 以上は是非三百萬兩以下にて支辨し得べき所  
 は飽までも見捨て難しといふ既に見捨て難き  
 に御一新の大業を見捨てべきかと云へば夫れ  
 十萬兩と云ひしなりと然らば金の欠乏此爲め  
 云ふとも取立つべき目途おけれは擧るなく二  
 なるべしと云ひしに皆云ふ左様に充分のとを  
 にては三百萬兩以下にてい當分此辨用も叶は  
 云ふ所此三百萬兩此御用金は全く返濟するの  
 見込なり固より朝廷の金に乏きは天下の人  
 の普ねく知る處にて今度の入費は天下人民に  
 借金せざれば到底辨じ難しとの事も亦甚だ  
 明白なる事實なり然る上今國內に三千萬兩  
 の金札を發行して之を人民に貸渡し利付にて  
 返濟せしむるとなし以て物産の融通を導き  
 朝廷此度の御入用は皆人民より借用して遣ひ  
 拂ふの目的で何ると云ひしかば議漸く之に決  
 志翌日の伺に持出志し里夫生よ里御基金と

伊東屋製

808 7

稱し三百万兩の御用金を至急片端より取立て  
 されども紙幣を發行して之を返濟すべしとの  
 ことに付ては議論大に沸騰し予が身上も殆んど  
 危殆程ありしか其中最も有力なる議論は如何  
 にしても金札此策は行ひ難し試に其適例を擧  
 ぐれば現に舊幕の權勢を以て慶應年間大坂  
 於て切手を發行せしとあり其方法は西洋の法  
 に倣ひ巧に窮迫を凌がんとして之を舊幕信仰  
 の者に負擔せしめ夫の舊幕の威權を以てして  
 猶且つ行へれりしものか今此戦争中朝威の  
 未だ徹底に至らざる場合に於て之を行はんと  
 欲すると唯に幕府の覆轡を踏むべきの之寧  
 り手短に臨機の處分をなして一時を彌縫する  
 に如かずと云ふに在り彼是動搖の末遂に正月  
 廿九日大會議を起し各官様を初め輔相議定參  
 興まで存寄りの次第包藏なく申上ぐる様仰出  
 されたりしかは銘々腹一杯に申上げ予々も言  
 を極めて論志たる處右會議に於て始めて三千  
 萬兩の紙幣を御發行相成ると決定し即生に  
 我々に手配方を命ぜられたり扱束着の上ハ一

伊東屋製

8月 8日  
お

刻も猶豫いんぐよすべからずは夜通よどほし金札の  
 板下及び製造の手筈をなせしが紙の制作は連とこ  
 も一時に間に合ひ兼ねるを以て予は直ちに越  
 前に赴起て之に着手せり此間の會計事務とい  
 ふは一方に御用金を取立て東北軍費の仕出し  
 等を賄まかなひ一方には金札發行の御趣旨しゆしを明かに  
 し苦難の中に立働たてわきよるをなれとも要唯御用  
 金を前借し後に金札を貸渡かしたしたるの手續にて  
 別に他の手立とはなほ漸く五月廿五日に至  
 り發行するとなりしが是れ則ち萬石萬兩の

御貸出しと稱する十三年通用の金札なり又甚  
 貸渡しの金札は十三箇年の間年八朱の利を付  
 して返済すべく右返済の分は悉く破毀はきして消せう  
 滅めつするの法なれば悉皆返済の後す則ち御一新  
 の負債全く消却して立派なる日本となるべき  
 の勘定かんていなりしなり借其手筈に取懸とりかりしが發行  
 の以前に當りて有司の議論かうご々々として定まら  
 ず左れとも予自ら思ふに假令有司は於て不同  
 意なるも京坂其他の商人に於て更に不同意な  
 かる可ければ運用えんようの道を謀はかるには是非商人の



8  
お

依るべしと見込を立て金穀御用達を初め京坂  
 長者と呼はるゝ者謀々んと欲し其頃勤王家  
 の南之高き西村勘六今、小野善右衛門を喚出  
 したりサテ此の善右衛門を呼び出せし所以  
 同人は正月三日戦争の起るに當り俄に店のも  
 の一同を集免小野店の方向を定め時宜に應せ  
 んとて云へる様今回の事は實に國家未曾有の  
 一大事變にして此時に當りては豫じめ我店の  
 方向を定めて去就を決せざる可からずと之を  
 聞く店のものは小野家は久しく京都に南店し  
 て長く輦轍の下に業を營み子孫相續いて繁昌  
 せしとゆゑ無論朝廷此御爲め盡力するこゝ然  
 る可けれとて茲に店議一決して當時の金穀御  
 用相勤め居る身分なるにより二萬兩の金を携  
 へて直ちに朝廷に駆け付官様御出馬其他不時  
 の御用途に差出したるより今度の一儀に就て  
 呼び出しゝる次第なり斯くて善右衛門に對し  
 相談志たる次第は此度金札三千萬兩を發行し  
 て人民に貸下當年八朱の利息を以て十三年に  
 取立の趣向にて其實を云へば三千萬兩の借

伊東屋製

8月 10

金を為を正な共急連の用に應ずると難く第一戦費の爲めのみに御用金を取立るとありては人民は忽ち困難を極め其慘毒言ふ可らざるに至る可し故に一方に借金と示して戦争の局を結び一方に金札を發して物産に妨害の及ぶを防ぎ富國の基を開かんと目的なれば此事に就ては京坂其他の重をちたる商人に謀りて事を處するころ適當なるべしと思ひ斯く呼び出したる次第なるが意見如何と問ひしに同人は大に賛成の意を表し直に此意を承けて京坂其他の豪商に説き止に孰も同意贊助の由ありしかば茲に五月廿五日を以て初め金札發行の事に決定したり其間には種々當局者に苦心を來せしと寡からおして困難忍ぶ可らざる者も有りしかば一時は其事を廢棄せんと思ひ去ともありし其困難の中に就起最も忘れ難きは廿五日金札發行と云ふ其前々日に至り廟議復た一變して金札の發行は一先つ見合を可しと我輩に沙汰せられり余は御答へをして申上げたるは金札發行の事たる既に廟堂の大

伊東屋製

88 11  
お

會議に於て御評決相成り天下又向て廣く御布告あり且又之を引當にして御用金は夫れ取立て順次に支拂ひたるにしかれば今更此場合に臨んで中止の御沙汰となりては予等局に當りたる者は之に處するの方便な否如何して然る可くやと云ひしに只た々々當惑の體あるのみなり由て予は然らば最早別に策なし今よ里二條城に火を放ちて既に出來上りたる金札をば悉皆燒棄するの外ある可からずとまで極言せしにそ夫れより評議漸く變じて兼て御達

の通り愈々五月廿五日を以て金札發行の事に  
 ありたり以て當時事の困難なりしを推知す可  
 し斯くて廟議を確定するの困難は漸く消えて  
 愈々發行したるの後は諸藩の物議亦く沸騰し  
 て其混雜一方亦らず殊に東京に於て議論頗る  
 騒がしく在東京の有司は如何なる方法に依頼  
 するも此金札をば東京に通用せしむる功屈な  
 しとて尚ほ前議を執りて勅の爲に明治元年  
 一々年間は東京の地に金札の通用を見る能は  
 ず紛議の末予は命を受けて東下し在東京の諸

伊東屋製

和

有司と屢々論辨する所ありしが諸有司は固く  
 前議を執りて動つお結局予と江藤新平氏との  
 向に論決すべしとの事に定り明治二年正月三  
 日より同九日まで毎朝五ツ時より日暮まで辨  
 難論駁止まざりし當時此席に立會ひし人今尚  
 ほ存在せらるもあり其末遂に東京の地にて其  
 通用を實施すべしと一決し茲に始ぬて金札の  
 普く日本國中に通用するとはなれり此時に  
 至りては戦争の大局面も略ぼ定りて事の見据  
 も付きたれば予は乃ち大村益次郎氏と會して  
 今後軍費の豫算何程を要するを聞き五十萬兩  
 にて可なりとの事に付直に東京の豪商に就て  
 五十萬兩の調達を謀り其承諾を得て京都に歸  
 りたりサテ京都に歸着するや廟議又少しく變  
 じりれば予は會計の任を辭して郷里に歸りた  
 り上來は當時會計の概略あるか終始困難計り  
 又して遂に本意を達すと云ふに至らば甚た殘  
 念に堪へざりし

伊東屋製

以下  
九  
ホ

三  
下

304

日本支那古律比較

二

凡ハ享保十年十二月蘇生德七郎傳ハ政府  
ノ命ヲ蒙ケテ字本ノ唐律ヲ訂正シテ之ヲ上  
ノ儀ニ在ニ載スルモノハ其別書ナリ

唐律疏義由本ニハ唐律疏議ト標題由重候工共

諸書相考候処多ク長孫無忌律疏三十卷ト由

重候又唐律疏義ト由重候処又有三候惣テ疏義

ト申候由今ノ通例ニ由重候院議ト申候ハ奏議

ノ一ニ別段ノ義ニテガ候由本ニ院議ト由重

候ハ傳字ノ誤リ合明ニ由座候依之悉ク疏義ト由

改申候

唐律本文并院議ノ内誤字蹟字衍文并文字疑例

致候処夥雜有之候則テ未ニ其員抄書記任候唐

律ハ捌テ明白ニテガ候故比節ヲ以テ吟味仕リ

悉ク相知レ申候依之書籍ヲ引候処ハ皆夫々本

書ヲ以テ相改メ在ニ申候律之並院議ノ内律文

ヲ以テ院議ヲ正シ或ハ院議ヲ以テ律文ヲ正シ

并ニ寫誤ハ字形ヲ以テ誤候処ニ有之字音ヲ以

テ誤リ候処ニ有之候前後ノ文抄律ノ捌ヲ以テ

吟味仕リ相改直ニ大形ノ誤相知レ申候ニ付其

銀座 伊東屋製

別 別

別

書律疏義、吟味仕候、成程、造、成、書、初、之、予、少

右長等一書、初之、予、相考申候

文獻通考

魏書、文選、六臣註、杜氏通典、文苑英華

院、史記、前漢書、三國志、隋書、唐書、漢

考、一、書籍、八、和律、唐六典、明律、十三經註

錯簡、二、所正之申候

類例、七、十九字改之申候

衍字、百七十一字、刪之申候

脫字、四百九十六字、補之申候

誤字、三、四百四十二字、直之申候

不、相、然、律、意、ハ、明、白、之、相、知、申、候

付、其、終、二、仕、之、置、候、工、其、律、ノ、所、擲、ノ、形、意、二、ハ、當

申、差、置、申、候、加、標、ノ、如、外、之、考、可、申、標、重、之、候、二

外、之、字、誤、リ、候、予、知、レ、兼、候、如、二、三、ヶ、所、巨、付、ヶ、不

己、之、條、ノ、註、文、二、誤、リ、多、ク、候、予、相、知、レ、不、申、候、如、

律、ト、疏、義、ト、相、違、有、之、候、二、十、八、甚、辨、亡、待、霜、人、此

國、後、之、條、并、鄭、意、知、有、總、叙、以、上、表、之、條、ノ、管、數、ハ

止、リ、不、申、候、如、律、見、又、ハ、卷、職、叙、律、ノ、祭、祀、有、夏

通、リ、如、通、之、申、候、併、疏、義、ノ、内、脱、文、餘、程、有、之、之、勢

銀座 伊東屋製

34

+

乙毛信物ノ様成也并ニ後集ノ書加へノ様成  
 如無御書修此疏勅ハ唐太宗ノ御子高宗皇帝永  
 徽年中ニ發孫無忌其外十九人ニテ奉勅撰述仕  
 候御子太宗ノ御孫ハ被成候律ノ註解ニ御書候  
 右十九人ノ内李勣褚遂良ハ太宗ノ時ヨリ名ヲ  
 得候臣下ニ候長孫無忌ハ太宗ノ時ヨリノ臣下  
 ニテ何レモ三乞ノ列ニテ御官ノ人ナリ尤モ太  
 宗ノ律ヲ述作被成候本意ヲ毛能ク存知候人故  
 律ノ意ヲ誤シテ御書ニ書被成候其ノ意ハ  
 儿儀中ニ唐律ノ意無疑惑相知レ申度ニ可ナ候  
 依之和律ノ註明律ノ註ニモ疏義ノ文首ヲ其終  
 ニ用候也毛多ク御書ハ  
 此御書カキ本ニテ展轉書字候ト相見ハ申候也  
 ニ元朝泰定四年板行ノ序御書候也享保十年ニ  
 リ四百四年ニ被成り候右泰定四年ヨリ大明神  
 新撰ノ年洪武三十年迄ハ十一年ニ成リ申候然  
 レハ唯ノ太祖モ此御書撰義御書候ト存候也  
 此御書ハ板行洪武三十年ノ比ハ最早纂成可仕  
 候其以後ハ異國ニモ能板仕候ヤ其後ハ不存候  
 此御書ハ泰定四年ノ板行ノ序計リ其以後ハ

銀座 伊東屋製

重

一三百年来其假々之書字之力や本之于傳り  
 候様之相見へ候  
 紙ノ後迄入道已候之<sup>6</sup>所<sup>5</sup>有之<sup>6</sup>其内一<sup>5</sup>所<sup>6</sup>ハ  
 紙ノ中程<sup>5</sup>了<sup>5</sup>二三枚末ノ中程迄入道申候儀之  
 致勤考候工ノ取替書字<sup>6</sup>柳見へ申候  
 文字<sup>6</sup>巨画<sup>6</sup>違<sup>6</sup>候<sup>6</sup>如<sup>6</sup>一<sup>6</sup>カ<sup>6</sup>ノ<sup>6</sup>一<sup>6</sup>尽<sup>6</sup>之<sup>6</sup>難<sup>6</sup>ノ<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>ハ  
 既<sup>6</sup>新<sup>6</sup>リ<sup>6</sup>除<sup>6</sup>キ<sup>6</sup>候<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>誤<sup>6</sup>字<sup>6</sup>三<sup>6</sup>百<sup>6</sup>四<sup>6</sup>十<sup>6</sup>四<sup>6</sup>字<sup>6</sup>脱<sup>6</sup>字<sup>6</sup>十<sup>6</sup>餘<sup>6</sup>  
 字<sup>6</sup>行<sup>6</sup>字<sup>6</sup>十<sup>6</sup>餘<sup>6</sup>字<sup>6</sup>之<sup>6</sup>字<sup>6</sup>教<sup>6</sup>上<sup>6</sup>下<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>所<sup>6</sup>程<sup>6</sup>有<sup>6</sup>之<sup>6</sup>候<sup>6</sup>  
 何<sup>6</sup>レ<sup>6</sup>也<sup>6</sup>既<sup>6</sup>新<sup>6</sup>ノ<sup>6</sup>内<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>本<sup>6</sup>之<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>筆<sup>6</sup>ノ<sup>6</sup>候<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>新<sup>6</sup>解<sup>6</sup>候<sup>6</sup>  
 故<sup>6</sup>其<sup>6</sup>所<sup>6</sup>々<sup>6</sup>考<sup>6</sup>合<sup>6</sup>候<sup>6</sup>ハ<sup>6</sup>人<sup>6</sup>等<sup>6</sup>ハ<sup>6</sup>相<sup>6</sup>知<sup>6</sup>レ<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>但<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>本<sup>6</sup>程<sup>6</sup>  
 ノ<sup>6</sup>内<sup>6</sup>一<sup>6</sup>所<sup>6</sup>相<sup>6</sup>知<sup>6</sup>レ<sup>6</sup>不<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>而<sup>6</sup>新<sup>6</sup>更<sup>6</sup>且<sup>6</sup>又<sup>6</sup>既<sup>6</sup>新<sup>6</sup>ノ<sup>6</sup>  
 内<sup>6</sup>文字<sup>6</sup>誤<sup>6</sup>リ<sup>6</sup>多<sup>6</sup>ク<sup>6</sup>也<sup>6</sup>本<sup>6</sup>之<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>考<sup>6</sup>合<sup>6</sup>セ<sup>6</sup>候<sup>6</sup>上<sup>6</sup>人<sup>6</sup>多<sup>6</sup>ク  
 人<sup>6</sup>相<sup>6</sup>知<sup>6</sup>レ<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>其<sup>6</sup>内<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>相<sup>6</sup>知<sup>6</sup>レ<sup>6</sup>不<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>多<sup>6</sup>ク<sup>6</sup>御<sup>6</sup>存  
 候<sup>6</sup>一<sup>6</sup>共<sup>6</sup>義<sup>6</sup>理<sup>6</sup>兩<sup>6</sup>辨<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>新<sup>6</sup>更<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>人<sup>6</sup>等<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>不<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>而<sup>6</sup>  
 樹<sup>6</sup>ハ<sup>6</sup>委<sup>6</sup>細<sup>6</sup>相<sup>6</sup>知<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>而<sup>6</sup>御<sup>6</sup>存<sup>6</sup>候<sup>6</sup>和<sup>6</sup>律<sup>6</sup>モ<sup>6</sup>以<sup>6</sup>律<sup>6</sup>元  
 皆<sup>6</sup>是<sup>6</sup>可<sup>6</sup>御<sup>6</sup>存<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>任<sup>6</sup>候<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>致<sup>6</sup>増<sup>6</sup>減<sup>6</sup>候<sup>6</sup>御<sup>6</sup>存<sup>6</sup>相<sup>6</sup>見<sup>6</sup>へ<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>  
 殊<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>院<sup>6</sup>義<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>律<sup>6</sup>意<sup>6</sup>委<sup>6</sup>細<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>有<sup>6</sup>之<sup>6</sup>其<sup>6</sup>上<sup>6</sup>御<sup>6</sup>辨<sup>6</sup>ノ<sup>6</sup>仕<sup>6</sup>方<sup>6</sup>更  
 ノ<sup>6</sup>要<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>應<sup>6</sup>ジ<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>モ<sup>6</sup>委<sup>6</sup>細<sup>6</sup>ニ<sup>6</sup>合<sup>6</sup>符<sup>6</sup>急<sup>6</sup>リ<sup>6</sup>候<sup>6</sup>様<sup>6</sup>鏡<sup>6</sup>合<sup>6</sup>テ  
 置<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>以<sup>6</sup>律<sup>6</sup>字<sup>6</sup>ハ<sup>6</sup>御<sup>6</sup>辨<sup>6</sup>心<sup>6</sup>安<sup>6</sup>ク<sup>6</sup>工<sup>6</sup>サ<sup>6</sup>候<sup>6</sup>テ<sup>6</sup>一<sup>6</sup>入  
 申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>ト<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>也<sup>6</sup>而<sup>6</sup>御<sup>6</sup>存<sup>6</sup>ト<sup>6</sup>申<sup>6</sup>候<sup>6</sup>ハ

別  
 別  
 別  
 別

銀座 伊東屋製





和律上引令和相考候以和律八唐律ヲ大概共終  
 二用ヒ章程ノ下ニテ所考八候廉モ少々ノ由  
 重小  
 十惡(謀反謀大逆謀叛惡逆不道大不敬不睦不孝  
 不義內亂)ノ内和律ニハ不睦內亂下ニ條ヲ除キ  
 有之候是レハ朝廷ニ憚リ候也多ク由律ハ二依  
 下相見ハ申候但ニ隨大業中十惡ノ内ニ條ヲ除  
 才八惡ニ致(和律ニハ八處ト引)候先例ヲ申  
 七候莫ニ此節)

八議(議親議藩故議功議賢該能議議議貴議董)  
 ノ内議親議董ノ二條ヲ除キ大議ニ仕候是人而  
 王一姓ノ國ニテ國貴ト申莫無之故議董ノ一條  
 才除キ申候共相伴~~議親~~才已除キ候ト相見ハ  
 申候

贈劔(贈劔ハ贈劔金ナリ)ノ類ハ杖以下ハ喪  
 律上ハ杖一丁流居以上ハ流律より相増申候~~私~~  
 即天文ノ律無此節ハ是ハ日本ニハ天文字不白  
 由上ハ杖ト相見ハ申候朱載堉ノ樂書ノ表ノ内  
 二ニ此律ヲ批難~~私~~候才有之候異同ニテ也私

別

別

別

別

銀座 伊東屋製

用候

別

通 候 下 配 所 へ 遣 へ 下 唐 律 二 有 之 候 下 和 律 二 有 之 候 下 和 律 二  
 小 三 月 過 下 下 有 之 候 下 是 小 月 中 一 喪 服 短 力 下  
 故 二 此 禮 下 下 二 下  
 唐 律 二 流 外 下 此 禮 下 此 禮 下 初 位 上 有 之 候 下 是 小 月 中 一 喪 服 短 力 下  
 此 流 内 下 有 之 候 下 八 八 位 以 上 下 有 之 候 下 是 小 月 中 一 喪 服 短 力 下  
 國 二 日 中 二 位 階 一 位 上 九 位 此 禮 下 此 禮 下 初 位 上 有 之 候 下 是 小 月 中 一 喪 服 短 力 下  
 正 共 月 中 二 下 大 初 位 少 初 位 二 人 自 下 丁 下 着 也  
 候 初 二 初 位 下 未 入 流 人 心 二 刑 刑 小 下 刑 見 へ  
 申 候 道 士 女 冠 下 唐 律 二 有 之 候 下 小 刑 見 へ  
 大 有 之 候 下 是 小 月 中 二 下 人 道 教 無 之 候 二 此 禮 下

別

習 天 文 律 一 下 八 罪 議 有 之 候 下 刑 見 へ 候 賊 盜 律  
 一 内 監 守 自 盜 一 條 無 之 候 然 刑 監 臨 主 守 一 罪  
 一 下 有 之 候 一 八 是 八 後 在 一 人 宗 藩 二 候 支 下 刑  
 見 へ 申 候 期 親 下 下 礼 礼 下 二 等 親 禮 上 有 之 候 大 功  
 下 下 礼 礼 下 三 等 親 上 有 之 候 小 功 八 四 等 親 總 麻  
 八 五 等 親 上 有 之 候 是 小 月 中 二 小 期 大 功 小 功 總  
 麻 一 喪 服 一 新 喪 之 故 二 名 下 替 人 小 支 下 相 見 へ  
 申 候  
 候 初 一 者 而 親 是 疾 二 下 別 二 善 祭 一 人 十 ヶ レ 八  
 指 一 父 母 二 付 置 候 処 父 母 一 子 刑 果 以 一 人 刑 年

銀座 伊東屋製

別カ

別カ

別カ

別カ

計り有之十箇不相知候工其外ノ十箇之空ノ大  
 一、通ニテ此等ノ七和律ハ名例律ノ上下賦監律  
 在之外ノ和名官名坏ヲ替へ候迄一テ全律重律  
 也師弟ノ違メ相替ルコト無之由ニ候  
 有之和律ニハ官私學共同外又官校ヲ離レ候テ  
 註ニハ私學ノ者ヲ人見受業師ニ立テ不申由ニ  
 十、若シ私學ノ内ニ見受業師申出候テ律ノ  
 下ト指之ハ是ニ據テ方ニテ此等ノ  
 是ニ據テ方ニテ申出候ハ七十以上十五以下流刑  
 ニ收贖ルルト云條ニ十五以下ヲ和律ニ十六以  
 下ト指之ハ是ニ據テ方ニテ此等ノ

之假是ハ日中ニ人五ト控テ等ニ用已不申故ニ  
 即此ノ  
 總体刑ノ當リ着等ニテ人無出候ハ其斬ヲ絞  
 ニ改メ絞ヲ加役流ニ改メ遠流ヲ申流ニ改メ申  
 流ヲ近流ニ改メ流刑ヲ徒罪ニ改メ徒ノ年限ヲ  
 減ニ笞杖ト爲テ一ニ等程ヲ、ニ減ニ候多ク  
 和見ハ申候和律刑罰ノ位ハ唐律日ノ輕ク候如  
 多ク申候ハ謀反大道ノ縁止唐律ニハ伯叔父兄  
 弟之ノ遠流ト有之ハ和律ニハ祖孫兄弟ト有之  
 候

銀座 伊東屋製

形也如トヨ様ト相考申下  
 即律ト引合相考ト此即律ハ成程庶律ヲ根本ニ  
 任シト相見ハ康律ノ文字ヲ其終ニ用ニシ処又  
 ノ即坐ハ増減ニ有之ハ如体康律ハ五百條即律  
 ハ四百六十條ニ于如律ノ方少ナリ此等ハ正  
 共庶律ニ于之五條即律ニ五條ハ此也  
 明律ニ于ハ一節ニ集メ候故ニ五條少ナリ相見ハ  
 申候也此程ハ温ハ即律ノ方却テ即ノ外多クナ  
 ナリ即律四百六十條ノ内二百七十條程ハ庶律  
 ニ于ナリ百九十條程庶律ニ無之變柄ニ于ナリ

候康律五百條ノ内三百四十五條程即律ニ  
 元有之ハ百五十條程即律ニ無之變ニ此等ハ  
 即律ニ有之ハ于庶律ニ無之數ハ之宜即律ニ付  
 捌不内トナル第一氏トノ捌不内トナル一凌  
 ノ一凌ハ制斬ト註シ其法ハ之ヲ寸磔ニ付  
 又刃魁ニ餘箇十カヲ之メ常ハ其勢ヲ割キ女ハ  
 其閉ヲ画ニ候時ヲ出シ其命ヲ斬キ合節解ニ  
 其骨ヲ廻ニスルニ連杖ト于往流死ニ付ス杖  
 ヲ加ヘ小変入罪トナル毎罪ノ内ニ于刃裁  
 トハ姑夫裁婦ヲ刀誘引テ別所ニ至リ通裁ス

律  
 律  
 別  
 律

別

銀座 伊東屋製



曾下其人ノ品ニ依リ是等ノ擧メ方入細々ト  
 共テ其候扱又疑死連ウタカハレキ死ノ意有之  
 候其外細中ナレテ孰ニテ人盜死ニ人倍疑トテ疑  
 物ヲ一倍ニ殺ス所立候意有之曾如曰ク殿中  
 見下レ小器有之燭火ノ立テ様船束ニ置レ小  
 有之人ヲ殺シタル者ノ命ヲ即ケ候人細細トテ  
 此不遠風ハ意遣ニ依打毎ニ様ニ任小任法有之  
 上様ノ様此日ニ音聲仕小器有之通行人火ヲ粗  
 末ニ仕リ火更出レ小器有之市ノ人ヲ踏カレ申  
 候器有之火更ヲ見付人ニ知ラセス火ヲ消シ不  
 申器有之隣里ハ強盗無押入ル可殺已不申器有之  
 器ヶ去リ小器人ヲ捕ハ小節屋外人ニ詞ヲ掛ケ  
 爲捕小器有之殿中ニテ刀ヲ握ル小器有之節掛  
 留不申器ノ器有之或人財ヲ取ル可キ爲メ或人  
 身ノ難ヲ思ハレ可キ爲メ刀ヲ捨テ人ヲ捕ハ人  
 須ニ殺ス意レ行小器并押留不申器ノ意有之經  
 告ヲ以テ人ヲ拷問ニ掛ケ小器ヲ人及拷トテ其  
 者ヲ責問レ小器有之小右何レモ此傳ニ然ク  
 二小就中此傳ニ故殺ノ器有之小テ故傷ノケ條  
 無ニ此傳ニハ何レモ命取ニ者之小  
 總傳ノ器

銀座 伊東屋製

別冊

下棟ノ控電ハ大抵内ニ下十以内唐律ニ重クハ  
 施テ如律ニハ控ク任ル所多ク却テ其ノ重ク  
 十以内唐律ニ少クハ却テ其ノ輕クハ唐律ハ  
 重少キ方ニ此律ハ明律ハ大ニ輕クハ唐律  
 律ニ毛官堂ノ捌キ殊ノ外<sup>テ</sup>數<sup>ハ</sup>是ハ官人ノ  
 假ニ不<sup>レ</sup>同却律ハ故<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>リ申<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup>テ  
 畢竟宿息ノ方ニテ市<sup>ニ</sup>重<sup>レ</sup>キ書<sup>ハ</sup>刑ノ様<sup>子</sup>ハ唐律ハ  
 重<sup>ク</sup>テ<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>ニ書<sup>キ</sup>何<sup>レ</sup>也<sup>者</sup>毛<sup>ハ</sup>合<sup>レ</sup>包<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>リハ  
 以<sup>レ</sup>律<sup>ハ</sup>管<sup>古</sup>ニ<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>ハ故<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>リ重<sup>ク</sup>キ方<sup>ニ</sup>テ  
 申<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>日<sup>外</sup>内<sup>外</sup>為<sup>レ</sup>補<sup>テ</sup>進<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>欠<sup>レ</sup>落<sup>レ</sup>毛<sup>ハ</sup>テ<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>類<sup>ノ</sup>尋<sup>ニ</sup>唐<sup>ノ</sup>

教<sup>ハ</sup>以<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>察<sup>レ</sup>陰<sup>ノ</sup>法<sup>ニ</sup>障<sup>リ</sup>可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>休<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>氏<sup>ノ</sup>念<sup>ノ</sup>入<sup>レ</sup>  
 リ<sup>レ</sup>文<sup>ニ</sup>重<sup>ク</sup>テ<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>抵<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>審<sup>ノ</sup>出<sup>レ</sup>末<sup>ニ</sup>申<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>ハ<sup>レ</sup>唐<sup>ノ</sup>律<sup>ハ</sup>  
 下<sup>レ</sup>付<sup>テ</sup>疏<sup>ノ</sup>新<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>番<sup>ノ</sup>按<sup>ニ</sup>觀<sup>レ</sup>令<sup>ノ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>ハ  
 在<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>和<sup>レ</sup>律<sup>ニ</sup>卷<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>形<sup>ノ</sup>律<sup>ノ</sup>其<sup>レ</sup>終<sup>ニ</sup>  
 甲<sup>ニ</sup>ハ<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>刑<sup>ノ</sup>考<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>工<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>卷<sup>ニ</sup>毛<sup>ハ</sup>此<sup>レ</sup>律<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>  
 リ<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>只<sup>レ</sup>今<sup>ノ</sup>律<sup>ニ</sup>案<sup>ニ</sup>已<sup>レ</sup>來<sup>リ</sup>下<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>條<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>  
 罷<sup>成</sup>以<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>其<sup>レ</sup>律<sup>令</sup>之<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>其<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>此<sup>レ</sup>律<sup>ハ</sup>  
 諸<sup>令</sup>ハ<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>任<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>疏<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>引<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>  
 下<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>本<sup>ノ</sup>凡<sup>レ</sup>條<sup>ニ</sup>合<sup>レ</sup>レ<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>却<sup>レ</sup>律<sup>ハ</sup>其<sup>レ</sup>  
 品<sup>々</sup>其<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>勿<sup>レ</sup>論<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>句<sup>ノ</sup>居<sup>ノ</sup>大功<sup>ノ</sup>以上<sup>ノ</sup>親<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>

銀座 伊東屋製

内ニ工高ノ業ヲ専ラシメテ之ノ有之ハ得ル  
 官人ニ不熟支指之ハ唯今日本ニテ侍ト南島人  
 卜種姓令レ候支親朝ノ遺凡我ニ遺則ハ異國  
 ハ既朝ニ至リ候テ此凡大ニ支之掌相大臣ノ子  
 姪也弟ニ毛南人稱之ハ毛ノ指之ハ少ニ毛恥ト  
 不熟様ニ相見ハ外且又流傳ニハ業戸ノ外ニ大  
 常寺音声人ハ代々言葉ノ家業ニハ工ハ種類各  
 別ニテ立テ有之外工共平人ト婚姻ヲ毛通シ樹  
 毛田様ニ此種トテ賜ヤ者ニテ無之ハ日本ニテ  
 古ヨリ包指子ノ歎ヲ人賜者ニ親レ業人ハ官加  
 階ヲ毛初レ平人ト替リ毎之ハ丁也送凡ト相見  
 ハ申ハ初レ至リハテ人無テ計ニテ昔業ヤハ  
 親レ候得者皆焼ヤ者ニ業成外且又五位以上ハ  
 妾ヨリ上ニ勝ト申入者有之妻腰妾トテ之ハ  
 此種ト六位以下熱人近ハ妻ト妾トニ別ニテ此  
 種ハ勝ハ妻ノ如ク官位ヲ致レ申ハ支相見ハ申  
 小日來ノ古作妻ノ如ク者其數多ク相見ハ申ハ  
 此儀明朝杯ニ人無之支ニコト候且又流傳ニハ  
 奴婢ヨリ上ニ部曲ト申入者有之候和律ニハ部  
 曲トハ家人ト改メ有之ハ此部曲ハ平人ト毛婚

銀座 伊東屋製



姻ヲ重ニ申シ只今秋國ニテ申シ上ハ身十ニ  
 成家ノ家来杯ノ様十ニ昔ト相見ハ申シ以朝ニ  
 ハ儀無クサ外有ノ節由奴婢ノ家他ハ預リ不  
 申シ罪ハ死罪ニテモ元人ノ心骨ヲテ死罪ヲ  
 免シト有之ハ是又申シ凡供ニ合ニ申シ以  
 朝ニテ人儀無ク申シ且又自家ノ容女婢ヲ  
 二ハ女房ニハ不罷成テ相見ハ容女ト申シ  
 ハ節由ノ娘ニ由テ是又相見ノ供ニ合ニ申  
 シ以律ニハ儀相見ハ不申シ且又五品以上ノ  
 人ハ重逆以上ノ罪ニテ無之ハ正ハ死罪ノ人ヲ

折罪ニモ殺罪ニモ不申付但今ノ宅ニテ有減為  
 刑ト是又相見ニテ切腹申付ハ義比遺ルニ此  
 節ハ朝ニハ代義無ク申シ又家内ニテ是夏  
 有之ハ常強盗ハ勿論和共ニテ元家内ノ者打捕  
 以有之ハ是又相見ノ供ニ合ニ申シ以朝ニハ  
 ハ無之ハ且又他人ノ地ニテ他中ノ者堀出シハ  
 申シ上ノ堀主ト申シ今今取以テ打之是又  
 只今而舎ニ有之ハ法ニ此節ハ且又田地營實ノ  
 下永業田賜田ハ永代ニ營致申シ下不共ハ口  
 命田物業ニハ由有之ハ此方ニ永代營實法取ト

由

銀座 伊東屋製

其

申ハハ此法ノ片端相残リ申テ下ニテ可有之ハ  
 且又控テ下ニ此等ハ工共書上申ス文字以朝  
 ノ書籍ニハ皆々買上有之ハ唐律ニハ皆賣買  
 卜有之ハ是亦和律ノ傳來ノ詞ト相見ハ申下  
 且又欠所ヲト由テ詞里朝ノ書籍ニテハ外ノ書  
 ニハ見學リ不申下工共書律ニハ有之ハ今日中  
 ニ此詞有之ハ下ハ和律ノ詞在上ニ残リ下ト相  
 見ハ申下且又衛士ノ横刀ヲ帶下下唐律ニ有之  
 下日本ノ令並ニ延喜式ニ横刀ヲ「及下」ト訓  
 テ付下下衛士ノ帶ハ更ニ有之ハ横刀ト申又詞  
 墨子ノ書ハ外ニ見當リ不申下日本ノ衛士ノ太  
 刀ハ唐朝ノリ何来ト相見ハ申下且又過所ト申  
 ス下唐律ニモ和律ニモ有之ハ下漢所申形ノ新  
 ニ此等ハ只今過所控ト申更ニ有之ハ其始漢所  
 申形ヲ改下漢所ヲ自由ニ從來和ニハ般ノ下ニ  
 ハ唯今ハ般ノ名ニ残リ申下ト相見ハ申下且又  
 謀及大道ノ縁生ニ出義入道ニハ罪掛リ不申下  
 有之ハ出義ハ他家ハ義不ニ急下下ニ下下道  
 ハ出家任下者ノ下ニ此等ハ和律モ此等ノ下此  
 下下平ノ下ハニ「甲宗盛書」掛出家ノ「和」ヲ

銀座 伊東屋製



鳥

鳥

此價高くなりたる人其本ハ中々少き事ハ  
 小得共帰す事三三止り三八一止り小  
 くなりたる本ハ何れなる事ハ  
 答へ曰ふ依川に埋り荷物ハ之ケの了たの貨銀  
 五荷物の價ニこれ小又昔ハ水代物の下へ元船  
 着小本今則尤なりニ依て是又ハ之ケの價金を  
 小抑小と申小又地廻りの品ハ川に埋り  
 小の棹鉄と取立海小不同有之小付加の貨  
 銀の價ニ抑小其申小又ハ馬杯一付ニ下し  
 小荷物ハ割増鉄と以て價ニ抑小共申小又ハ  
 南鐘吹出さハ小次ハ丁銀を吹漢しニ未銀  
 二為したる小依り丁銀の値ハ抑小を以て  
 小中り今ケの位ハ之未判金の重なり小  
 の数を増小を以て位を修く古ハ銀東本丁月  
 を一兩と西本銀通申一定められし  
 小依り今十七人其銀ニ記名多し此銀  
 天下一銀六十目通申之申中と銀のあり  
 有り次第ハ是等銀の神策識ニ小の神  
 有り小銀と申之并ハ銀ニ依り未判を吹出

生

銀座 伊東屋製



別行

色く難く能く其術を知りて在東の海上雲加を  
 所小人生者の物も自ら安くす。狼狽騰英の患  
 切し出づ。一民を周して利を食する。の雲加を去  
 し。これ我か得か。又せん。とす。有る。成。果。子。二  
 より。之。自。然。と。如。利。の。以。法。を。増。す。人。利。を。去。く。増  
 し。之。遂。に。諸。物。も。貴。く。成。ぬ。米。也。と。云。す。の。何。故  
 二。か。く。は。あり。さ。く。あり。ち。う。と。云。へ。今。天。下  
 の。米。少。なく。し。て。云。は。は。其。日。暮。し。の。文。代。あり。伊  
 越。之。米。ハ。少。く。奉。り。し。甲。ル。ハ。酒。造。之。勢。す。米。ハ。少  
 け。り。計。り。難。し。既。に。株。券。酒。造。り。を。造。り。出  
 す。米。少。く。一。を。以。て。造。れ。と。仰。出。す。心。し。元。禄  
 の。頃。の。造。り。申。す。り。ハ。今。の。三。分。一。の。方。過。半。多。り  
 あり。殊。に。其。米。穀。酒。之。勢。す。の。ミ。カ。ハ。近。米。ハ。彼。深  
 巧。之。よ。奉。り。之。右。之。勢。す。計。り。も。計。り。難。し。其。上。造  
 り。申。す。人。ハ。古。の。米。計。り。之。以。ら。す。作。る。者。も。烟。草  
 又。ハ。草。花。也。と。世。甲。の。者。に。土。地。を。賣。り。ぬ  
 ば。より。一。人。農。を。離。る。ハ。天。下。の。米。の。計。を。受。る  
 と。如。也。い。ふ。者。に。既。に。去。る。午。年。の。人。別。帳。を。見  
 り。其。以。前。の。記。し。人。數。を。くら。し。し。に。百。四。十  
 万人。減。し。ぬ。其。勢。年。又。其。前。の。改。定。記。し。皆。ハ。い。ふ

銀座 伊東屋製

204  
 別行  
 色く難く能く其術を知りて在東の海上雲加を  
 所小人生者の物も自ら安くす。狼狽騰英の患  
 切し出づ。一民を周して利を食する。の雲加を去  
 し。これ我か得か。又せん。とす。有る。成。果。子。二  
 より。之。自。然。と。如。利。の。以。法。を。増。す。人。利。を。去。く。増  
 し。之。遂。に。諸。物。も。貴。く。成。ぬ。米。也。と。云。す。の。何。故  
 二。か。く。は。あり。さ。く。あり。ち。う。と。云。へ。今。天。下  
 の。米。少。なく。し。て。云。は。は。其。日。暮。し。の。文。代。あり。伊  
 越。之。米。ハ。少。く。奉。り。し。甲。ル。ハ。酒。造。之。勢。す。米。ハ。少  
 け。り。計。り。難。し。既。に。株。券。酒。造。り。を。造。り。出  
 す。米。少。く。一。を。以。て。造。れ。と。仰。出。す。心。し。元。禄  
 の。頃。の。造。り。申。す。り。ハ。今。の。三。分。一。の。方。過。半。多。り  
 あり。殊。に。其。米。穀。酒。之。勢。す。の。ミ。カ。ハ。近。米。ハ。彼。深  
 巧。之。よ。奉。り。之。右。之。勢。す。計。り。も。計。り。難。し。其。上。造  
 り。申。す。人。ハ。古。の。米。計。り。之。以。ら。す。作。る。者。も。烟。草  
 又。ハ。草。花。也。と。世。甲。の。者。に。土。地。を。賣。り。ぬ  
 ば。より。一。人。農。を。離。る。ハ。天。下。の。米。の。計。を。受。る  
 と。如。也。い。ふ。者。に。既。に。去。る。午。年。の。人。別。帳。を。見  
 り。其。以。前。の。記。し。人。數。を。くら。し。し。に。百。四。十  
 万人。減。し。ぬ。其。勢。年。又。其。前。の。改。定。記。し。皆。ハ。い。ふ







聖

八草永を飾りし時々下流をあらざる上流の境  
 草字の草字牛かせ様せんは福々の日先の善法を  
 ちまか樹子たうを際け八木を縛り抱えすお預  
 山まきまきとてけりけり之に依て只作毛を流  
 すわいけけけとてけりけりけりけりけりけりけり  
 懐り有りて辰あからませすしと金を没くるる  
 吾好より起りぬ善力の念し生ハ第一中智の人  
 利のよ好人と利度有るまきとてけりけりけりけり  
 かけめい清海の法流流流流流流流流流流流流流  
 巧なる漁獲をし故に魚をけりけりけりけりけりけり

漁獲もたうとて名弟子漁家を主とてぬれ八  
 中舟の中になく造り造り造り造り造り造り造り  
 此の漁の又廣運にあらずしれと云なり久し  
 くおとろくたのぬと魚のましと云なり各作時  
 ちしと山林の力をあらぬ其盛衰ながらしめんか  
 持てて網の目定めたる人漁業の盛衰ながらし  
 めん為めあ水凡智の及あ初ハ作す強に下着る  
 とその昔昔人利に心を可あらざる強に下着る  
 八藤恥の心流遠さけりけりけりけりけりけりけり  
 予人と思ふなりとてけりけりけりけりけりけりけり

米

銀座 伊東屋製

業

従

心の修業を専らする事を得ず作毛とて其  
 のひやく田徳金三二とて横銀并税治業増  
 めのハ許ルとを捨て末の多しとある事  
 に此ありと物重て候下の財源通申事ハ士農  
 工商の位定り程よくして迄考らるるに因て新  
 通事申す今ハ立高盛事士農おとろぬと表  
 おとろく行けん父母工商の後ハ著しく減く候  
 りゆく候と農今いふこと減しぬルハ諸侯の  
 文代小場ありより今ハ半は之計とある其收物  
 半減しぬる上何となく業の所子計り

事手重

業

の事手重人ハ出入平均ありしに今も人の  
 有り候物も又普通あり候事人ハ通年  
 多し或は人を減し又ハ是物申金を去付け又  
 ハ運物へ物價高へす又ハ借金して返さ  
 め又ハ家中は福を減す候に工商も物損を  
 すか上武士がたよりり町人を其役新格式  
 者業へ申す事とて何れ目ら著る事ハ有限  
 と云ふ候事心付しぬ諸侯代々如く人を減  
 しぬるに候事候にハかからざる事候事  
 の事候事候事候事候事候事候事候事候事

銀座 伊東屋製

屋 假令

隣

別行

今由りし本綿市しと 棉業種 下  
 向形は仕入 減しぬる 一 証するを 之く 價を 市  
 くし 舟の 来り 次第 儼し 下 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿  
 今由りし本綿市しと 棉業種 下  
 向形は仕入 減しぬる 一 証するを 之く 價を 市  
 くし 舟の 来り 次第 儼し 下 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

銀座 伊東屋製







21

沈?

するに利勤利術の私智をすしちるよき起る所の  
 埋しん財か為に貨鈔の増しちるル土木の盛ん  
 けし山埋山荒人と米を捨末に飯し米を焼き金  
 玉黄と日視日前のるのと思ふ天下の蓄積の事  
 常なく天下の勢を其日暮しの代々の如くありし  
 小掛直を向して世中の物を南あるの程しら  
 す買求むる者を見りて進歩に及ぶし皆悉教す  
 ちれと書信の一二の事しなり其教すなりちれ  
 い下を治るる小吏等の其此類の如く人と有り  
 乙能く其るを増くも其都て教とあり新令  
 老幼をを<sup>異</sup>するあり遠く古へに立ち入り事  
 かの<sup>純</sup>とせしめを<sup>異</sup>の次の事にもありなりハ  
 湯抄の傳平準し之自<sup>切</sup>ら士表工商の位備有り  
 多銀鏡の位平準するも<sup>切</sup>天下の勢善  
 老幼を小ハ<sup>異</sup>忘たを<sup>切</sup>れハ<sup>切</sup>のさかるとル  
 9に<sup>切</sup>の何方<sup>切</sup>なるも<sup>切</sup>の多<sup>切</sup>あり<sup>切</sup>され  
 ハ公論をよく知り一條の法説り人目ルかけす  
 海軍世中の徒ハ手足の運如あり程に<sup>切</sup>入れ<sup>切</sup>ん  
 物商多あり老<sup>切</sup>り<sup>切</sup>し<sup>切</sup>の<sup>切</sup>名<sup>切</sup>なり<sup>切</sup>る<sup>切</sup>ル<sup>切</sup>今<sup>切</sup>ん  
 乙ハ<sup>切</sup>ち<sup>切</sup>や<sup>切</sup>す<sup>切</sup>る<sup>切</sup>新<sup>切</sup>け<sup>切</sup>れ<sup>切</sup>ハ<sup>切</sup>の<sup>切</sup>名<sup>切</sup>を<sup>切</sup>去<sup>切</sup>らす<sup>切</sup>新<sup>切</sup>業<sup>切</sup>を

銀座 伊東屋製



嘉平打續き人々急慢者便便便便持持るあ  
 小使の事より多し今の小使は五ヶ年を過りし  
 節便ちりぬる者便を替へし節便を有するは保  
 ちり此極北を見出奉取の心を引きぬ小使の  
 者便を止め節便の心を止むるは節便の心  
 を捨て節便の心を奪ふ人々強利節便の心  
 節り果はちりぬる急いづれはよしと思ふぬ  
 一し其いづれは今様流りの流もやうの類は  
 此かすぬかに色にかさく色も同なりしからぬ  
 とうちあかりて若葉ならす且損せすしと云  
 らちんつといふは此れ小使の事なり持か  
 氣の身りしにへは節便より小使の心奪  
 き心は如様ぬる酒池肉林の樂しさを奪し一  
 夜千金を擲ちらるる人々昔の今ハ巧に  
 いはれりちりぬる一程の心はしめを奪し  
 金銀を擲ちらるるしと云ふ上策と人思ふ  
 ちりさ小使の急便人又いしへは事か  
 世所をよく思ひて聲をよき引ちらるる節  
 引きぬ小使の心奪起る節はこれの心奪  
 ら別器補納りてはしへは此士とちかく自

銀座 伊東屋製

嘉平打續き人々急慢者便便便便持持るあ  
 小使の事より多し今の小使は五ヶ年を過りし  
 節便ちりぬる者便を替へし節便を有するは保  
 ちり此極北を見出奉取の心を引きぬ小使の  
 者便を止め節便の心を止むるは節便の心  
 を捨て節便の心を奪ふ人々強利節便の心  
 節り果はちりぬる急いづれはよしと思ふぬ  
 一し其いづれは今様流りの流もやうの類は  
 此かすぬかに色にかさく色も同なりしからぬ  
 とうちあかりて若葉ならす且損せすしと云  
 らちんつといふは此れ小使の事なり持か  
 氣の身りしにへは節便より小使の心奪  
 き心は如様ぬる酒池肉林の樂しさを奪し一  
 夜千金を擲ちらるる人々昔の今ハ巧に  
 いはれりちりぬる一程の心はしめを奪し  
 金銀を擲ちらるるしと云ふ上策と人思ふ  
 ちりさ小使の急便人又いしへは事か  
 世所をよく思ひて聲をよき引ちらるる節  
 引きぬ小使の心奪起る節はこれの心奪  
 ら別器補納りてはしへは此士とちかく自



中書と曰其定ニ至リシ其後ニ之介供ル又其  
 可ク~~カ~~カ~~カ~~此~~カ~~カ~~カ~~引~~カ~~カ~~カ~~一~~カ~~カ~~カ~~又~~カ~~  
 此~~カ~~カ~~カ~~行~~カ~~カ~~カ~~一~~カ~~カ~~カ~~又~~カ~~  
 人~~カ~~カ~~カ~~只~~カ~~カ~~カ~~引~~カ~~カ~~カ~~  
 へ~~カ~~カ~~カ~~是~~カ~~カ~~カ~~故~~カ~~カ~~カ~~  
 道~~カ~~カ~~カ~~引~~カ~~カ~~カ~~  
 や~~カ~~カ~~カ~~又~~カ~~カ~~カ~~  
 行~~カ~~カ~~カ~~下~~カ~~カ~~カ~~  
 の~~カ~~カ~~カ~~引~~カ~~カ~~カ~~  
 引~~カ~~カ~~カ~~

とあるの

